

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（140）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（X X IX）

（伊集院IC～市来IC間）

いち の はら
市ノ原遺跡

（第3地点）

（鹿児島県日置市東市来町）

（第1分冊）

2009年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
（140）

市ノ原遺跡
（第3地点）

第1分冊

二〇〇九年三月
鹿児島県立埋蔵文化財センター





古墳時代出土遺物



縄文時代前・中期出土遺物



縄文時代早期出土遺物



遺跡遠景

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島 I C～市来 I C間）の建設事業に伴って、平成 8 年度から平成 11 年度にかけて実施した日置市（旧日置郡東市来町）に所在する市ノ原遺跡第 3 地点の発掘調査の記録です。

調査の結果、市ノ原遺跡は各時代の遺構や遺物が多数発見され、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世にわたる複合遺跡であることが明らかになりました。なかでも、第 3 地点では、縄文時代早期の集石、縄文時代前期における大量の土器、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡やこれらの遺構に伴って出土した遺物が発見され、これらは南九州における縄文時代・弥生時代・古墳時代の生活や他地域との文化を比較・研究する上で貴重な資料となりました。

本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に当たりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所、日置市教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	いちのはらいせきだいさんちてん									
書名	市ノ原遺跡第3地点									
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
巻次	XXIX									
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書									
シリーズ番号	140									
編集者名	富田逸郎, 鶴田静彦, 抜水茂樹, 市村哲二, 池畑耕一									
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター									
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811									
発行年月日	西暦2009年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間 ○ / / "	調査面積 m ²	調査起因		
		市町村	遺跡番号							
いちのはらいせき 市ノ原遺跡 第3地点	かごしまけん ひおきし 鹿児島県日置市	46362	29-60	31° 40' 7.4"	130° 19' 42"	確認調査 199610 ~199612	400	南九州西回 り自動車道 鹿児島道路 建設		
	ひがしいちきちようゆだ 東市来町湯田					19980506 ~19990319	7,600			
	かみいちのはら 字 上市ノ原					31° 40' 16.9"	130° 19' 29"		19990524 ~19990712	12,700
	しもいちのはら 字 下市ノ原								400	
せとのくち 字 瀬戸ノ口										
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項		
市ノ原遺跡 第3地点	散布地	旧石器時代			細石核・細石刃核・使用痕剥片・剥片石器			調査後の遺跡 調査範囲につ いては消滅し たが、その他 の部分につい ては遺跡が残 存する。		
	集落	縄文時代早期	集石	73基	打製石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器・ 石錐・異形石器・石核・磨石・敲石・石皿 岩本式土器・中原式土器・前平式土器・吉田 式土器・石坂式土器・桑ノ丸式土器・山形押 型文土器・手向山式土器・平椀式土器・塞ノ 神式土器・苦浜式土器 轟式土器・曾畑式土器 深浦式土器・船元式土器・阿高式土器 指宿式土器・御領式土器・市来式土器 上加世田式土器・入佐式土器・黒川式土器 磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石 石皿・礫器・剥片・チップ					
	集落	縄文時代前期 縄文時代中期 縄文時代後期 縄文時代晩期								
	集落	弥生時代	竪穴住居跡 貝層を含む土坑	4軒 1基	刻目突帯文土器・高橋式土器・入来式土器 吉ヶ崎式土器・黒髪式土器・須玖式土器					
	集落	古墳時代	竪穴住居跡 貝層を含む土坑	4軒 1基	中津野式土器・東原式土器・辻堂原式土器・ 古式須恵器					
集落	古代~中世	掘立柱建物跡 土師皿埋納土坑 土坑 ピット 溝 道跡 焼土跡	19棟 1基 69基 多数 5条 2条 10基	土師器・内黒土師器・須恵器・青磁・白磁・ 青花・瓦質土器・陶磁器・土製品・滑石製石 鍋						
散布地	近世				肥前系陶磁器・在地系陶磁器					
遺跡の概要	市ノ原遺跡は、旧石器時代から近世までの長期にわたる複合遺跡で、第3地点で主体となるのは、縄文時代と弥生時代である。縄文時代早期は数々の土器型式が出土していることから、連続とした生活が営まれていたことがわかる。また、前・中期には近畿・瀬戸内系の搬入土器が数々出土している。弥生時代においても同様に在地系の土器に供伴して搬入土器が出土していることから、人や技術の交流が盛んに行われていたことがわかる。この事実が、南九州の人々の生活・生業形態にどのような影響を与えたのかを考えるうえで市ノ原遺跡群は重要な遺跡であると言える。									

例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）建設に伴う市ノ原遺跡第3地点の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県日置市（旧日置郡 東市来町）湯田に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現 国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成8年度から平成11年7月12日まで実施し、整理作業報告書作成は、平成18・20年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 遺物番号は、各時代ごとに通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は、各調査年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は有限会社スカイサーバイ九州に委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て富田逸郎・鶴田静彦・抜水茂樹が行った。
- 10 土器の実測・トレースの一部は、整理作業員の協力を得て抜水が行い、一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、監修は鶴田が行った。
- 11 石器の実測・トレースの一部は、整理作業員の協力を得て抜水が行い、一部は株式会社文化財環境整備研究所、株式会社九州文化財研究所に委託し、監修は富田が行った。
- 12 自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 13 蛍光X線による土器付着顔料の分析は、内山伸明が行った。
- 14 遺物の写真撮影は、牛嶋茂氏（独立行政法人奈良文化財研究所）に撮影の指導を受けて、鶴田、吉岡康弘が行った。
- 15 本書の編集は、鶴田・抜水が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

第Ⅰ～Ⅲ章，第Ⅴ章，第Ⅷ章第4節	鶴田静彦
第Ⅳ章，第Ⅴ章第3節，第Ⅶ章第1節	富田逸郎
第Ⅷ章第2節	池畑耕一
第Ⅴ章第3節，第Ⅵ章，第Ⅷ章第2・3節，第Ⅸ章	抜水茂樹
第Ⅷ章第1・2節	市村哲二
第ⅩⅠ章	各節末に記載
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、市ノ原遺跡第3地点の遺物注記の略号は「市3」である。

総目次

【第Ⅰ分冊】

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 西回り自動車道建設に伴う発掘調査に至るまでの経過

第2節 調査に至るまでの経過

第3節 調査の組織

第4節 調査の経過（日誌抄）

第Ⅱ章 位置及び環境

第1節 遺跡の位置及び自然環境

第2節 歴史的環境

第3節 周辺遺跡

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の概要

第2節 遺跡の地形及び層序

第Ⅳ章 旧石器時代の調査

第1節 ナイフ形石器文化期の調査

第2節 細石刃文化期の調査

【第Ⅱ分冊】

第Ⅴ章 縄文時代の調査

第1節 遺構

第2節 遺物（土器）

第3節 遺物（石器）

【第Ⅲ分冊】

第Ⅵ章 弥生時代の調査

第1節 遺構

第2節 遺物

第Ⅶ章 古墳時代の調査

第1節 遺構

第2節 遺物

第Ⅷ章 古代から中世の調査

第1節 遺構

第2節 古代の遺物

第3節 中世の遺物

第4節 土坑・ピット群の調査

第Ⅸ章 近世の調査

第1節 遺物

第Ⅹ章 科学分析

第Ⅺ章 発掘調査のまとめ

遺物観察表

【第Ⅳ分冊】

写真図版

第Ⅰ分冊目次

巻頭図版…………… 1-8

序文…………… 9

報告書抄録…………… 10

例言…………… 12

目次…………… 13-14

第Ⅰ章 発掘調査の経過…………… 15

第1節 西回り自動車道建設に伴う発掘調査に至るまでの経過 15

第2節 調査に至るまでの経過…………… 22

第3節 調査の組織…………… 22

第4節 調査の経過（日誌抄）…………… 25

第Ⅱ章 位置及び環境…………… 35

第1節 遺跡の位置及び自然環境…………… 35

第2節 歴史的環境…………… 36

第3節 周辺遺跡…………… 38

第Ⅲ章 発掘調査の概要…………… 50

第1節 発掘調査の概要…………… 50

第2節 遺跡の地形及び層序…………… 54

第Ⅳ章 旧石器時代の調査…………… 58

第1節 ナイフ形石器文化期の遺物…………… 58

第2節 細石刃文化期の遺物…………… 61

第 I 分冊挿図目次

第 1 図	市ノ原遺跡位置図	11	第 26 図	旧石器時代Bブロック細石刃 (1)	65
第 2 図	南九州西回り自動車道関係遺跡位置図	20	第 27 図	旧石器時代Bブロック細石刃 (2)	66
第 3 図	市ノ原遺跡調査地点位置図	21	第 28 図	旧石器時代Cブロック細石刃核 (1)	67
第 4 図	周辺遺跡位置図	41	第 29 図	旧石器時代Cブロック細石刃核 (2)	68
第 5 図	周辺遺跡遺物 (1)	42	第 30 図	旧石器時代Cブロック細石刃核 (3)	69
第 6 図	周辺遺跡遺物 (2)	43	第 31 図	旧石器時代Cブロック細石刃 (1)	70
第 7 図	周辺遺跡遺物 (3)	44	第 32 図	旧石器時代Cブロック細石刃 (2)	71
第 8 図	周辺遺跡遺物 (4)	45	第 33 図	旧石器時代Dブロック細石刃核 (1)	72
第 9 図	周辺遺跡遺物 (5)	46	第 34 図	旧石器時代Dブロック細石刃核 (2)	73
第 10 図	周辺遺跡遺物 (6)	47	第 35 図	旧石器時代Dブロック細石刃	74
第 11 図	周辺遺跡遺物 (7)	48	第 36 図	旧石器時代Eブロック細石刃核 (1)	75
第 12 図	周辺遺跡遺物 (8)	49	第 37 図	旧石器時代Eブロック細石刃核 (2)	76
第 13 図	発掘調査範囲	51	第 38 図	旧石器時代Fブロック細石刃核	76
第 14 図	全土器出土状況	52	第 39 図	旧石器時代E, Fブロック細石刃	77
第 15 図	全石器出土状況	53	第 40 図	旧石器時代環状分布内細石刃核 (1)	78
第 16 図	土層断面図 1	55	第 41 図	旧石器時代環状分布内細石刃核 (2)	79
第 17 図	土層断面図 2	56	第 42 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (1)	80
第 18 図	土層断面図 3	57	第 43 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (2)	81
第 19 図	旧石器時代ナイフ形石器	58	第 44 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (3)	82
第 20 図	旧石器時代遺物出土状況	59	第 45 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (4)	83
第 21 図	旧石器時代Aブロック細石刃核 (1)	60	第 46 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (5)	84
第 22 図	旧石器時代Aブロック細石刃核 (2)	61	第 47 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (6)	85
第 23 図	旧石器時代Aブロック細石刃	62	第 48 図	旧石器時代環状分布内細石刃	86
第 24 図	旧石器時代Bブロック尖頭器, 細石刃核 (1)	63	第 49 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃 (1)	86
第 25 図	旧石器時代Bブロック細石刃核 (2)	64	第 50 図	旧石器時代ブロック外出土細石刃 (2)	87

第 I 分冊表目次

第 1 表	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 遺跡一覧表 (1)	18	第 3 表	周辺遺跡 (1)	38
第 2 表	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 遺跡一覧表 (2)	19	第 4 表	周辺遺跡 (2)	39

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 西回り自動車道建設に伴う発掘調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成 13 年 1 月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成 8 年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成 3 年 6 月に伊集院 I C と市来 I C 間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27 か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成 8 年度から平成 11 年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。なお事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

- 1 一ノ谷…… 日置市伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高 90 m～95 m の丘陵端部に位置し、調査面積は 1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に出土した。
- 2 永迫平…… 日置市伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約 150 m の小台地上に立地している。調査面積は 20,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の 2 か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には 9 軒の住居跡を始め、3 基の連穴土坑と 9 基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫 A …… 日置市伊集院町下谷口字下永迫の標高約 85 m～110 m のやせ尾根に挟まれた谷間に立地し、調査面積は 3,100㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……… 日置市伊集院町下谷口の標高約 90 m～100 m の山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は 10,000㎡である。縄文時代早期の集石 4 基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が出土した。
- 5 上山路山… 日置市伊集院町大田字上山路山の標高約 130 m のシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と谷頭を含んだ、かなり急な斜面からなる調査面積は 6,300㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期）、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは、縄文時代早

期の遺構で、道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

- 6 大田城跡… 日置市伊集院町大田字下城山迫の標高約 120 mの台地上に所在する。調査面積は 3,500㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が出土した。
- 7 堂平窯跡… 日置市東市来町美山の標高約 85 m～ 92 mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は 3,500㎡で、窯、作業場、物原が検出された。窯は長さ約 30 m、幅 1.2 m、傾斜角 17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・播鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭…… 日置市東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約 80 m～ 100 mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は 7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石 8 基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式・黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く出土した。
- 9 雪山…… 日置市東市来町美山字雪山の標高約 95 mの台地東端に立地する。調査面積は 3,100㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石 2 基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原・土坑等から薩摩焼（茶家・土瓶・播鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に出土した。
- 10 猿引…… 日置市東市来町長里字猿引の標高約 110 m～ 115 mの尾根状の台地に立地する。調査面積は 800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群 1 基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原…… 日置市東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約 66 mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は 2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4 間× 4 間・総柱）、製鉄に関する遺物（鞆羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く出土した。
- 12 向榕城跡… 日置市東市来町伊作田の標高約 50 mの独立台地上に所在する。調査面積は 16,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の堅穴住居跡や中世～近世の空堀・帯曲輪・堀切・堅穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などの中世山城の遺構が検出された。
- 13 堂園平…… 日置市東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約 50 mの平坦地に立地する。調査面積は 6,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群 9 基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代

の集石4基・吉田式・塞ノ神式・轟式土器等が出土している。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里…………… 日置市東市来町伊作田字今里の標高約 65 mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は 11,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が出土した。
- 15 市ノ原…………… いちき串木野市市来町大里字上ノ原前から日置市東市来町湯田字市ノ原に至る標高約 50 m台地西側に所在する。調査面積は 81,500㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代(早期～晩期)、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が検出された。
- 16 上ノ原…………… いちき串木野市市来町大里の東シナ海を望む標高約 40 mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面、調査面積は 4,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土し、古墳時代は竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が出土した。

※ 刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(31)	2001.3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(32)	2002.3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(33)	2002.9
「市ノ原遺跡(第1地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(49)	2003.3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50)	2003.3
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53)	2003.3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(62)	2003.3
「下永迫A遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(72)	2004.3
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(93)	2005.3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(94)	2005.3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(95)	2005.3
「堂園平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(104)	2006.3
「市ノ原遺跡(第5地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)	2006.3
「堂平窯跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106)	2006.12
「上山路山遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(116)	2007.3
「安茶ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(118)	2007.3
「向柵城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(129)	2008.3
「市ノ原遺跡(第2・4地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(130)	2008.3
「霜月田遺跡・都原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(131)	2008.3

第1表 南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(1)(伊集院IC~市来IC)

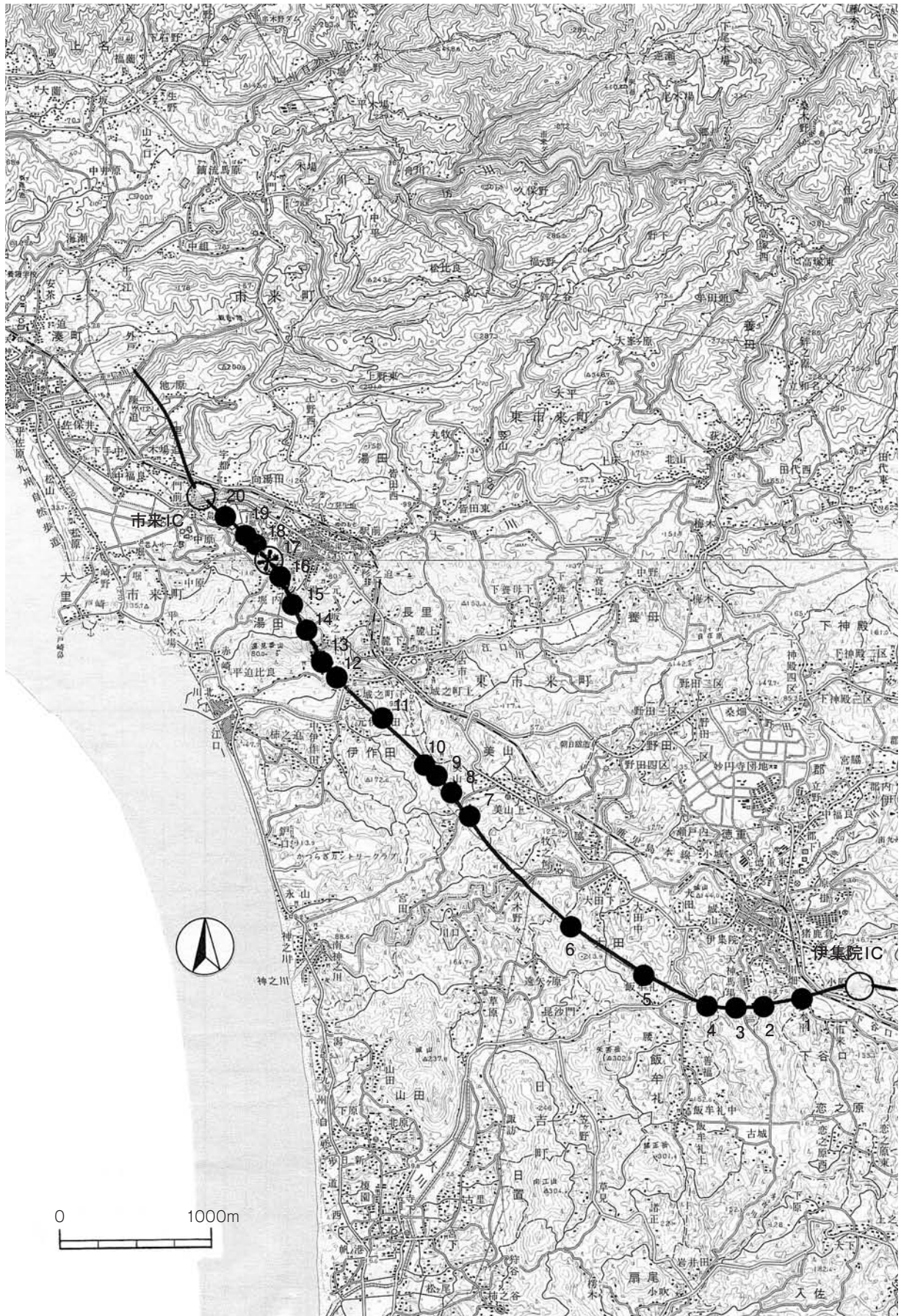
番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	調査員	時代	概要
①	一ノ谷	日置市伊集院町 下谷口	1,250	確認H8.10 全面H8.10~11	三垣・桑波田 三垣・桑波田	中世~近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 (県埋文センター報告書31 2001刊行)
②	永迫平	日置市伊集院町 下谷口	20,000	確認H8.10~12 全面H8.10~H10.7	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原・桑波田 川口・大窪	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古代~近世	礫群, 剥片尖頭器・ナイフ形, 台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑, 前平式, 吉田式土器 青磁・土師器, 陶磁器 (県埋文センター報告書93 2005刊行)
③	下永迫	日置市伊集院町 下谷口	3,100	確認H10.5 全面H10.5~7	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代~中世	土坑・集石, 須恵器・土師器 青磁・白磁 (県埋文センター報告書72 2004刊行)
④	柳原	日置市伊集院町 下谷口	10,000	確認H9.11 全面H10.5~7	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代~中世 中世~近世	土坑・甕土, 須恵器・土師器, 鉄製品 ピット・溝状遺構, 陶磁器 (県埋文センター報告書94 2005刊行)
⑤	上山路山	日置市伊集院町 大田	6,300	確認H9.2 全面H9.5~H10.3	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文 弥生~古墳	剥片・砕片 遺跡・集石, 岩本式, 前平式, 吉田式, 市来式土器 成川式土器 (県埋文センター報告書116 2007刊行)
⑥	大田城	日置市伊集院町 大田	3,500	確認H8.12~H9.1 全面H9.12~H10.3	三垣・桑波田	旧石器 縄文	三稜尖頭器 集石・土坑, 前平式土器, 石鏃・磨石 (県埋文センター報告書95 2006刊行)
⑦	堂平窯	日置市東市来町 美山	3,500	確認H10.2 全面H10.8~12	池畑 池畑・繁昌・宮田・森田・元田他	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具 (県埋文センター報告書106 2006刊行)
⑧	池之頭	日置市東市来町 美山	7,500	確認H9.8 全面H10.8~11 H12.7~8	湯之前・橋口 宮田・寺原 宮田・三垣	旧石器 縄文 古墳	ナイフ形石器・台形石器・石核, 細石刃核・細石刃 集石, 前平式・吉田式・出水式・黒川式土器 成川式土器 (県埋文センター報告書32 2002刊行)
⑨	雪山	日置市東市来町 美山	3,100	確認H12.6 全面H12.6~8	宮田・三垣 宮田・三垣	縄文 古墳 近世~近代	前平式・春日式土器, 石鏃・磨石・石皿 成川式土器 窯道具・焙烙・石臼・陶磁器・砥石・鉄製品 (県埋文センター報告書53 2003刊行)
⑩	猿引	日置市東市来町 長里	800	確認H12.5 全面H12.5~6	宮田・三垣 宮田・三垣	旧石器 縄文	礫群, 剥片尖頭器・ナイフ・細石刃核 曹畑式土器, 石斧・磨石・敲石 (県埋文センター報告書53 2003刊行)
⑪	大ヶ原	日置市東市来町 伊作田	2,700	確認H9.2, H10.6 全面H11.11~H12.2	池畑・三垣 牛ノ濱・橋口・大窪	旧石器 縄文 古代~中世	細石刃核・細石刃・剥片 黒川式土器, 石斧・石皿・石鏃 掘立柱建物跡・竪穴遺構, 須恵器・土師器 (県埋文センター報告書50 2003刊行)
⑫	向柵城	日置市東市来町 伊作田	16,000	確認H8.11~12 全面H9.4~H10.3 全面H10.7~8	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文 古墳 中世~近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃, 隆帯文・前平式・市来式土器 竪穴住居跡, 成川式土器 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・竪穴遺構・掘立柱建物跡・ 灰跡・土坑, 青磁・備前焼, 鉄製品 (県埋文センター報告書129 2008刊行)

○報告書刊行済

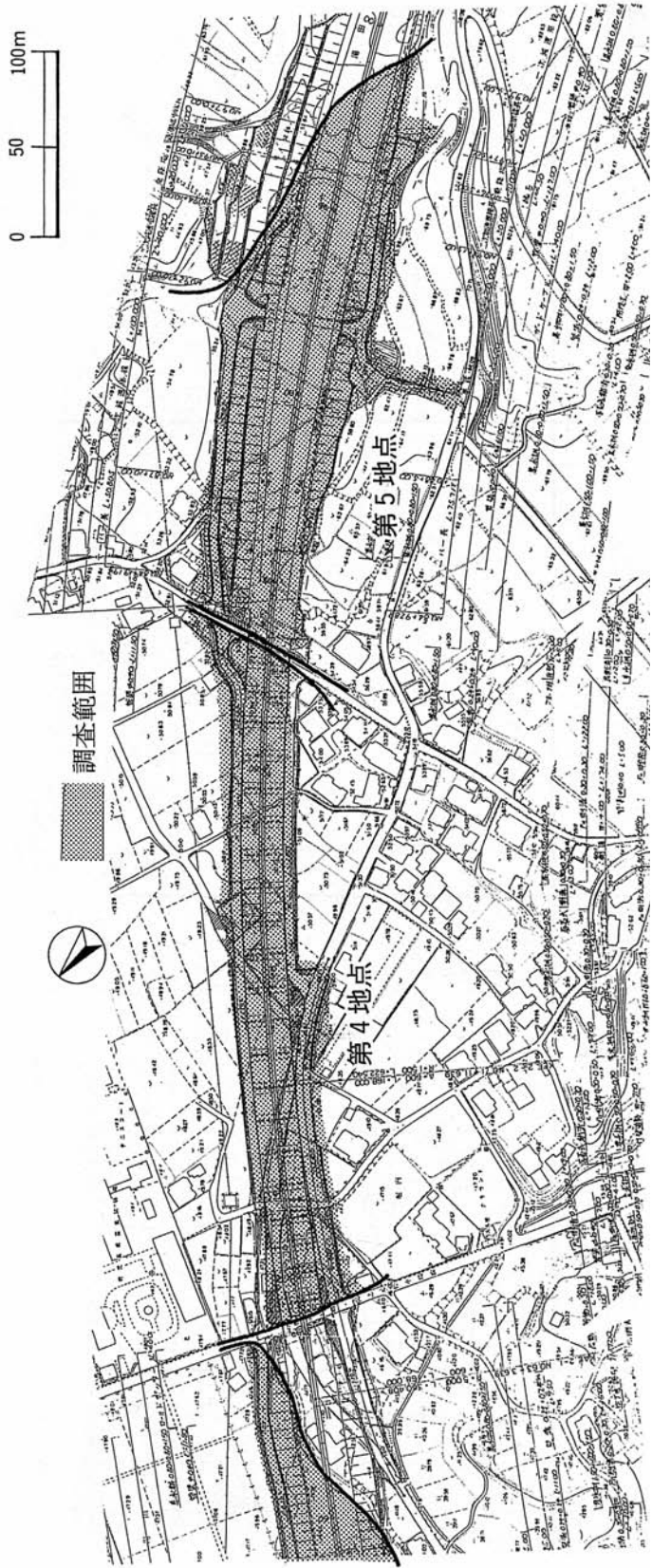
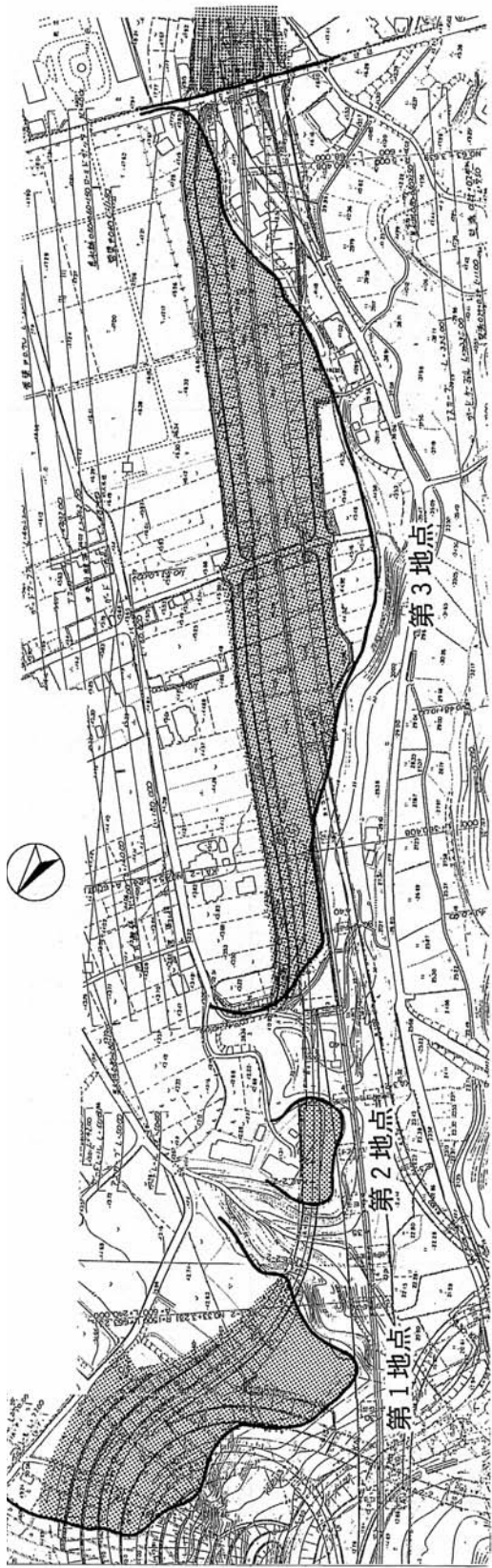
第2表 南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(2) (伊集院IC～市来IC)

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	調査員	時代	概要
⑬	堂園平	日置市東市来町 伊作田	6,000	確認 H8.11～12 全面 H10.5～11	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石 礫群, 細石刃核・細石刃 集石, 吉田式・塞ノ神式・轟式土器 土坑, 須恵器・土師器 (県埋文センター報告書104 2006刊行)
⑭	今里	日置市東市来町 伊作田	11,000	確認 H8.11～12 全面 H10.5～11	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古墳	礫群, 剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃, フランク, 調整剥片 集石, 前平式・深浦式・出水式・黒川式土器 成川式土器 (県埋文センター報告書33 2002刊行)
⑮	市ノ原 第1地点	いちき串木野市 大里	14,500	確認 H8.10～12 全面 H9.4～H10.3	繁昌・西園・宮田 寺師・藤野	縄文 弥生 古代 中世～近世	集石, 前平式・春日式・黒川式土器, 玦状耳飾り 埋藏 掘立柱建物跡・土坑, 溝, 須恵器・墨書土器 遺跡, 近世墓, 青磁, 白磁, 羽釜, 染付 (県埋文センター報告書49 2003刊行)
⑯	市ノ原 第2地点	日置市 東市来町湯田	1,000	確認 H8.10～12 全面 H9.4～H10.3	池畑・繁昌・西園・宮田 八木澤・松崎	旧石器(ナイフ) 縄文 近世	ナイフ形石器 塞ノ神式, 苦浜式土器 陶磁器 (県埋文センター報告書130 2008刊行)
17	市ノ原 第3地点	日置市 東市来町湯田	34,500	確認 H8.10～H8.12 全面 H8.12～H9.3 全面 H9.4～H10.3 全面 H10.5～H11.3 全面 H11.5～7	池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣, 元田・西村・ 松村 前野, 上之園, 八木澤, 三垣, 横手, 松村, 大窪 前野, 三垣	旧石器(細石刃) 縄文 弥生～古墳 古代～中世	剥片石器, 細石刃核, 細石刃 集石, 刻目突帯文, 岩本式, 前平式, 吉田式, 石坂式, 桑 ノ丸式, 押型文, 平橋式, 塞ノ神式, 轟式, 曽畑式, 深浦式, 船元式, 竹崎式, 春日式, 指宿式, 市来式土器, 石鎌, 石匙, 堅穴住居跡, 土坑, 焼土, 高橋式, 入来式, 黒髮式, 須玖式, 磨製石鏃, 成川式土器 掘立柱建物跡, 溝状遺構, 道跡, 土坑, 焼土, 須恵器, 土師器, 青磁, 白磁, 石鍋, 土製品
⑱	市ノ原 第4地点	日置市 東市来町湯田	26,650	確認 H8.10～H8.12 全面 H9.4～H10.3 全面 H10.5～H11.3 全面 H11.5～7	池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣, 元田・西村・ 松村 前野・上之園・三垣, 松村, 大窪 前野, 三垣	旧石器 縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	剥片・碎片 集石・堅穴住居跡・土坑, 前平式・吉田式・桑ノ丸式・ 押型文, 平橋式, 塞ノ神式土器 堅穴住居跡, 土坑, 高橋式土器, 成川式土器 堅穴住居跡, 焼土, 溝状遺構, 須恵器, 土師器 街遺跡, 掘立柱建物跡, 鍛冶炉, 陶磁器 (県埋文センター報告書130 2008刊行)
⑲	市ノ原 第5地点	日置市 東市来町湯田	17,200	確認 H8.10～12 全面 H9.4～H10.3 全面 H10.5～H11.3	繁昌・西園・宮田 森田・中原 寺原, 松村	旧石器 縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群, ナイフ, 台形石器, 細石刃核, 細石刃 落し穴・集石, 前平式・押型文・深浦式土器 弥生土器, 成川式土器 遺跡, 須恵器・土師器, 滑石製石鏃 (県埋文センター報告書105 2006刊行)
⑳	上ノ原	いちき串木野市 大里	4,000	確認 H8.11 全面 H10.7～9	繁昌・西園・宮田 上之園・栗林	縄文 古墳 古代～中世	集石・土坑, 塞ノ神式土器 堅穴住居跡, 土坑, 貝殻土坑, 成川式土器 須恵器・土師器・青磁 (県埋文センター報告書62 2003刊行)

○報告書刊行済



第2図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図



第3図 市ノ原遺跡調査地点位置図

〃	文 化 財 研 究 員	西村 喜一
〃	文 化 財 調 査 員	松村 智之
調査事務担当者	主 査	前屋敷裕徳
〃	主 査	政倉 孝弘
〃	主 査	追立ひとみ

<発掘調査・平成 10 年度>

調 査 主 体	鹿児島県教育委員会	
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調 査 責 任 者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長 吉永 和人
調 査 企 画 者		次 長 兼 総 務 課 長 尾崎 進
〃		主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋
〃		調査課長補佐兼第一調査係長 新東 晃一
〃		主任文化財主事兼第三調査係長 池畑 耕一
調 査 担 当 者		文 化 財 主 事 前野潤一郎
〃		文 化 財 主 事 三垣 恵一
〃		文 化 財 調 査 員 松村 智之
調査事務担当者	主 査	前屋敷裕徳
〃	主 査	政倉 孝弘
〃	主 査	事 溜池 佳子

<発掘調査・整理作業・平成 11 年度>

調 査 主 体	鹿児島県教育委員会	
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調 査 責 任 者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長 吉永 和人
調 査 企 画 者		次 長 兼 総 務 課 長 黒木 友幸
〃		総 務 課 係 長 有村 貢
〃		主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋
〃		調査課長補佐兼第一調査係長 新東 晃一
調 査 担 当 者		主任文化財主事兼第三調査係長 青崎 和憲
〃		文 化 財 主 事 前野潤一郎
〃		文 化 財 研 究 員 三垣 恵一
調査事務担当者	主 査	今村孝一朗

<整理作業・平成 17 年度> (平成 17 年 4 月～6 月)

作 成 主 体 鹿児島県教育委員会

作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	上今 常雄
作成企画者		次長兼総務課	長	有川 昭人
〃		次長兼調査第一課	長	新東 晃一
〃		調査第二課	長	立神 次郎
整理担当者		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係	長	牛ノ濱 修
〃		文化財主事		三垣 恵一
作成事務担当者		主幹兼総務係	長	平野 浩二
〃		主査		寄井田正秀

<整理作業・平成 18 年度>

作成主体	鹿児島県教育委員会			
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	上今 常雄 ～7月31日) 宮原 景信 8月1日～)
作成企画者		次長兼総務課	長	有川 昭人
〃		次	長	新東 晃一
〃		調査第二課	長	立神 次郎
〃		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係	長	牛ノ濱 修
〃		主任文化財主事		宮田 栄二
整理担当者		文化財主事		日高 正人
〃		文化財主事		日高 勝博
作成事務担当者		総務係	長	寄井田正秀
〃		主査		蒲池 俊一

<整理作業・平成 20 年度>

作成主体	鹿児島県教育委員会			
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	宮原 景信
作成企画者		次長兼総務課	長	平山 章
〃		次	長	池畑 耕一
〃		調査第二課	長	彌榮 久志
〃		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係	長	富田 逸郎
〃		主任文化財主事		宮田 栄二
整理担当者		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係	長	富田 逸郎
〃		文化財主事		鶴田 静彦
〃		文化財主事		抜水 茂樹

整理担当者	文化財主	事	市村 哲二
作成事務担当者	総務係	長	紙屋 伸一
〃	主	査	鳥越 寛晴

報告書作成指導委員会 平成 20 年 12 月 1 日 池畑耕一次長ほか 3 名
報告書作成検討委員会 平成 20 年 12 月 3 日 宮原景信所長ほか 12 名
企画担当者 八木澤一郎, 中村和美, 黒川忠広
遺物指導 本田道輝 鹿児島大学法文学部准教授ほか

第 4 節 調査の経過（日誌抄）

調査の経過は、日誌抄をもって記載する。日単位の記録では煩雑になるため、月単位にまとめた。

〈平成 8 年度・平成 8 年 10 月 1 日～平成 9 年 3 月 17 日〉

10 月

調査施設設営準備及び環境整備を行う。トレンチを設定し、掘り下げを開始。Ⅲ層上面から弥生時代の甕（かめ）口縁部や壺（つぼ）の底部が出土。1～25 トレンチの平板実測及び土層断面実測。

11 月

5～30, 41～60 トレンチの掘り下げ、平板実測、土層断面実測、埋め戻しを行う。31～35 トレンチの設定、掘り下げを実施。上ノ原遺跡と並行して作業を行う。トレンチ配置図作成。養蚕試験場の東側調査指示（19 日）。建設省調査課、用地課の現場確認。

12 月

41～71 トレンチの掘り下げ、位置図作成、トレンチ断面実測・写真撮影の実施。全面調査を開始。グリッド設定し、B～D－3～8 区Ⅲ層の掘り下げ。（Ⅲ b 層掘り下げ、Ⅳ層上面検出：方針）Ⅲ層下面よりピットを検出。3 cm 掘り下げ後完掘、写真撮影、平板実測。

16 日より本調査開始、重機による表土剥ぎ。ダンプにより排土処理。その後、人力によるⅡ層・Ⅲ層の掘り下げ。

1 月

B・C・D・E－3～8 区のピットの掘り下げ、平板（1/20）で実測。B・C－2～4 区のピット、土坑を精査、完掘し、写真撮影及び実測を行う。C・D－10 区の表土剥ぎ。C・D－10 区のⅢ層より集石 2 基検出。清掃・写真撮影・実測。

2 月

B・C・D・E－3～8 区のⅢ層の掘り下げを中心に行う。B・C・D－5～9 区よりピット・土坑らしき濁った埋土を検出。遺構の可能性が高いため、慎重な掘り下げを行う。ピット多数検出。

3月

B・C・D - 5～9区のピット等の検出・清掃・実測・写真撮影。10区より東側についても、慎重に発掘を進める。一部IV層の掘り下げを開始。B・C・D - 5～9区のIV層は、礫の出土多し、集石の可能性あり。集石の検出は来年度行うことにする。

器材の撤収・遺跡の保護作業を行い、平成8年度の調査を終了する。

〈平成9年度・平成9年4月21日～平成10年3月25日〉

4月

人力による表土剥ぎ、草払い。重機による表土剥ぎ開始。グリット杭設定。掘り下げ、アカホヤ上面にて、遺構検出のため精査。

5月

平成9年度調査開始。最西部にあたるB・C・D - 1・2区の調査を進める。北部は東西方向に幅1mのトレンチを設定し、掘り下げる。遺構の中央に南北方向のトレンチを入れる。写真撮影を行い、北壁の土層断面を実測する。Ⅲ層～Ⅴ層の遺物を取り上げる。中央部は山鋏でIV層まで掘り下げ、遺物を取り上げる。南部は山鋏を使用し、シラス上面まで掘り下げる。礫を検出する。調査後、最西部を廃土置き場とする。次にD - 3～8区、C - 3～7区を掘り下げ、遺物を取り上げる。C・D - 3～6区、C・D - 7・8区でⅢ層上面の地形測量(10cmコンター)。C - 7・8区、D - 5～8区、Ⅰb層の遺物取り上げ。D - 7区で焼土検出。D - 4～6区で溝状遺構を検出。写真撮影、平・断面実測、遺物の取り上げを行う。C - 3区、土坑の写真撮影及び実測。C・D - 5～8区、D - 6～8区、Ⅲa層の遺物を取り上げる。土師器や成川式土器が中心であるが、弥生土器、縄文晩期の黒色研磨土器や刻目突帯文土器なども出土した。長期研修生兎之原博寿氏来跡。

6月

C - 5区、D - 7区で焼土を2基検出。写真撮影、実測を行う。C - 2区のトレンチ(東側)を写真撮影し実測。IV層上面の地形測量図を作成。C - 3～8区、D - 5～8区検出ピットの配置図作成。D - 7区、Ⅲaピットの断ち割り。D - 7区、Ⅲa層の完形土師器壺の出土状況図作成。C - 4区、C - 7・8区ピットの写真撮影及び断面実測。D - 3・4区、Ⅳb層掘り下げ。(Ⅳ層C - 8区出土の押型文土器の写真撮影。C - 7・8区、D - 3・4区、D - 6区をⅣ層まで掘り下げ。長期研修生村原正樹氏来跡。

7月

D - 3区、C - 3・4区、D - 5区、D - 7区にトレンチを設定し、掘り下げ。D - 4区の横転内にピットを検出し、写真撮影。D - 5～8区をⅣ層まで掘り下げる。D - 7区をⅤa層上面まで掘り下げ、遺物を取り上げる。途中、Ⅳb層で黒曜石が出土する。D - 8区、Ⅲa層の集石を実測。E - 14・15区で溝状遺構を検出。埋土中から土師器壺の破片が出土。F - 15区、Ⅲa層で硬化面を検出し、ミニトレンチを入れる。E～G - 14・15区、Ⅲa層上面の地形測量図作成。D - 8区、Ⅲa層の焼土の平・断面図実測。E - 14区のⅢb層下部から

磨製石斧の刃部が出土。D-4区, C・D-3・4区の土層断面図作成。台風対策を行う。G-14・15区の西側, 南側に下層確認トレンチを設定し, 掘り下げたところ, 南側より集石を検出。円形遺構の完掘。同時に埋土中出土の鉄滓1~4の実測。完掘後, 清掃及び写真撮影。II層掘り下げ。E・F-46~48区をIII~V層まで掘り下げ。遺構実測, 写真撮影。D~H-28区, III a・III b層の遺物取り上げ。断ち割り部分掃除。V層以下掘り下げ。VII a層以下掘り下げ。東市来町子供会が遺跡見学・発掘体験のため来跡。

8月

F・G-12~14区, F・G-15区の東側, F-12区の東側, E-14区の西側にトレンチを設定し, 掘り下げる。C-7区, IV a層検出の集石を実測。G-14区, III b層検出の集石を実測。その後, 散石を取り上げる。E・F-11~14区のIII a層上面を精査後, 地形図作成。杭打ち(12区と13区との境界にベルトを設定)。F-14区, IV b層出土石鏃及びVI層出土フレイク取り上げ。E・F-13・14区のIII a層出土遺物の取り上げ。E・F-12区東側断面の清掃後, 写真撮影及び実測を行う。E-12~14区北側断面の清掃, 写真撮影。F-13・14区北側トレンチの掘り下げ終了。VI層から黒曜石製フレイクが1点出土する。

VII a層以下掘り下げ。後, VIII層まで掘り下げ, 写真撮影及び土層断面の実測。D~H-28区, III a・III b層の遺物取り上げ。D-22~23区の下層確認トレンチ設定, 掘り下げる。集石?を検出。F・G-47・48区, II層・III層以下掘り下げ, 遺物を取り上げる。平板実測。E~H-32~34区, III a層・III b層を掘り下げる。D~H-28・29区をIII b層まで掘り下げ, 遺物を取り上げる。E~H-32~34区の遺物を取り上げ, 平板実測を行う。

9月

F-13区VI層出土遺物取り上げ。E~G-16・17・18区調査開始。III a層上面地形測量図作成。E~G-16~18区の杭打ち。E-17区のIII a層で検出した焼土の写真撮影。E-16区で南北方向に溝状遺構, 東西方向に硬化面, 焼土を検出する。F-17区で東西方向に溝状遺構と硬化面, 南北方向に硬化面を検出する。遺構内からは, 墨書土器(土師器坏)や銭貨(開元通宝), 石鏃等の遺物を取り上げる。G-17区南側に下層確認トレンチを設定し, 掘り下げる。E~G-16~18区, E・F-15区のIII a層上面検出遺構清掃。その後, 全景の写真撮影。硬化面4条, 溝状遺構2条, 焼土2基の写真撮影。E・F-15区, E~G-16~18区, III a層上面検出の遺構配置図を作成する。C・D-5・6区境界ベルト崩し, 同時に遺物取り上げ。なお, IV a層より塞ノ神式土器が検出, 写真撮影を行う。D-7・8区, IV a層検出の集石2基及びIV a層検出の配石遺構の清掃, 写真撮影。C~E-8~11区のIII a層上面を清掃。その後, III a層上面において地形測量。C・D-9・10区のIII a層上面の遺構精査(東西方向の硬化面, 南北方向の溝状遺構, 東西方向の溝状遺構?を検出)。E~G-16~18区, 硬化面の出土遺物取り上げ。C-7区, IV b層から検出した集石の写真撮影後に実測を行う。

F・G-47・48区のIII層以下を掘り下げ, 写真撮影及び断面図作成。吉元所長, 新東課長補佐, 池畑係長来跡。東市来町職員上園氏来跡。県考古学会会長河口貞徳氏来跡。

10月

D-9・10区, III a層検出の東西方向溝状遺構を実測, 写真撮影及び遺物取り上げ。D-7区, IV a層検出の集石, C-7区, IV b層検出の集石を実測。E-9区, III b層検出の焼土を掘り下げ。D-8~12区東西方向にある硬化面の清掃, 写真撮影。硬化面の位置図を作成する。D-11区, III b層検出の土坑を完掘, 写真撮影。同区の土坑を掘り下げ, 検出状況を写真撮影。D-9区, III b層検出土坑の写真撮影。D-8区, III a層検出の焼土と土坑掘り下げ, 写真撮影。C~E-10区, III a層の南北方向溝状遺構の掘り下げ。C-7区, IV b層検出の集石の実測。C・D-10~12区, C-8~10区, D-9・10区, E-8区のIV a層上面の地形測量。山本信夫氏, 松川博一氏(大宰府市)来跡。岡山県古代吉備センター下澤氏来跡。

D~G-26~28区, H-26~31区バックホウによる表土剥ぎ。D~H-26~28区, 道路状遺構の写真撮影及び実測。D・E-26・27区, E・F-28~32区の遺物取り上げ及び, 平板実測。H・I-29~32区, E-35・36区, E・F-31・32区の表土剥ぎ。E~G-34~37区, E~I-35~42区をIII層まで掘り下げる。E-36~I-37区で道路状遺構を検出, 写真撮影。E~I-38~42区をIII層上面で道路状遺構を検出, 写真撮影。D~G-35・36区, G・I-37~42区で溝状遺構を検出し, 写真撮影。道路平板実測。

11月

C-8区, V a層の掘り下げ。東側に下層確認トレンチを設定し, 掘り下げる。E-10~12区, 北側下層確認トレンチを設定し, 掘り下げる。C・D-9・10区, IV a層から出土した礫を取り上げる。D-6区, IV a層検出の集石2基の実測後, 写真撮影。D-10区, IV b層で集石を検出。D-6区, IV a層検出の配石状遺構の実測開始。D-8区, III b層上面遺構精査。C-10区, III b層検出の集石の実測。E-10~12区の北側トレンチを掘り下げる。また, 南側に下層確認トレンチを設定し, 掘り下げる。D-8区, III b層検出の焼土土坑, 焼土を実測, その後写真撮影。E-9区, III a層検出の焼土土坑を実測。C-11区, III a層検出の焼土を半截。C-9区, V a層検出の土坑を掘り下げる。C・D-9~12区, IV b層・V層の掘り下げ。C・D-10区及び, D-11区に下層確認トレンチを設定し, 掘り下げ。C・D-9・10区のIV a層・IV b層出土散石を取り上げる。E-10区, III b層検出の土坑内遺物を取り上げる。

B~E-17~21区, III層を掘り下げたところ遺構を検出する。E~G-41・42区の排土を除去。III層上面まで掘り下げる。集石などの遺構の清掃, 写真撮影。F・G-40・41区で畑畝跡?を検出。清掃後実測図を作成する。F・G-38・39区にある土坑の写真撮影。E-42区, トランシットによりミニグリット作成(2×2m)する。また, 同区の焼土域を実測し, 写真撮影。E・F-31区, G・H-30区の竪穴住居を掘り下げる。

12月

C・D-6～9区, III a～V a層の遺物を取り上げる。E-10区のIII b層検出の土坑1は断ちきりの結果, 土層横転と判明。E-10区, 南北方向の溝状遺構の遺物を取り上げる。

D-8区, III a層検出の東西方向溝状遺構の実測及び写真撮影。E-8区の溝状遺構を掘り下げる。E-8区, III b層検出の溝状遺構を掘り下げる。D・E-8・9区, III b層検出の南北方向溝状遺構の実測。E-9区のIII b層から轟式土器出土。C-9区, C～E-10～12区, D-8区, E-9～11区の遺物を取り上げる。

F-40・41区をV層上面まで掘り下げる。E-31区, 弥生の1号住居及び, F-31区, 2号住居を実測及び写真撮影。G・H-30区, 3号住居を掘り下げ, 平・断面図を作成する。3号の埋土を採取し, 写真を撮影する。G～I-37～39区のIII b層上面でピット等検出。E区の4号住居の写真撮影及び断面図作成。古墳の1号・2号・3号住居を掘り下げる。F・G-28～30区の遺物を取り上げる。D・E-27～29区, H・I-33・34区, H～J-32～34区にある溝状遺構の実測及び, 遺物を取り上げる。E-37～39区, III層を掘り下げたところ, 散石群を検出。名古屋大学渡辺 誠氏, 千歳市埋蔵文化財センター高橋 理氏, 北海道茅部郡南茅部町教育委員会福田 裕二氏, 札幌国際大学大学院教授吉崎 昌一氏, ノートルダム清心女子大学教授高橋 護氏, 北海道大学埋蔵文化財調査室椿坂氏, 札幌大学文学部講師高宮 広士氏が来跡。

1月

E～G-19～21区, 重機による表土剥ぎ。D・E-8区, E-9・10区をIV b層まで掘り下げ, 遺物を取り上げる。F・G-18～23区に杭打ち。D・E-8区東壁及び北壁に下層確認トレンチを設定し, 掘り下げる。E-10区, III b層の溝状遺構及び, D-11区, III b層検出土坑の写真撮影及び, 実測。E-9区, III a層検出の焼土1号の写真撮影。E-9区, IV a層から集石1基を検出。D-8区北壁, D・E-8区東壁の土層断面を写真撮影。D-8区, IV b層検出の集石を実測。他, D・E-8・9区, 5基の集石の写真撮影。F～I-20～23区, E-20～23区, III a層上面の地形図作成。

E-37・38区において, 集石・散礫を検出する。E・F-42区, E-41区, F-40区の集石を実測。F・G-40～42区, I・J-28～33区, E・F-40～42区にある遺構(ピット等)の実測。F～I-36～39区にある遺構の清掃, 及びサポートシステムによる航空実測。E-27区出土の曾畑式土器の実測。鹿児島大学の渡辺先生, 本田道輝先生, 北海道大学の林謙作先生が来跡。

2月

E・F-21～23区, F・G-21～23区, E～G-19区, G-19～23区, H・I-19区, D～F-15・16区, III a層検出の溝状遺構を写真撮影及び, 遺物取り上げ。E-9区, IV b層の10号集石及び, D-7区の7号集石を実測。D-8・9区, IV b・V a層出土の遺物を取り上げる。また, IV b層検出の3基の集石の配置図を作成。I-18・19区南側に下層確認トレンチを設定し, 掘り下げる。H-20区, III a層出土の一括土器を実測。内村文化財課長が来跡。

I - 33区, E - 41・42区, F - 42区, F - 43区, F - 46区, J - 32区, J - 33区の集石を実測。I - 31・32区の塞ノ神式土器集中か所, 及び同区に点在する石皿・安山岩・石製品等の写真撮影。また, 塞ノ神式土器については実測を行う。F - 40～42区, I・J - 28～30区, I - 33～34区のV層以下に下層確認トレンチを設定する。E - 43区で, 焼土域や内黒土師器の検出状況を写真撮影。G - 42～44区, 道跡の写真撮影。E～G - 45区, 堀切道路の実測, 清掃, 写真撮影。I・J - 31～33区, 遺構(ピット)の平面実測。G - 3区出土の轟式土器集中か所を写真撮影。F・G - 45区で溝状遺構を検出。

3月

全溝状遺構の清掃。F・G - 17～23区, E・F - 15・16区, E～I - 19区, E・F - 21・22区, F - 23区のⅢa層検出の溝状遺構の実測。D - 13～21区, Ⅲa層上面の地形図作成(10cmコンタ)。航空撮影に伴う清掃, 及び撮影。D - 9区, IVb層検出の集石, D - 10区, IVb層検出の集石, D - 8区, IVb層検出の配石炉の写真撮影及び実測。D - 8区, IVb層検出の集石の実測。E～I - 15～23区, Ⅲa層検出の遺構配置図作成。図面整理。市来町議会議長中間 啓行氏, 北海道大学林謙作先生が来跡。河口貞徳先生, 上村俊雄先生が現地指導のため来跡。

F - 43区, J - 32区にある集石の実測。F - 45・46区の土層断面を実測。F - 42～44区の下層確認トレンチをⅦ層以下まで掘り下げた結果, 遺物を検出し実測を行う。G・H - 30区, 3号住居の実測。器材の撤収・遺跡の保護作業を行い, 平成9年度の調査を終了する。

〈平成10年度・平成10年5月6日～平成11年3月19日〉

5月

整理事務所・休憩所・倉庫の整理。事務所周辺や遺跡内の草刈り。E～H - 15～17区をⅢb層まで掘り下げる。D - 15・16区からピット等を検出し, 掘り下げる。D - 12～19区をⅢb層まで掘り下げる。E～G - 16・17区, Ⅲa・Ⅲb層の遺物を取り上げる。E - 17区から出土した土師器碗の写真撮影を行う。同, カマドの精査を行う。土師器D - 16～21区Ⅱ～Ⅲb層までの遺物を取り上げる。獣骨が出土する。D - 12～23区, E～H - 16・17区をⅢb層まで掘り下げる。遺構を検出する。D - 15～17区の土層断面図を作成する。D - 12～16区に, 2×2mのミニグリッドを設定する。D・E - 15～17区(セクションベルト部)Ⅱ層, Ⅲa層の遺物取り上げ。F～H - 16～18区をⅣ層まで掘り下げる。ベルトコンベア設置。D - 16区で焼土跡(カマド跡?)を検出し, 精査を行う。D - 12～15区のⅢb層面遺構群の実測図作成。G～I - 18区, H - 16・17区をⅤ層まで掘り下げる。E～G - 16・17区の平板実測と遺物取り上げを行う。D - 12～14区Ⅲb層面の遺構群の実測図を作成する。G - 16・17区のⅢ層出土遺物を取り上げる。D - 12～16区に, 下層確認のためのトレンチを設定し, Ⅵ層まで掘り下げる。吾平町の山下氏長期研修のため来跡。吉永和人所長, 尾崎進次長, 池畑耕一係長来跡。

6月

D - 17 ~ 19 区, III b 層の遺構群を実測する。G - 18・19 区, III b 層の遺構を実測する。E - 17・18 区の遺物を取り上げる。E - 17 区で検出された掘立柱建物跡の写真撮影を行う。E - 18・19 区で掘立柱建物跡を検出し, 写真撮影を行う。H - 21 区の土器集中区の実測図を作成する。D - 15 区の焼土跡を完掘し, 実測図を作成する。D ~ G - 16 ~ 21 区, III b 層遺構群の実測図を作成する。H - 18 ~ 20 区, H ~ I - 18 区に下層確認のためトレンチ設定, 掘り下げる。トレンチの土層断面図を作成する。E ~ F - 16 区でピットを検出, 掘り下げる。

D - 20 ~ 21 区の硬化面を掘り下げる。G - 20 ~ 21 区の硬化面を掘り下げる。G - 22・23 区の住居跡の写真撮影, 清掃する。D - 16 ~ 21 区に下層確認のためトレンチを設定, 掘り下げる。雨天時は現場周辺を巡回し, 安全点検を行う。

7月

E - 17 区, 掘立柱建物跡のピットたち割りを行う。E・F - 18・19 区の遺構を実測する。E - 18 区, 掘立柱建物跡の柱穴断面の写真撮影を行い, 実測図を作成する。E・F - 17 ~ 19 区掘立柱建物跡の柱穴断面状況を写真撮影。D・E - 17 区, H・I - 21 ~ 23 区の III 層 ~ V 層の遺物を取り上げる。D - 20・21 区, V 層上面の土坑を写真撮影。その後, 周辺の遺物を取り上げる。F - 19 区の柱穴の平面図を作成し, レベル測量を行う。F - 18・19 区, 掘立柱建物跡及び E - 18 区, 掘立柱建物跡の柱穴断面図を作成する。E・F - 16 区の柱穴の平板実測を行う。E ~ G - 19・20 区, V 層上面まで掘り下げる。C・D - 20 ~ 23 区の表土剥き部分に寒冷紗を設置。壁面削り。C・D - 20 ~ 23 区, I - 24 区を III 層上面まで掘り下げる。

8月

D・E - 22・23 区の硬化面検出状況を平板実測する。その後 III 層上面まで掘り下げる。E - 18・19 区, E - 20 区, E - 22 区, C・D - 22・23 区の遺物取り上げ。C・D - 12 ~ 20 区杭打ち後, グリッドを設定する。C・D - 18 ~ 20 区, C - 15 区にある道跡の実測図を作成する。E - 16 区にある焼土跡の平面図を作成する。C・D - 12 ~ 18 区を III b 層まで掘り下げ, 遺構を実測後, 遺物を取り上げる。なお, 17 ~ 20 区においては, V 層まで掘り下げる。E - 17 区の焼土跡の断面図を作成し, 写真を撮影。C - 16 区にある土坑及び集石の実測図作成, 写真を撮影。E・F - 17・18 区を V 層まで掘り下げる。F・G - 21 ~ 23 区 III b 層の遺構を実測する。

9月

E・F - 17・18 区を V 層まで掘り下げる。C ~ F - 21 ~ 23 区を V 層上面まで掘り下げる。F ~ G - 21 ~ 23 区, H・I - 21 ~ 23 区の III b 層にある遺構の平面実測。その後 V 層上面まで掘り下げ, 遺物を取り上げる。C・D - 20 区の土坑を掘り下げ後, 写真撮影。E - 22 区 V 層上面の集石の写真撮影及び平板実測を行う。F・G - 22 区古墳 3 号住居検出状況の写真を撮影及び実測。G - 22・23 区竪穴住居の実測。F - 22 区集石の平面実測。F - 17 区, F - 19 区, C - 19 区の遺物取り上げ。F・G - 22・23 区竪穴住居を掘り下げる。埋土を土壤サンプルとして採取する。E ~ H - 32 ~ 39 区遺構等の清掃。E ~ H - 31・32 区のピット, 土坑内の遺物を取り上げる。F - 31 区弥生 2 号住居内遺物の実測。

10月

H・I - 23・24区, G・H - 33・34区, F～H - 34区の平板実測後, 遺物取り上げ。F - 22区集石の実測。E - 21～23区下層確認トレンチ終了。F・G - 21区下層確認トレンチ設定後, 掘り下げを行う。完掘後, 写真撮影, 断面実測。G～I - 21～28区, I - 21区V層掘り下げ。F - 31区弥生2号住居内遺物の実測後, 埋土採取。住居内の炭化ドングリ平板実測, 取り上げ。E・F - 28区, 古墳2号住居の掘り下げ後, 埋土採取。H - 34・35区Ⅲb層まで掘り下げ, 遺物検出。F～H - 33・34区ピット, 土坑内遺物取り上げ。E・F - 28区古墳2号住居の掘り下げ, 埋土採取。D・E - 28・29区, F～H - 31・32区, E～F - 33・34区, E - 34・35区, F - 32・33区Ⅲa～Ⅲb層の平板実測。G・H - 30区, 弥生3号住居の実測後, 写真撮影。G - 34区で貝溜ピット検出, 掘り下げ後, 写真撮影。弥生3号住居及び, F - 33区の弥生4号住居内の遺物を平板実測。F - 37区にある土器集中か所の平面実測。G - 32区, 軽石出土状況の写真撮影。土器の水洗い。台風対策(土嚢積み, やぐら解体)。柴田先生(宮崎産業経営大学), 小田先生, 本田道輝氏, 渡部徹也先生が現地指導のため来跡。

11月

G - 39区, F - 22区集石の平・断面図実測。G・H - 30区, 弥生3号住居の硬化面を平面実測。以後, ミニトレンチ, 断面トレンチの掘り下げ。F - 26～28区, G・H - 29区のV層以下確認トレンチ掘り下げ, 実測を行う。また同区の土層断面図を作成する。F～I - 32～36区, Ⅲb層のピット等の掘り下げ。F・G - 22・23区, 古墳3号住居の平面図実測, 遺物取り上げ。H - 21区Ⅲa, Ⅲb層の遺物取り上げ。H - 33区, V層上面検出の落ち込みからの遺物を取り上げ, 平面図を作成する。G - 37区にある集石の平・断面図作成。H・I - 36～39区, V層上面まで掘り下げ, 遺物を取り上げる。F・G - 36～39区, G - 37区の平板実測後, 遺物を取り上げる。F - 39区, IV層の集石を写真撮影後, 実測する。25・26区のI・II層を掘り下げる。H・I - 26～28区をⅢa層まで掘り下げた結果, イモ穴, 畝跡, 溝状遺構を検出する。グリット杭打ち。F～G - 25・26区, G・H - 25～27区, H・I - 26・27区の平板実測, 遺物取り上げ。G - 36～39区の2m方眼トレンチ掘り下げる。F - 36～39区にも同様のトレンチを設定し, 掘り下げる。H - 37区, Ⅲb層の集石の平面実測。G - 22区, 古墳3号住居のベルトを外し, 遺物の実測を行う。G - 23区, 古墳4号住居の平面図作成。両住居の写真撮影を行う。H - 36区, I - 35・36区, H - 37・38区, F - 39区の集石を写真撮影, 実測を行う。F - 34区, Ⅲa層の土器集中か所(弥生中期)の平・断面実測。H - 36区にある焼土域の平・断面実測及び, 写真撮影。H - 37区で落ち込み遺構を検出, 写真撮影。G - 34区, 貝溜まりピットの平・断面を実測し, 貝や埋土のサンプルを採取する。

12月

G・H - 37区, F - 39区, V層以下掘り下げる。F - 34区, I - 32区, E - 42区, F - 34区, E - 33区(2号・3号), H - 31区の集石の平・断面実測。H - 21区, E - 35区の土器集中か所の写真撮影。E - 34区, 土器集中か所の平・断面実測。G - 23区, 古墳4号住

居のレベル測定。H・I - 21区, F~H - 35区, F - 35~39区の下層確認トレンチを掃除, 写真撮影, 断面図実測を行う。D~H - 24~26区の重機による表土剥ぎ。その後, 10mグリッド杭を打ち, 表土・II層・III a層を掘り下げる。F - 34区, F~H - 35・36区の遺物取り上げ。F - 35~39区, F・G - 35区をV層以下掘り下げる。H - 34・35区, G~H - 34区にある焼土域の平・断面実測。E - 31・32区, 弥生1号住居の平・断面実測。H - 32区, III b層の成川式土器の出土状況の実測及び写真撮影。E・F - 37~39区, 平板実測及び遺物の取り上げ。藤本先生が現地指導のため来跡。尾崎次長来跡。

1月

E - 36区, E - 38・39区, E・F - 24~26区, F - 25・26区, F・G - 24・25区, F~H - 24・25区, G・H - 21区, G・H - 34区, H~J - 34~40区の平板実測, 遺物取り上げ。E - 32区, E - 42区, I - 37区, I - 35・36区, J - 35区集石の平・断面実測。E - 31・32区, 1号住居内遺物の平・断面実測後取り上げ。壁面・床面を検出する。E - 36~39区の掘り下げ。E - 29区, 5号住居内遺物の平・断面実測後, 遺物取り上げ。G・H - 30区の2号住居の平・断面図作成。E - 36~39区の下層確認トレンチ及び周辺をV層以下まで掘り下げる。E - 39区にある土坑の平・断面実測。H~J - 34~40区の表土剥ぎ後, III b層まで掘り下げる。C・D - 21区の巨大土坑を掘り下げ, 写真撮影を行う。H~J - 34・35区にある溝・ピット等の遺構を掘り下げる。G~J - 36~39区の遺物を取り上げ, イモ穴等の実測を行う。G・H - 24・25区, H・I - 24・25区で溝状遺構を検出し, 写真撮影を行う。プレハブ前に砂利を入れ, 整地を行う。駐車場周辺の杭打ち, ロープ張り。

2月

D~G - 24~26区のIII b層上面で溝状遺構を検出。平板実測を行い, 遺物を取り上げる。F~H - 24・25区, F・G - 24区, D・E - 24区の溝状遺構を掘り下げる。その後, 写真撮影及び実測等を行う。D~H - 24~26区, 各溝状遺構(1~6)の埋土遺物を取り上げる。I・J - 36区, 堀切道路を掘り下げる。その後, 写真撮影, 平板実測を行う。C・D - 21区にある巨大土坑の平・断面を実測する。G・H - 30区, 弥生3号住居の周辺ピットの写真撮影及び実測。弥生1・古墳1号住居の平・断面実測。E - 33区, J - 35区の集石の平・断面実測。G - 25区で焼土域を2基検出する。清掃及び写真撮影を行う。河口貞徳氏が現地指導のため来跡。尾崎次長, 池畑係長が来跡。

3月

古墳3号住居内焼土跡及び, D - 15区焼土跡から炭化物を採取する。G - 25・26区, 焼土跡の平・断面実測を行い, 写真撮影を行う。弥生1~4号, 古墳1・2号住居の精査。なお住居内に焼土があるものは平・断面の実測を行う。G・H - 30・31区, F~H - 24・25区の平板実測及び写真撮影。D・E - 24~26区をV層まで掘り下げる。F - 26区にある集石の平・断面実測及び写真撮影。F - 24~26区の下層確認トレンチ完掘。D・E - 32~35区の平板実測。D・E - 31~35区のイヌマキ抜根跡の平板実測。E - 30区, E - 31区, G - 30区の礫入りピットの写真撮影及び平・断面実測。E - 35区の土師器皿入りの土坑を断ち割り, 写真撮影及び平・断面実測を行う。E - 33区V層上面, 礫群・散在礫の取り上げ。

また周辺にある集石の写真撮影及び平・断面実測。F - 30区から出土した勾玉の写真撮影。F - 24～26区の土層断面線引き。F - 29・30区の下層確認トレンチを掘り下げる。遺物整理、フローテーション、撤収準備。吉永所長、池畑係長来跡。

〈平成11年度・平成11年5月24日～平成11年7月12日〉

5月

道具搬入、整理。F～H - 25・26区のI・II層を掘り下げる。H・I - 26～28区をⅢa層まで掘り下げた結果、イモ穴、畝跡、溝状遺構検出する。グリット杭打ち。F・G - 25・26区、G・H - 25～27区、H・I - 26・27区の平板実測、遺物取り上げ。

6月

G～I - 25・26区、H・I - 25・26区の溝状遺構、イモ穴等を平板実測、レベル測定。G・H - 27区溝状遺構検出、掘り下げた後写真撮影、実測を行う。H・I - 27・28区、イモ穴、畝跡、ピット、土坑等平板実測。F・G - 25・26区Ⅲb層まで掘り下げ、遺物を検出する。II層・Ⅲ層の平板実測を行い、遺物を取り上げる。F・G - 25・26区、H・I - 25～27区Ⅲb層以下掘り下げ、遺物を検出する。以後、V層上面まで掘り下げたところで、ピット等の遺構を検出する。流水や土砂流入の対策のため、シート張り、土嚢積みを行う。雨の日は土器洗い等の作業を行う。青崎係長来跡。

7月

H - 25・26区、F・G - 26区、F～H - 26区の下層確認トレンチの調査を行う。F・G - 25・26区ピットの平板実測、遺物の取り上げを行う。撤収作業。

その後、平成11年4月から平成12年3月まで（担当：前野，三垣）

平成17年4月から平成18年3月まで（担当：牛ノ濱，三垣）

平成18年4月から平成19年3月まで（担当：日高正人，日高勝博）

平成20年4月から平成21年3月まで（担当：富田，鶴田，抜水，市村）

県立埋蔵文化財センターにて整理・報告書作業を行った。

第Ⅱ章 位置及び環境

第1節 遺跡の位置及び自然環境

市ノ原遺跡第3地点は、日置市東市来町湯田字上市ノ原・字下市ノ原・字瀬戸ノ口の3つの字にまたがって所在する。

日置市東市来町は、平成の大合併で、平成17年5月1日、伊集院町・日吉町・吹上町と合併し、51,955人の日置市となった。

旧東市来町は、薩摩半島の中西部に位置し、東は旧伊集院町、南は旧日吉町、北はいちき串木野市に接し、西は東シナ海に面している。鹿児島市から西方約28kmに位置し、東西16km、南北約9kmの細長い地域で面積は70.97 km²、人口13,623人（平成12年10月1日国勢調査人口）である。1889年（明治22）市来郷の湯田・伊作田・神之川・長里・養母の5箇村を合わせて東市来村として発足、1937年（昭和12）4月、町制を施行、1956年（昭和31）9月、旧下伊集院村の南神之川・苗代川（美山）・宮田・牧之角を合併し、平成17年5月に周辺の伊集院町・日吉町・吹上町と合併し日置市となり現在に至る。

市ノ原遺跡のある旧東市来町の地形は、北部の重平山・中岳・大峰ヶ原など数百mの旧火山灰の山地と、南西部の中生層の低い山地を除けば、これらの山地の間を埋めた50～180m内外の火山灰（シラス）台地である。大里川・江口川は町の中央部を貫流し、南端の町境及び南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。また、それらの河川によってつくられた小さな盆地状の谷底平野がいくつも並び、そこに大里・養母・湯之元などの集落が発達している。水田は主としてこの三河川流域に沿って開け、畑地はその丘陵に分布しているが、大半はシラス台地である。シラス台地は、錦江湾奥部にある始良カルデラから噴出した火砕流が堆積した台地で、シラスは約25,000年前の火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。

江口浦の海岸には、海岸砂丘の発達が見られず、シラスの海食崖には、卓越風による風食地形が発達し、「江口蓬萊」の名がある。

薩摩半島の東シナ海側の、ほぼ全域とっていいほどに白砂青松の砂浜が続く浜は、吹上浜と呼ばれ、日本三大砂丘の一つである。南北47kmにわたる海岸線は、いちき串木野市から南さつま市にかけて3市にわたり、距離的には日本最長の砂丘である。冬は北西の風が強く、海岸の砂は内陸部に吹き溜まり、最大幅2km、最高所47m（南さつま市金峰町竹原）の吹上浜砂丘ができた。

遺跡は、日置市東市来町の南西部、伊作田地区の北西方に位置する。上伊作田集落の東後方の丘陵上にあり、標高約66mの独立丘陵のシラス台地上にあり、JR東市来駅の西側にあたる。

第2節 歴史的環境

旧東市来町では昭和62年養母の上二月田遺跡で縄文時代前期・後期の調査がなされ、仮牧段遺跡・桜町遺跡などわずかな遺跡が知られていたのみで、昭和59年度発行の遺跡地名表では寺院城跡・窯跡を含んでも15か所が紹介されているのみであったが、平成3年から始まった北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査や南九州西回り自動車道建設に伴う調査が行なわれたこと等により、遺跡数が一気に増加し、現在では92か所の遺跡が周知されている。そこで、周辺遺跡と併せて主な遺跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

旧東市来町では、南九州西回り自動車道建設が始まるまでは、旧石器時代の遺跡は伊作田の老ノ原遺跡で細石刃核・細石刃が出土したことが知られているのみであったが、今では旧松元町・旧伊集院町と並んで県内でも有数の遺跡群となっている。

今里遺跡は伊作田の標高約63mの台地端の傾斜地に所在し、ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパーと細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土している。特に細石刃は比較的小規模な発掘にもかかわらず101点と多く出土し、また分類・編年等もでき、今後の旧石器文化研究に重要な遺跡となっている。猿引遺跡は長里の標高約110～115mの尾根上の台地に所在し、旧石器時代の遺跡は迫状窪みに集中して出土した。ナイフ形石器文化の礫部1基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃がみつかった。池之頭遺跡は美山の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に所在し、ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃が出土した。向栴城跡は伊作田の標高約50mの独立台地上に所在し、剥片尖頭器・ナイフ形石器が出土した。堂園平遺跡は伊作田の遠見番山から下る斜面の裾野にあり、標高約50mの平坦地に所在する。ナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃が出土した。また、湯田の市ノ原遺跡でも多くの旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代

二月田遺跡は養母に所在し、縄文時代後期の住居跡2基・土坑2・炉跡などが検出した遺跡で、遺物には平椀式・塞ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜臼式土器等が出土している。今里遺跡では早期の集石3基と早期～晩期の岩本式・前平式・押型文深浦式・春日式・出水式・上加世田式・黒川式土器と共に、多くの石器（石鏃、石匙、磨石等）が出土している。特に独鉤状石器は注目される。池之頭遺跡では早期の集石8基と、前平式・吉田式・石坂式土器の他、春日式・並木式・阿高式・入佐式・黒川式土器が出土している。隣接する雪山遺跡では前平式土器の円筒土器と角筒土器の完形品が出土している。向栴城跡では、草創期の配石遺構・集石が多量の隆帯文土器や石鏃・敲石・石斧・石皿と共伴して出土している。前期～晩期でも轟式・阿高式市来式・黒川式土器が出土している。市ノ原遺跡は湯田の標高約50mの台地西側に所在し、調査面積は62,000㎡と広範囲の遺跡で早期～晩期まで多種多様な遺構・遺物が発見された。特殊な遺物として竹崎式土器・大洞式土器や三角壺形の土・石製品等、交易品と考えられるものも出土している。

弥生～古墳時代

調査対象地域は台地が多いせいか、弥生時代の遺跡は少ないが、上二月田遺跡で高橋式土器が

出土し、市ノ原遺跡では竪穴住居や壺棺、夜臼式・高橋式・北麓式・黒髪式・山ノ口式土器と石鏃・石錐・石斧等が共伴して出土している。特に、夜臼式・高橋式土器や扁平打製石斧の大量出土が顕著である。

古墳時代の遺跡は多く発見されている。住居跡が検出された遺跡では向柵城跡 11 基、市ノ原遺跡で 7 基がある。遺物では成川式土器の甕・壺・高坏・手捏土器と磨石・磨製石鏃等が出土している。

古代

旧東市来町は古代においては、薩摩国日置郡に属していたと考えられている。市来院は宝亀年間以降、郡司の大蔵氏一族が支配していた。向柵城跡では円形周溝遺構・土坑に土師器・墨書土器・須恵器・古銭と共伴して出土している。市ノ原遺跡では第 1 地点で掘立柱建物跡 15 棟・土坑が検出され、墨書土器も 100 点以上出土し、「春」「奉」「松」「厨」などの文字が判読されている。隣接する旧市来町では安茶ヶ原遺跡から「日置厨」の墨書土器が出土している。

中世～近世

旧東市来町は中世山城が多く、中心となる鶴丸城は古代から、大蔵氏が居を構えて市来氏と称していた。中世においては市来院に属し、椎宗姓を称した市来氏は島津軍に攻められ滅亡するが、1550 年、フランシスコ・ザビエルが鶴丸城に立ち寄り、布教活動をしたとの記録も残されている。また、11 年後に鶴丸城をたずねた宣教師のイルマン・ルイス・デ・アルメイダは「私たちは城に到着しましたが、これは世界で最も堅固なものの一つです。それは十の要塞に分かれている山にあるからです。そのひとつひとつが互いに離れ、つるはしで削り取ったように険しく、人間の手で作ることは不可能であると思われるほど、深い堀で囲まれています。一つの要塞から他の要塞へ行くためには跳ね橋を渡るのですが、渡るときに下を見ると、はなはだしく高いので地獄を見ているようです。全要塞の中心に本丸があって、そこに城主が住んでいますが、これは鹿児島の大名家来です。」(注 1) と詳細な記録を残している。

向柵城跡では、空堀、帯曲輪、曲輪、堀切、大型円形土坑、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、炉跡などの遺構が検出された。また、近世では多くの柱穴群が検出された地区があり、それに伴って、薩摩焼や肥前系の陶磁器が出土した。特に薩摩焼は、竪野窯、山元窯、堂平窯産のものが出土し、周辺の大規模な掘立柱建物跡の検出から、当時の上級武士の屋敷跡が所在していたことが推定される。

市ノ原遺跡第 4 地点では、掘立柱建物跡、溝状遺構、道路遺構、鍛冶炉跡などが検出された。特に、道路遺構は、藩政時代薩摩国の主要街道であった出水筋の一部と考えられ、これまで、近世の街道については、古文書や絵図などの文献資料や街道周辺の歴史的環境(史跡や文化財など)に基づいた調査が行われてきたが(注 2)(注 3)、考古学的手法で道の構造や規模などが明らかになったことは特筆される。

(注 1) 結城了悟 1975 『鹿児島島のキリシタン』春苑堂書店

(注 2) 鹿児島県教育委員会 1993 『歴史の道調査報告書 第 1 集 出水筋』

(注 3) 応安 5 (1372) 年 2 月「印阿讓状写」(鹿児島県 2002 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ九』市来文 書五 - 3 所収)。

第3節 周辺遺跡

1 周辺遺跡地名表

第3表 周辺遺跡 (1)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺構・遺物
1	下諏訪	28-11	いちき串木野市大里	縄文	土器片・打製石斧
2	中諏訪	28-12	いちき串木野市大里	古墳	土師器・須恵器
3	西ノ鼻	28-39	いちき串木野市大里	古墳・中世	土師器・陶器
4	半崎堀	28-40	いちき串木野市大里	弥生～中世	弥生土器・土師器・陶器
5	上平山	28-41	いちき串木野市大里	弥生・古墳	土器
6	市ノ原 3地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	細石刃核・集石・岩本式・塞ノ神式等・竪穴住居跡・土坑・高橋式・成川式等・掘立柱建物跡・鍛冶炉・陶磁器等
7	市ノ原 4地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	竪穴住居跡・集石・前平式・押型文等・竪穴住居跡・土坑・高橋式・成川式等・竪穴住居跡・溝・須恵器・土師器等・街道跡・鍛冶炉・陶磁器等
8	市ノ原 5地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群・落とし穴・ナイフ・前平式等 弥生土器・成川式土器 道跡・掘立柱建物跡・土師器等
9	諏訪原	29-61	日置市東市来町湯田	古墳・中世	土師器・陶器・染付
10	森蘭平	29-62	日置市東市来町長里	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器
11	浦田	29-73	日置市東市来町長里	古墳・中世	土師器
12	今里	29-67	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	礫群・尖頭器・ナイフ・細石刃核・集石・前平式土器・深浦式土器・出水式土器・石匙・成川式土器
13	堂園平	29-90	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古代	礫群・ナイフ形石器・尖頭器・細石刃核・集石・吉田式・塞ノ神式・轟式土器等・土坑・土師器・須恵器
14	向柵城	29-17	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	ナイフ・細石刃核・細石刃・隆帯文土器・前平式土器・市来式土器・成川式土器・土師器・須恵器・陶磁器・空堀・曲輪・竪穴遺構・掘立柱建物跡
15	古城跡	29-13	日置市東市来町長里	南北朝	石塁
16	番屋城跡	29-10	日置市東市来町長里	南北朝～室町	消滅
17	平之城跡	29-11	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・古墓塔
18	鶴丸城跡	29-5	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・土塁・礎石
19	得仏城跡	29-15	日置市東市来町長里	中世	鶴丸城の出城
20	総陣ヶ尾	29-14	日置市東市来町長里	中世	五輪塔
21	来迎寺	28-52	いちき串木野市大里 来迎寺	弥生・古墳 中世～近世	弥生土器・成川式 土師器・陶器

第4表 周辺遺跡 (2)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺構・遺物
22	犬ヶ原	29-65	日置市東市来町伊作田	縄文・中世	黒曜石・土師器
23	金木山	29-66	日置市東市来町伊作田	古墳・近世	土器・陶器
24	西原持原	29-76	日置市東市来町伊作田	古墳・中世	
25	伊作田城	29-12	日置市東市来町伊作田	南北朝	伊作田道材居城
26	古城	29-12	日置市東市来町伊作田	古墳 古代	土坑・成川式(甕・壺・高坏・鉢) 畝状遺構・土師器・須恵器・黒色 土器
27	市ノ原 2地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文・古墳 古代～中世	ナイフ・打製石鏃・苦浜式土器・ 前平式土器・須恵器・土師器・陶 磁器・土坑
28	市ノ原 1地点	29-60	いちき串木野市大里	縄文・弥生・古代 中世～近世	集石・前平式土器・埋壺・弥生土 器・掘立柱建物跡・土師器・陶磁 器
29	上ノ原	28-13	いちき串木野市大里 島内	旧石器・縄文・古墳	集石・塞ノ神式土器・石器・成川 式土器・土師器
30	妙見前	28-29	いちき串木野市大里 妙見前	古墳・中世・近世	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 曾畑式土器
31	東園	28-38	いちき串木野市大里 東園	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶磁器
32	田中堀	28-42	いちき串木野市大里田 中堀	縄文・弥生・古墳・ 中世・近世	土器・土師器・陶器
33	崎野堀	28-43	いちき串木野市大里崎 野堀	弥生・古墳・中世・ 近世	土器・土師器・白磁・染付・陶器
34	深田前迫	28-44	いちき串木野市大里深 田前迫	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器・磁器
35	戸崎平	28-45	いちき串木野市大里戸 崎平	中世	土師器・土錘
36	戸崎原	28-46	いちき串木野市大里戸 崎原	旧石器・縄文・古墳・ 中世	細石刃核・縄文土器・成川式土器・ 土師器・土錘
37	上城詰城跡	28-3	いちき串木野市大里上 城詰城	旧石器・縄文・弥生・ 中世	台形石器・縄文土器・白磁・青磁
38	鍋ヶ城跡	28-7	いちき串木野市大里木 場迫	縄文・古代・中世	縄文土器・須恵器・白磁・青磁
39	本寺屋敷跡	28-51	いちき串木野市大里本 寺屋敷	縄文・古代・中世	成川式土器・土師器・五輪塔

引用文献

- 1 『市来町郷土誌』 市来町 1982
- 2 「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅰ）」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 61 1992
- 3 「市ノ原遺跡 5 地点」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 105 2006
- 4 「今里遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33 2002
- 5 「堂園平遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104 2006
- 6 「中世城館」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 40 1987
- 7 「犬ヶ原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 50 2003
- 8 「前畑遺跡・伊作田城跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 6 1995
- 9 「古城遺跡Ⅰ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 7 1996
- 10 「古城遺跡Ⅱ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 10 2004
- 11 「老ノ原遺跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 8 1996
- 12 「老ノ原遺跡 2」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 9 1998
- 13 「猿引遺跡・雪山遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 53 2003
- 14 「池之頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 32 2002
- 15 『東市来町郷土誌』 東市来町教育委員会 1987
- 16 「堂平窯跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 106 2006

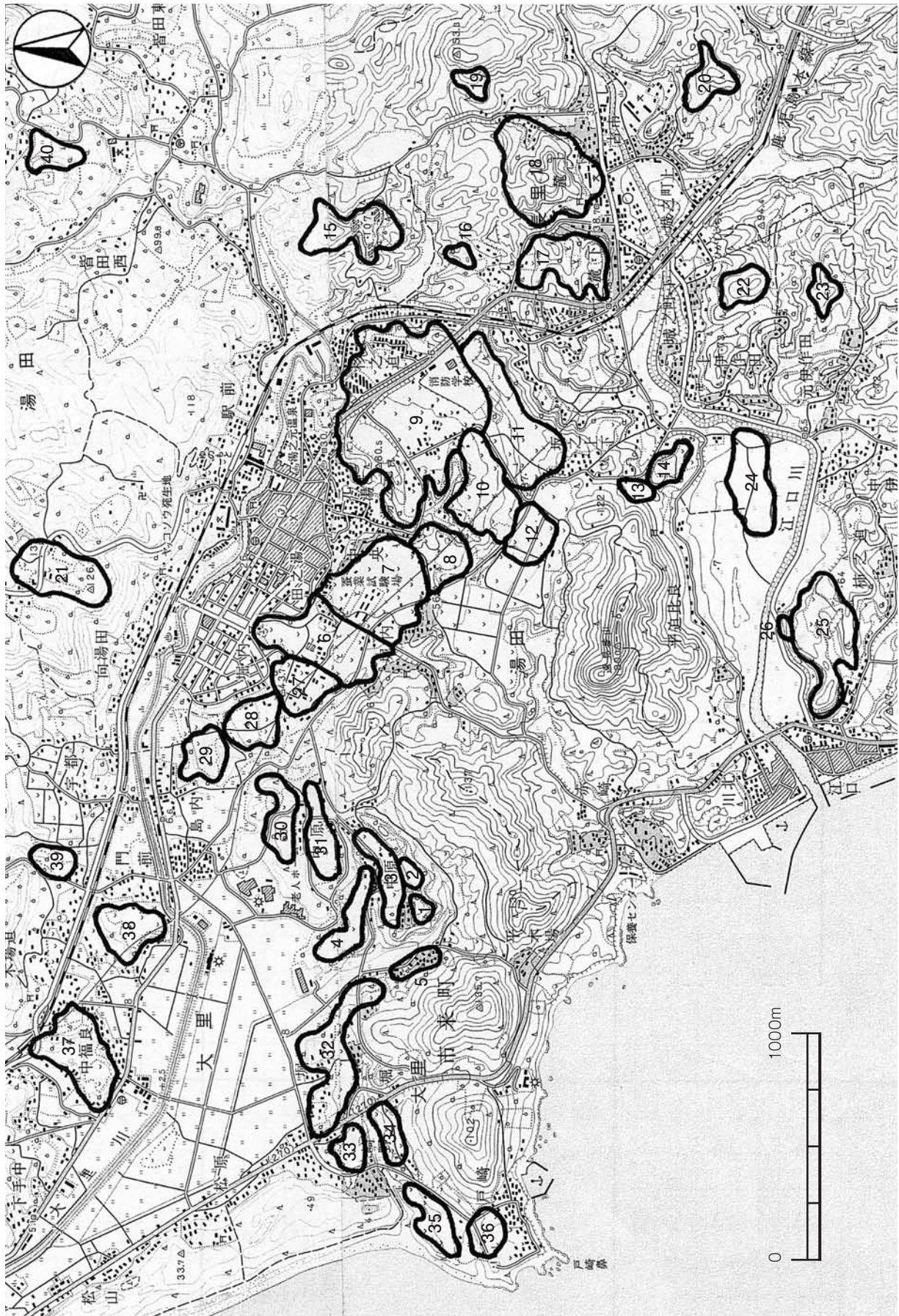
2 養蚕試験場跡地（第 5 図～第 12 図）

本遺跡の南東端から道路を隔てた東側に養蚕試験場跡地が存在する。遺跡としては、市ノ原遺跡第 3 地点のエリア内と考えられるものである。養蚕試験場内において包含層まで及ぶ掘削工事が行われることがあり、それに先立って確認調査が行われた。第 5 図から第 12 図が出土遺物である。

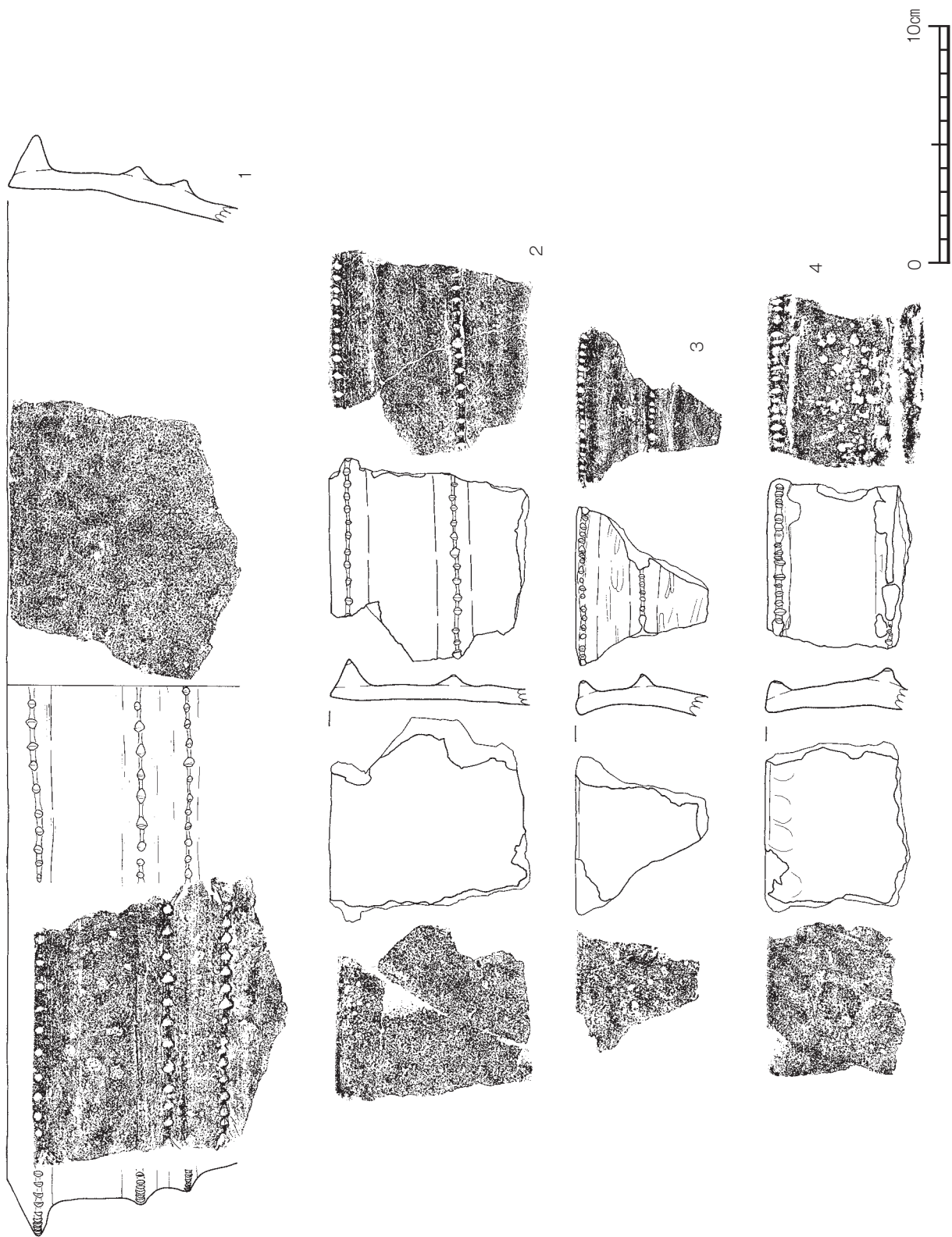
土器では、弥生時代の土器が出土している。1～31 は甕形土器及び鉢形土器で、口縁部がゆるやかに内湾し、口縁部と胴部に断面三角形の突帯に刻みを施すものや、刻目突帯文などの弥生時代の遺物である。

33～36 は石鏃で 33～35 は凹基式、36 は平基式に近い石鏃である。38～41 は磨石や敲石等である。42 は打製石斧で、長さ約 15cm、最大幅 7 cm であり、肩部の抉りの深さが左右で異なっている。43・44 は磨製石斧で 44 は使用によると思われる剥離が多数観察される。

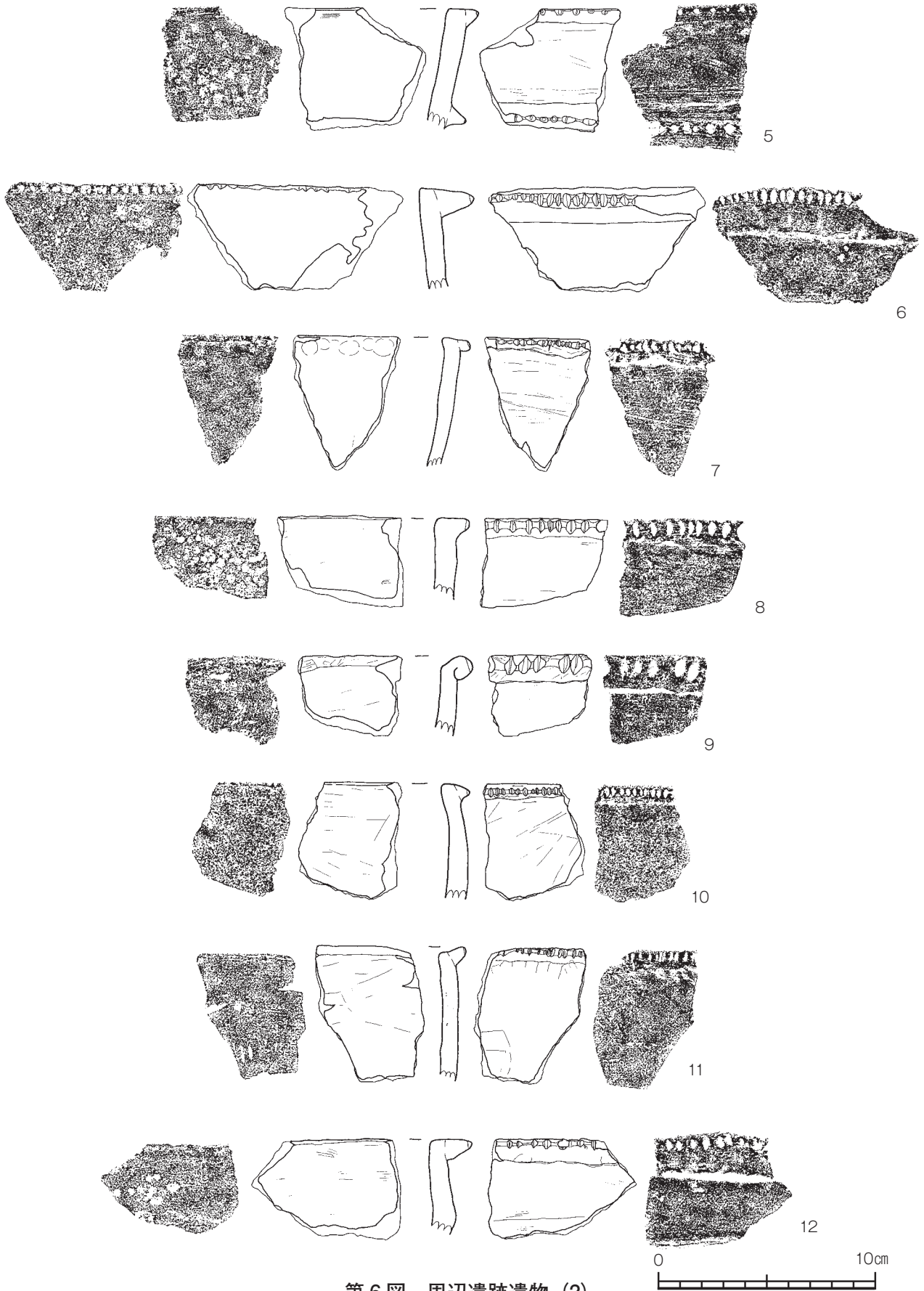
45～49 は、黒曜石の原石及び石核である。



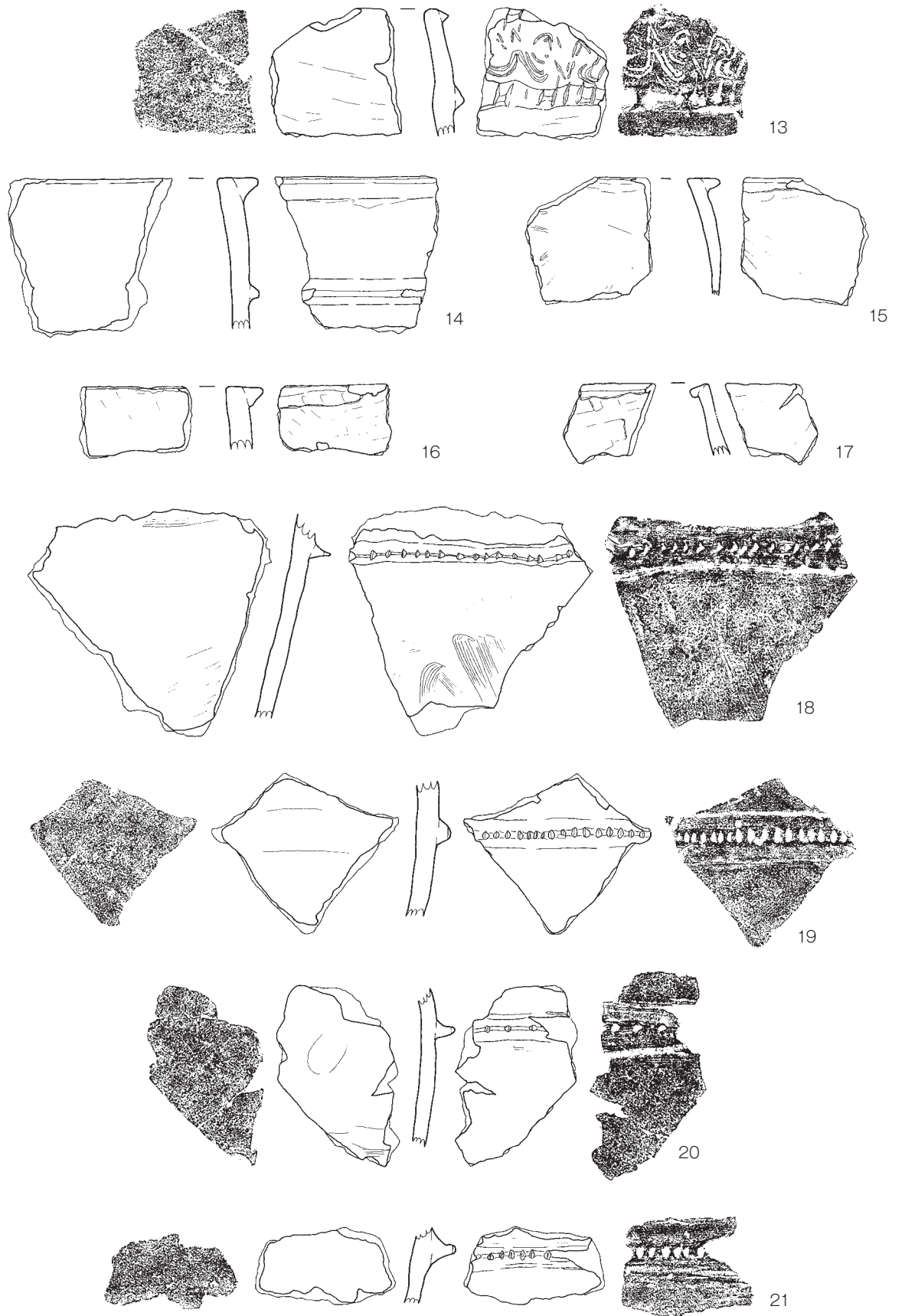
第4図 周辺遺跡位置図



第5图 周边遗迹遗物 (1)

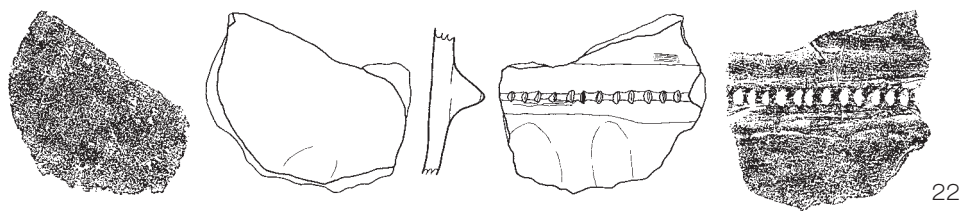


第6图 周边遺跡遺物 (2)

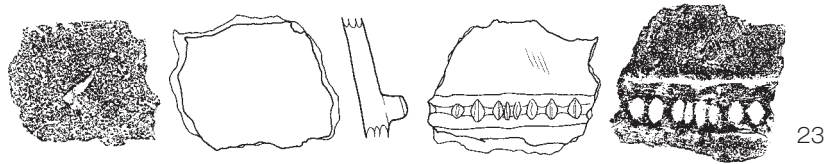


第7図 周辺遺跡遺物 (3)





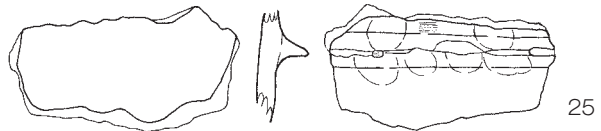
22



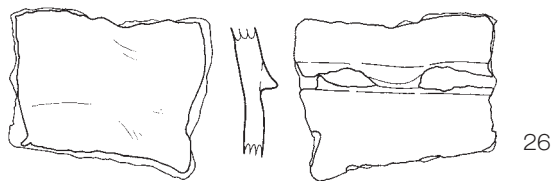
23



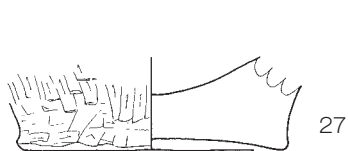
24



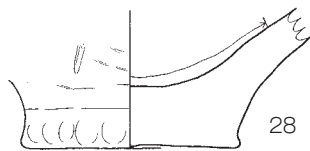
25



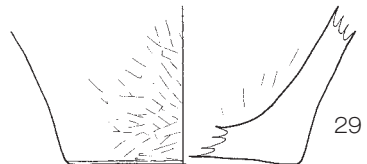
26



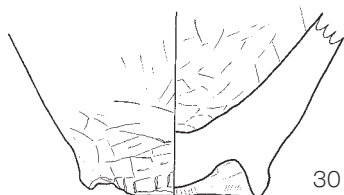
27



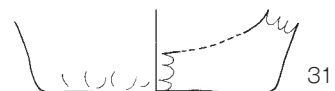
28



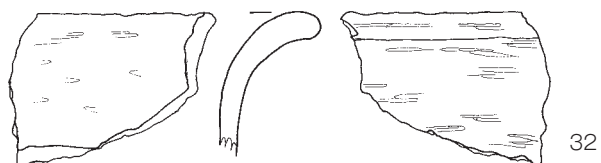
29



30



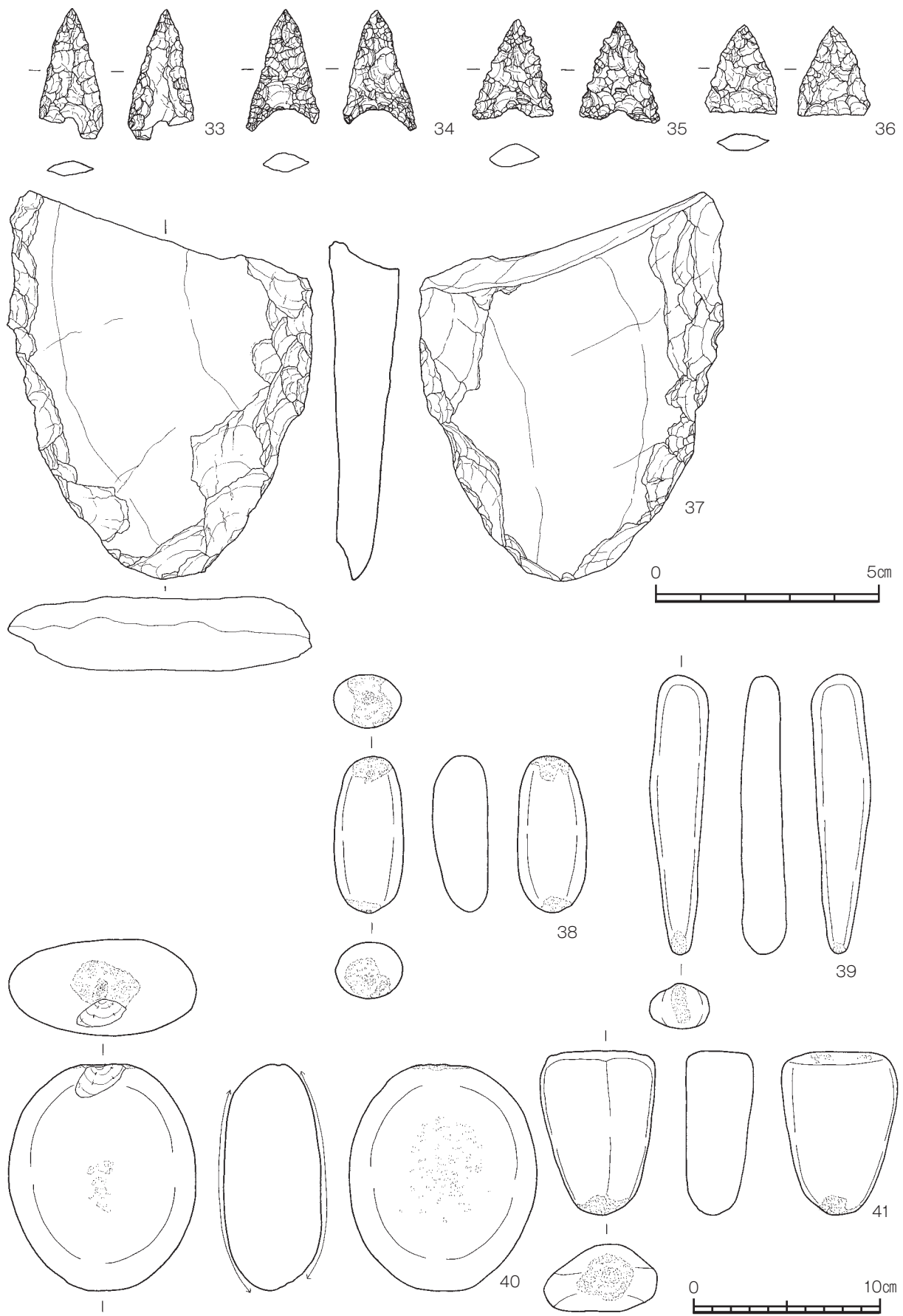
31



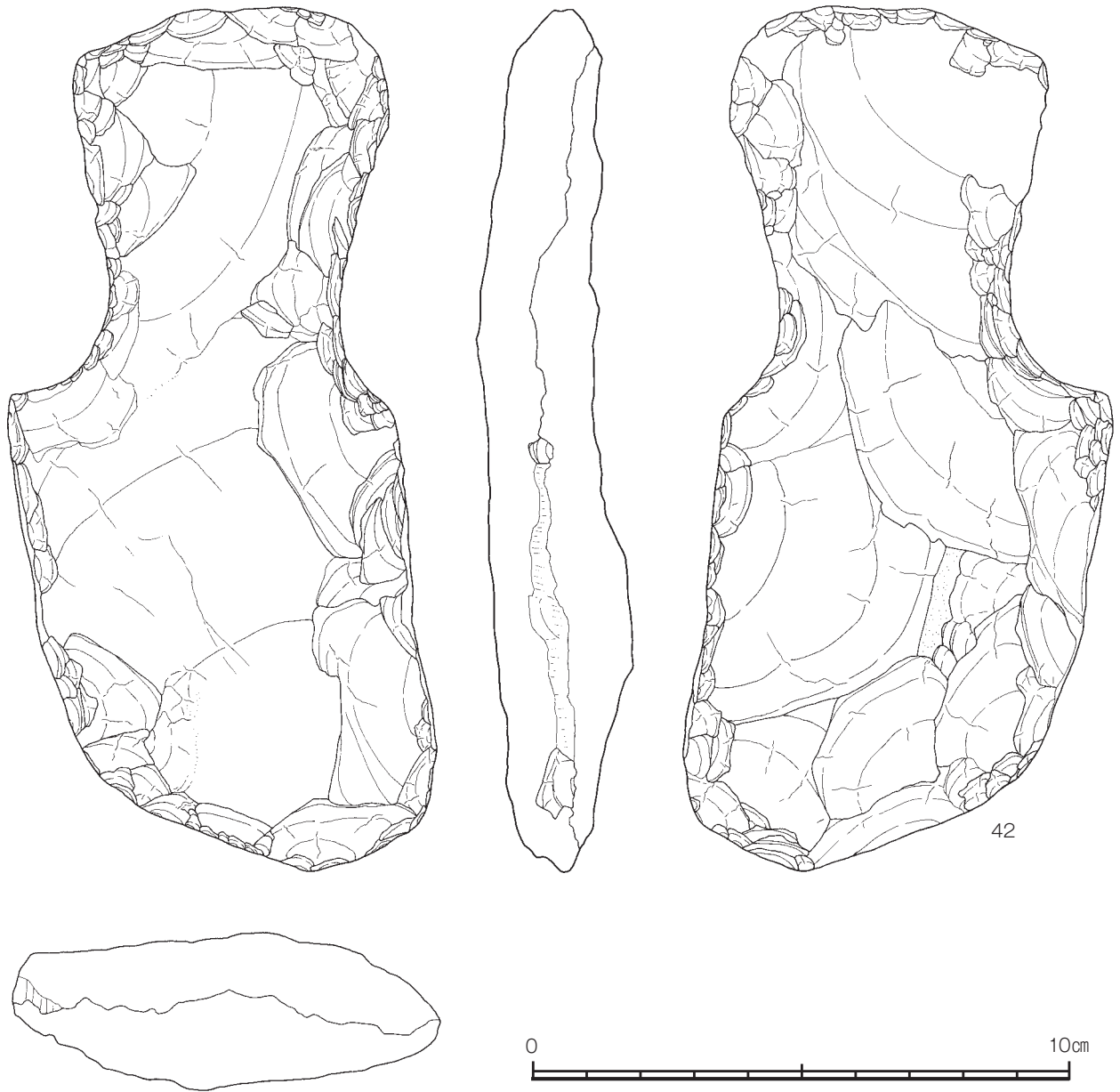
32

第8図 周辺遺跡遺物 (4)

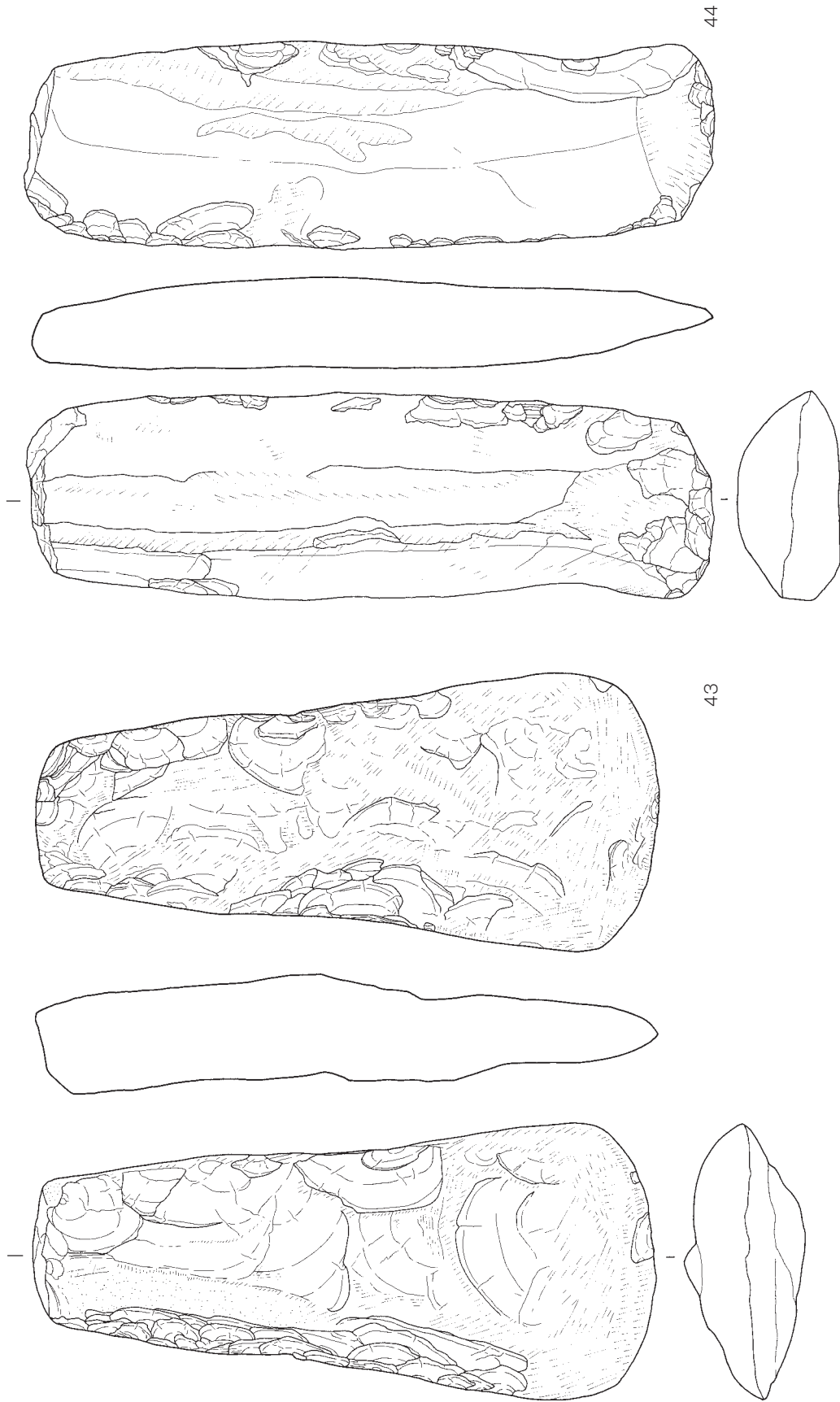




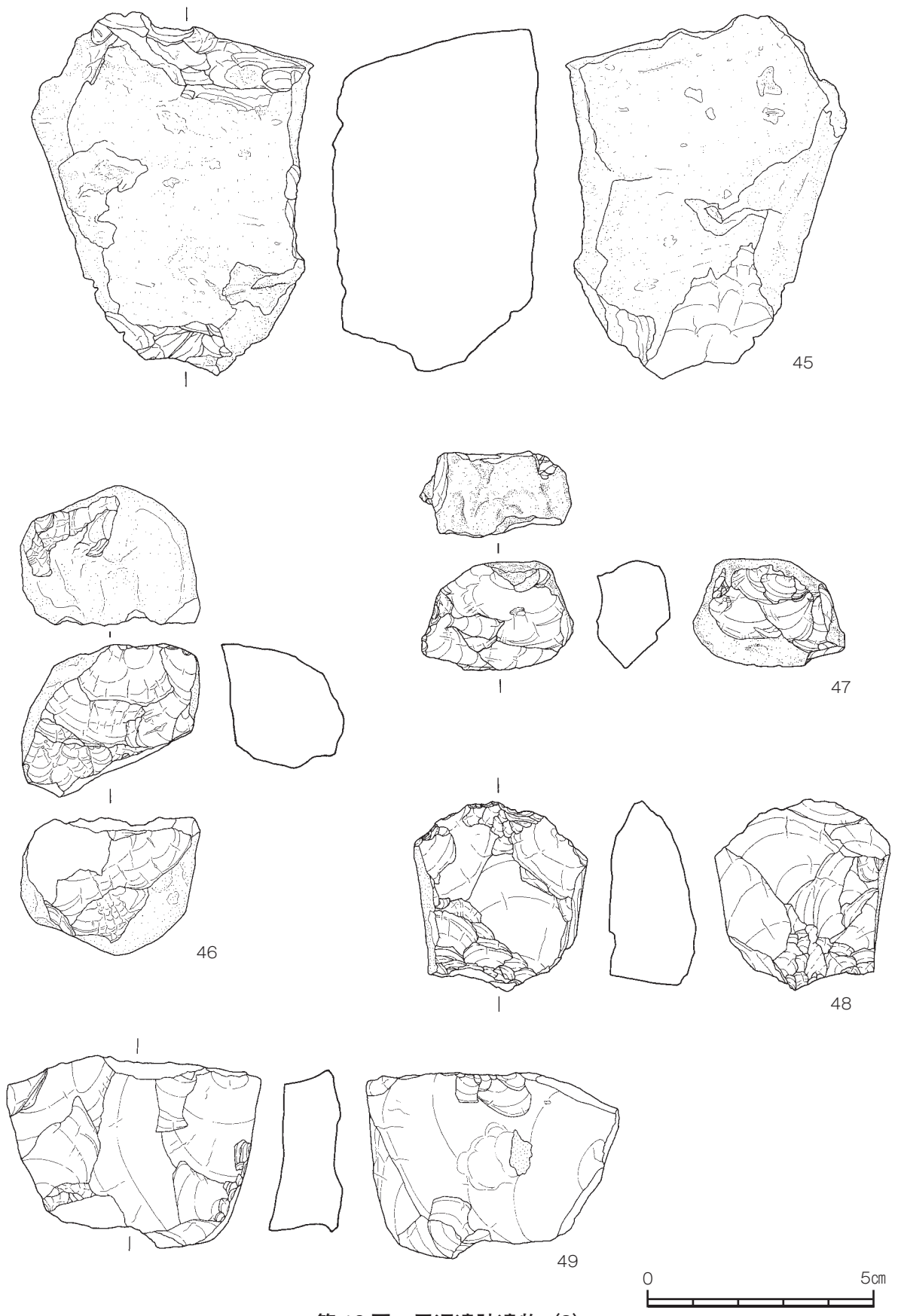
第9図 周辺遺跡遺物 (5)



第10図 周辺遺跡遺物(6)



第 11 図 周辺遺跡遺物 (7)



第12図 周辺遺跡遺物 (8)

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の概要

市ノ原遺跡第3地点の調査は、国土交通省の設計図面のセンターラインをもとに10m×10mのグリッドを設定して、確認調査は、地形や表面の遺物の散布状況を考慮して数十か所のトレンチを設定して行った。全面は、遺跡全体の表土を計画的に重機で除去しながら層位的に掘り下げて調査を行った。

平成8年の12月までは確認調査を行い、その結果を基に平成9年の1月から3月は遺跡の南西部を中心に全面調査を行った。平成9年4月（平成9年度）から平成10年度にかけては、調査担当職員、作業員も大幅に増員して遺跡全体の大規模な調査を行った。平成11年は、生活道路の切り替え部分や未買収地など10年度までに調査が困難であった部分の追加調査が中心となった。

出土遺物は、旧石器時代・縄文時代早期～晩期、弥生時代、古墳時代、古代・中世、近世とほとんどの時代のものが出土している。ただし、以前圃場整備が行われていることから、古代及び中世の包含層であるⅡ層は部分的に存在するだけであった。

近世の遺物においては、ほとんどが表土からの採集品であることから、今後の資料となると思われるものを精選して掲載した。

遺構については、縄文時代の集石遺構、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代を中心とすると思われる掘立柱建物跡、時期不明の土坑及び柱穴群などが主体であった。

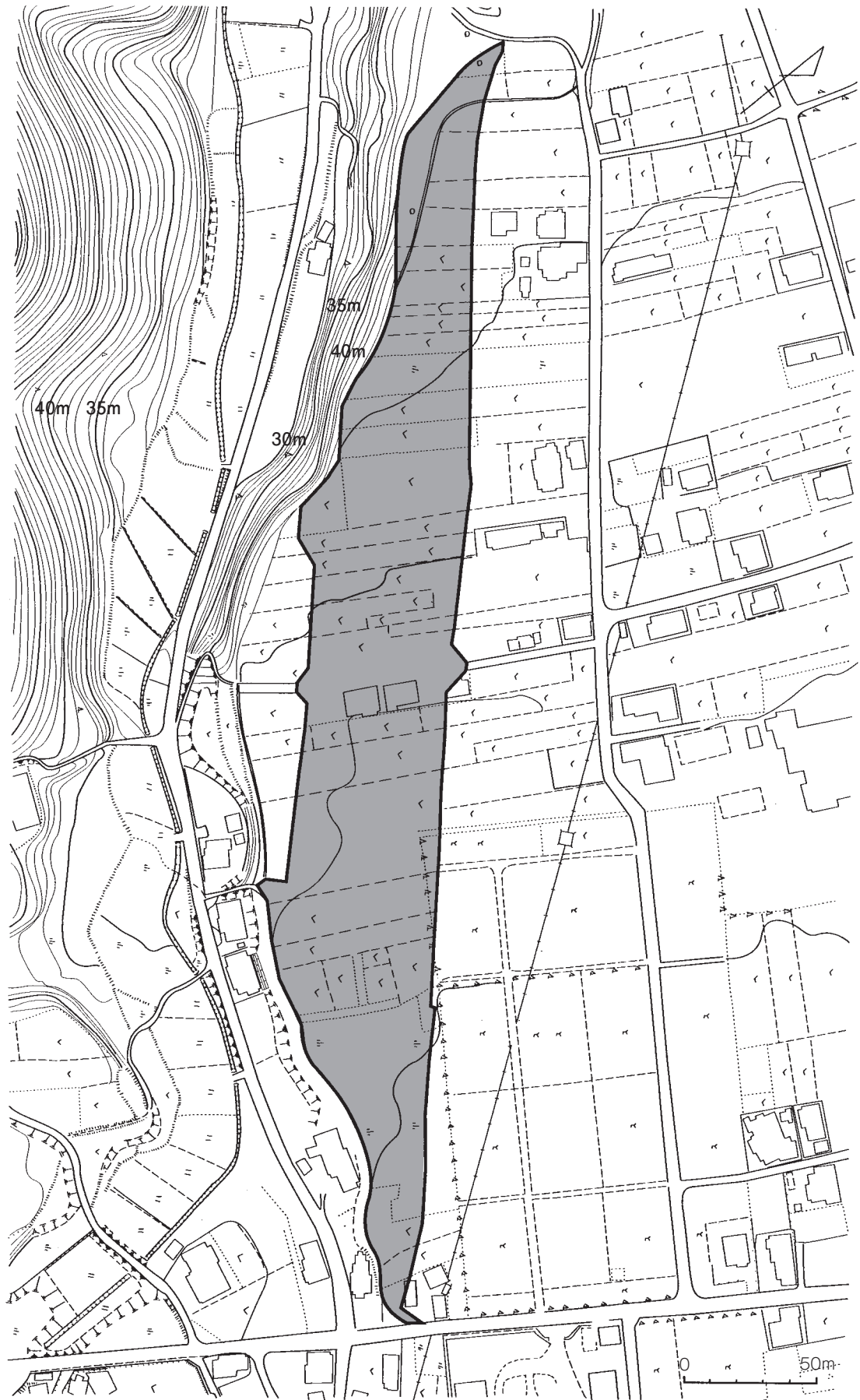
遺物については、日置地区でよくある現象であるが、縄文時代早期の土器が赤ホヤの二次堆積中から数多く出土し、それらが赤ホヤ下位の層から出土したものと接合するという状況が数多く見られた。また、赤ホヤ上位の遺物は、縄文時代前期から古墳時代までの遺物が混在して出土するという状況であった。

そこで、本報告書では土器に関しては、基本的な形式に従って掲載したが、石器については縄文時代から不変的に用いられているものも多いことから、旧石器時代以外は、出土層に従って掲載している。

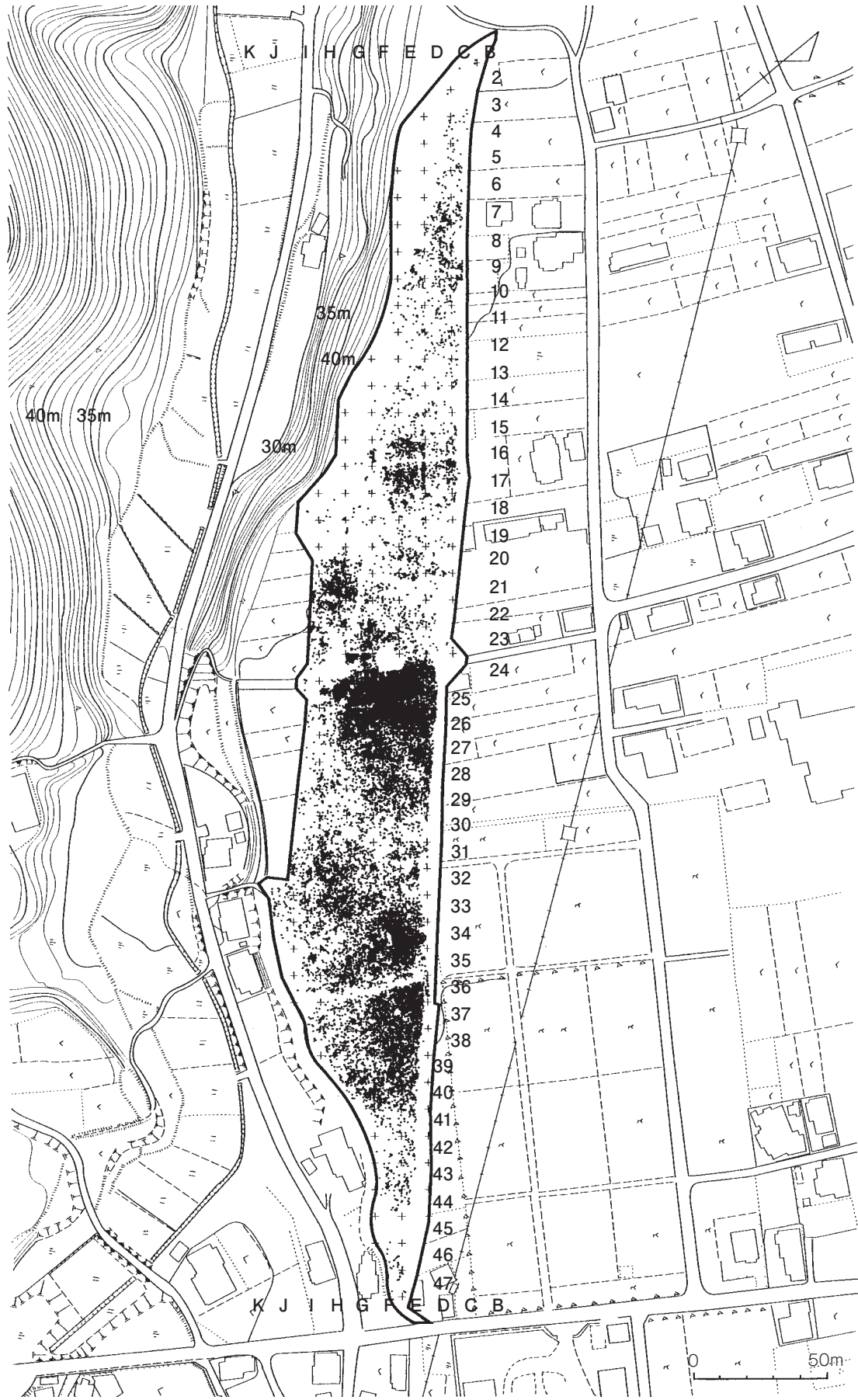
また、遺構についても、遺物の共伴がほとんどなかったことから、遺物が共伴しているもの及び縄文時代の集石遺構・古代・中世の遺構の特徴を持つと思われるものに関しては当該する時代において報告したが、それ以外の遺構については、時期不確定とし、古代・中世の項目の最後に各層毎の土坑及びピット群として報告した。

次に、本遺跡の全体的な遺物の出土状況は、第14図の土器出土状況図や第15図の石器出土状況図からわかるように、やや濃淡はあるものの北東部と南西部を中心に遺跡の全範囲から出土している。

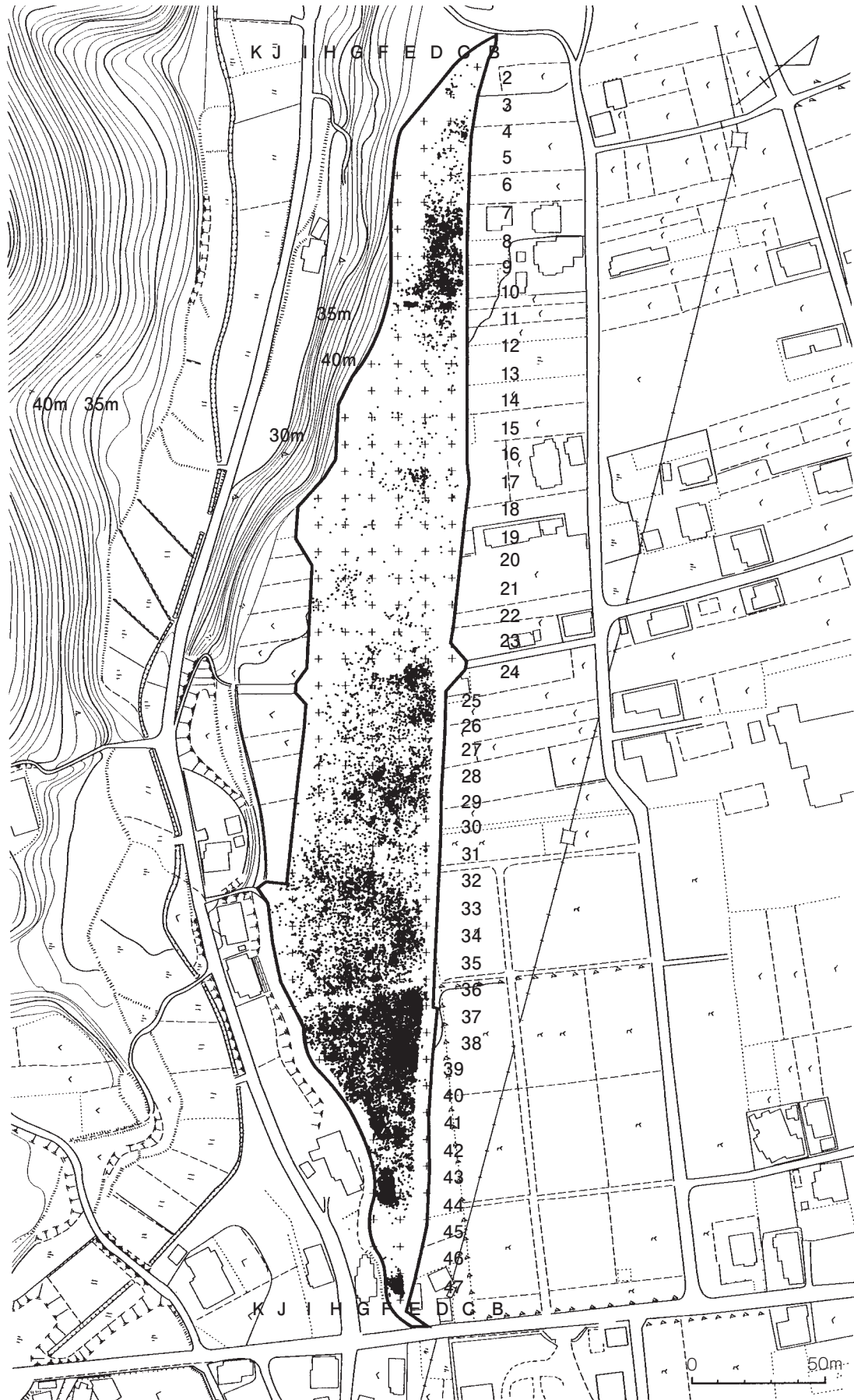
遺構の溝、道跡等については、遺構の性格上、遺跡の中を縦断・横断している。他の遺構については、部分的に集中しているようであり、当該遺構の項において分布図等で示した。



第 13 図 発掘調査範囲



第 14 図 全土器出土状況



第 15 図 全石器出土状況

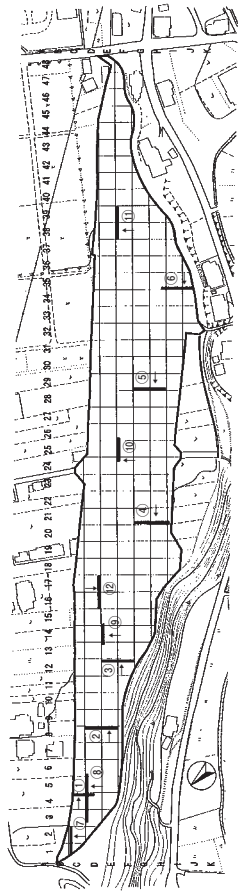
第2節 遺跡の地形及び層序

市ノ原遺跡第3地点は、東シナ海から内陸に1.5kmほどに位置する標高約180mを中心とする小起伏山地にあり、西麓に段丘状の台地が西に向かって緩やかに傾斜する標高約40m～50mの台地に立地し、隣接して市ノ原遺跡第2地点及び第4地点がある。

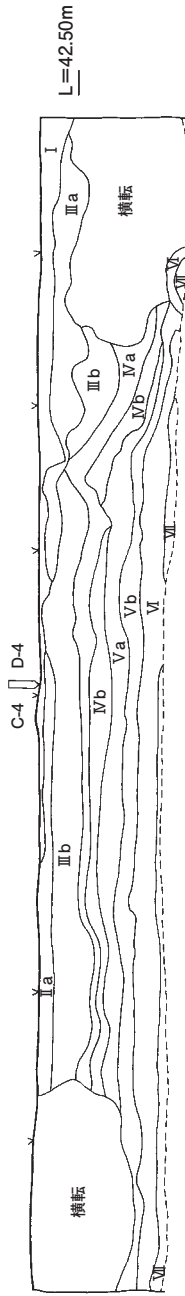
第3地点は、北東から南西にかけて約5m緩やかな傾斜を持つ台地である。この遺跡の層位の特徴は、耕作により古代・中世の遺物包含層であるⅡ層が部分的にしか残存していないことと、一見、安定した層位のように感じられるが、縄文時代早期の遺物がⅢ層から出土し、それらが本来の遺物包含層であるⅤ層の遺物と接合するという状況が数多くみられた。また、Ⅶ層が細石刃や細石刃核の本来の遺物包含層であるが、Ⅳ層やⅤ層からも多数出土している。

基本的な層序は、以下のとおりである。

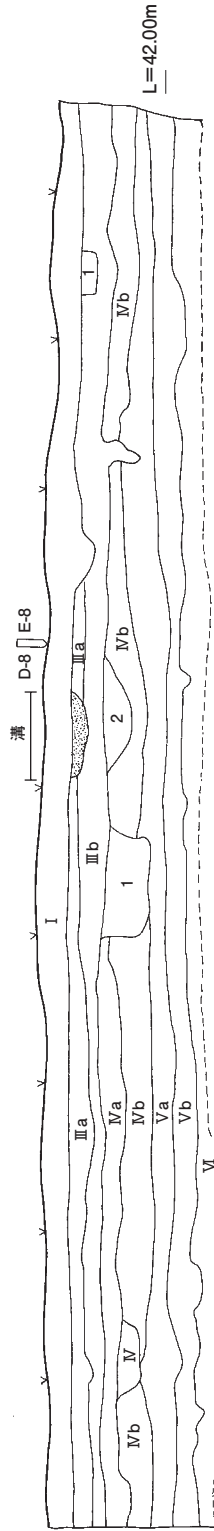
I層	I層：表土。現耕作土である。
Ⅱ a層	Ⅱ a層：淡黒色土、中世の遺物包含層であるが、削平が著しい。
Ⅱ b層	Ⅱ b層：黒色腐植土。古代の遺物包含層であるが、削平が著しい。
Ⅲ a層	Ⅲ a層：暗茶褐色土。基本的に縄文時代晩期から、古墳時代の包含層。
Ⅲ b層	Ⅲ b層：茶褐色土。基本的に縄文時代前期から後期の包含層。
Ⅲ c層	Ⅲ c層：黄橙色火山灰土。鬼界カルデラ噴出起源の一次堆積火山灰、通称アカホヤ。
Ⅳ a層	Ⅳ層：暗茶褐色土。基本的に縄文時代早期中葉から後葉の包含層。粘質が強い。濃淡の差でⅣaとⅣbに分層できる箇所もみられる。
Ⅳ b層	
Ⅴ a層	Ⅴ層：黒褐色土。基本的に縄文時代早期前の包含層。粘質が強い。濃淡の差でⅤaとⅤbに分層できる箇所もみられる。
Ⅴ b層	
Ⅵ層	Ⅵ層：黄色火山灰土。桜島噴出起源の火山灰、通称薩摩。
Ⅶ層	Ⅶ層：黒褐色粘土。乾くとクラックが発達する。主に旧石器時代細石器文化期の包含層。下部にナイフ形石器文化期の遺物を若干含む。
Ⅷ層	Ⅷ層：暗茶褐色粘土。乾くとクラックが発達する。若干のナイフ形石器文化期の遺物を含む。
Ⅸ a層	Ⅸ a層：淡褐色土。始良カルデラ噴出起源の火山灰の二次堆積火山灰。
Ⅸ b層	Ⅸ b層：淡黄白色土。始良カルデラ噴出起源の火山灰の一堆积火山灰、通称シラス。



- 凡例
 1. イモ穴
 2. 明黄褐色粘質土
 3. ピット



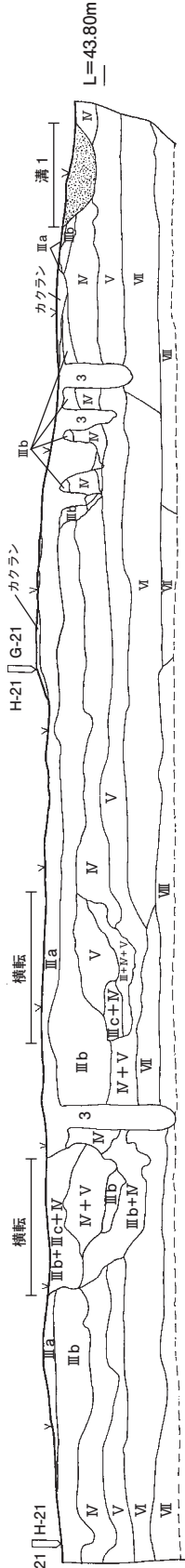
① L=42.50m



② L=42.00m

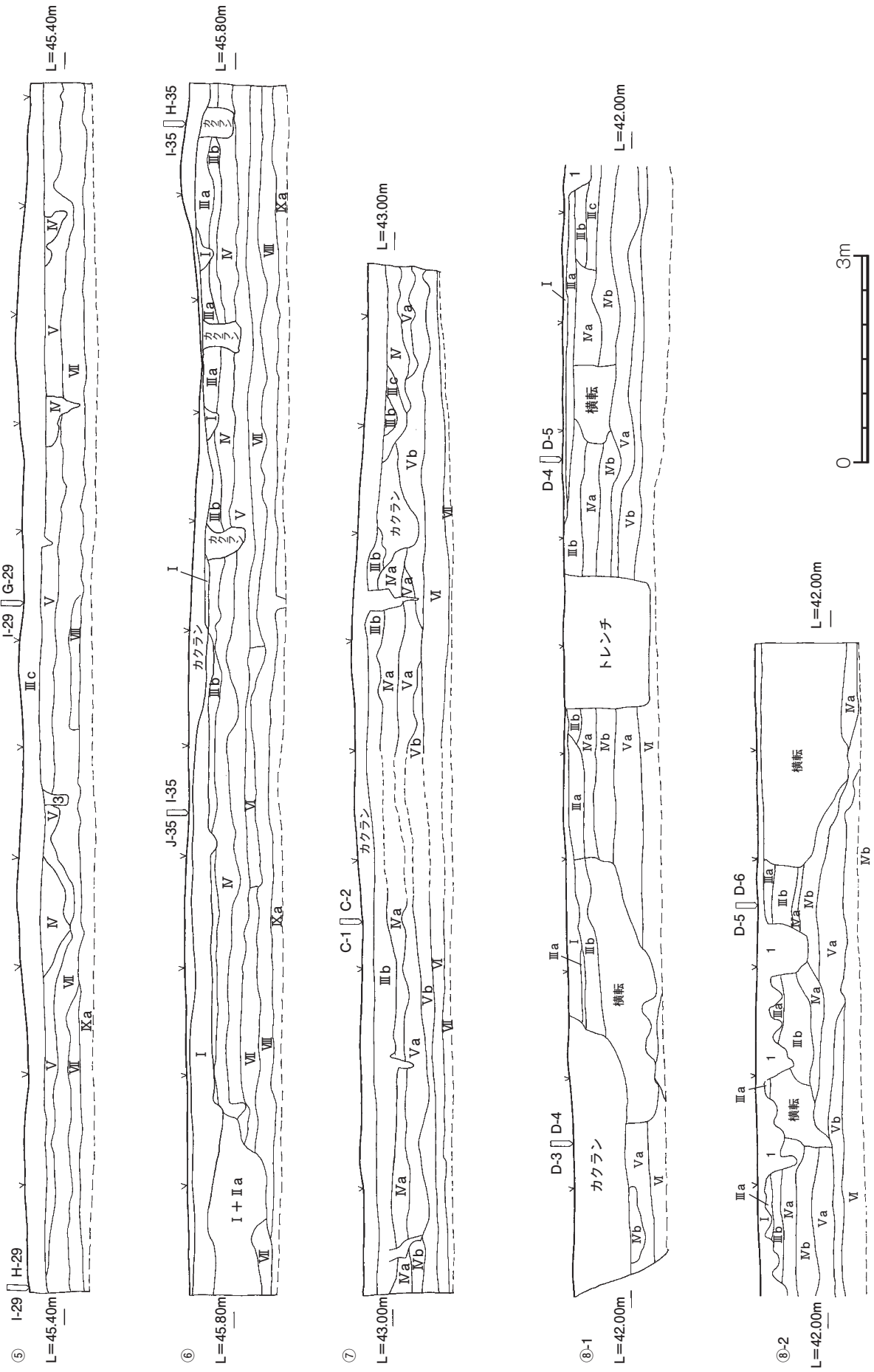


③ L=42.20m

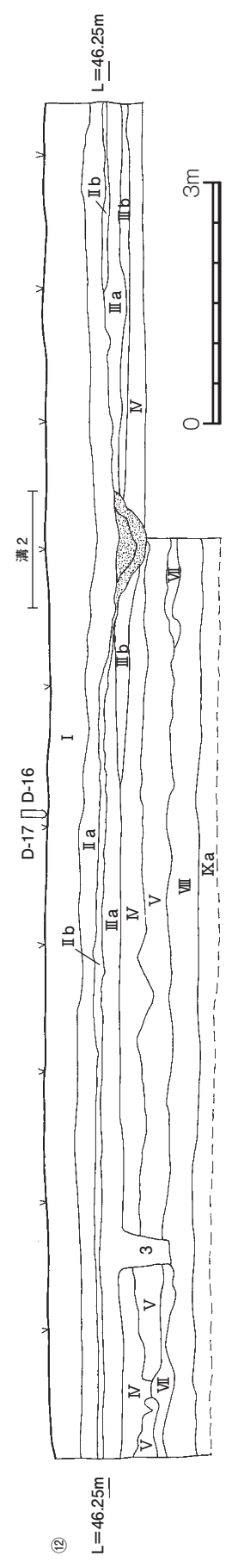
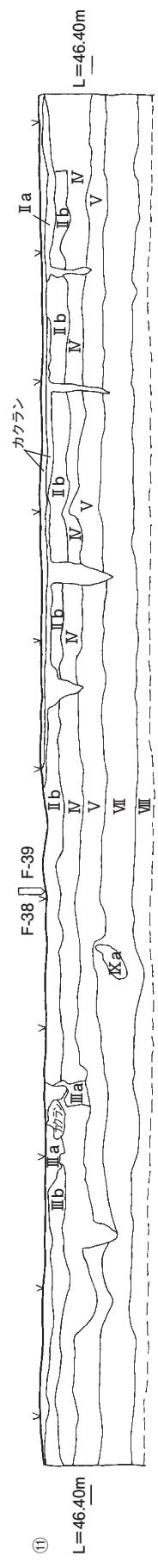
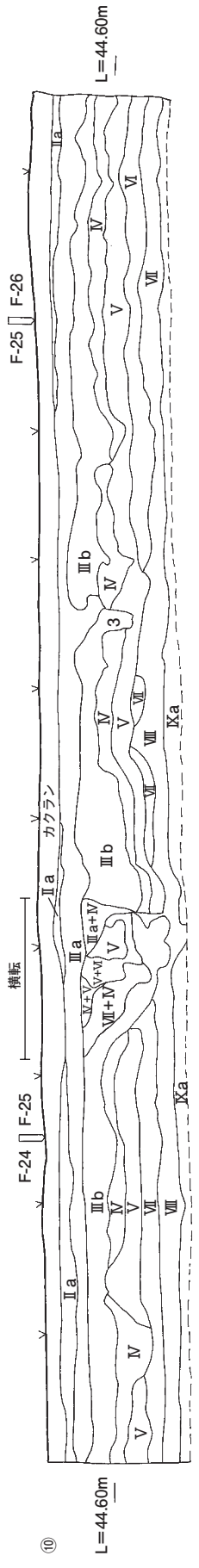
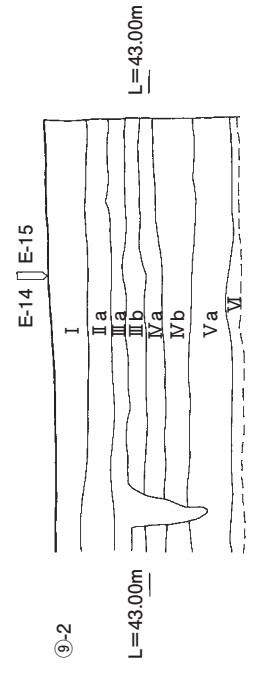
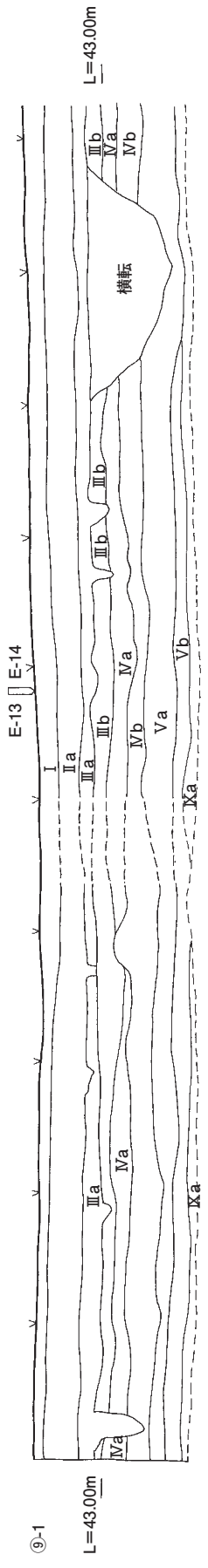


④ L=43.80m

第16図 土層断面図1



第17図 土層断面図2



第18図 土層断面図3

第Ⅳ章 旧石器時代の調査

本遺跡では旧石器時代の遺構は検出されず、遺物の出土がブロックごとのまとまりを持って検出されたのみであった。ただし、層序の項で言及したように、土層の堆積が安定しておらず、例えば細石刃や細石刃核のいくつかはⅢ層やⅣ層から出土しているような状況であった。遺物の上下動がかなり激しいと言わざるを得ず、原位置を保って検出されたとは言い難い。このような状況であるので、かなり疑問を感じながらブロックを設定したが、とりあえず、遺物の水平方向の移動は少ないものと仮定して報告するものである。

さて、この時代の遺物は2時期に分かれる。1つはナイフ形石器文化期であり、今ひとつは細石刃文化期である。ただし、この遺跡で層位的に分離された結果ではなく、従来の南九州地域における石器編年を個々の石器に適用した結果としての時期区分である。

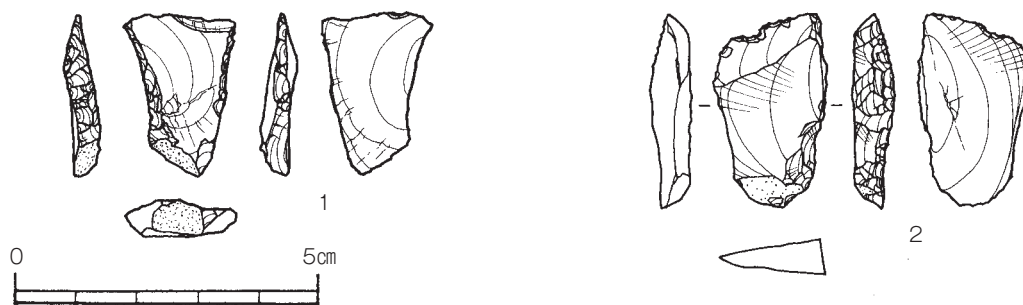
なお、挿図原稿のスケールは、細石刃核は80%に縮小して、細石刃は実寸大(100%)で掲載している。個々の資料の大きさ等のデータは第3分冊巻末に他の石器等と一括して掲載した。

第1節 ナイフ形石器文化期の遺物(第19図)

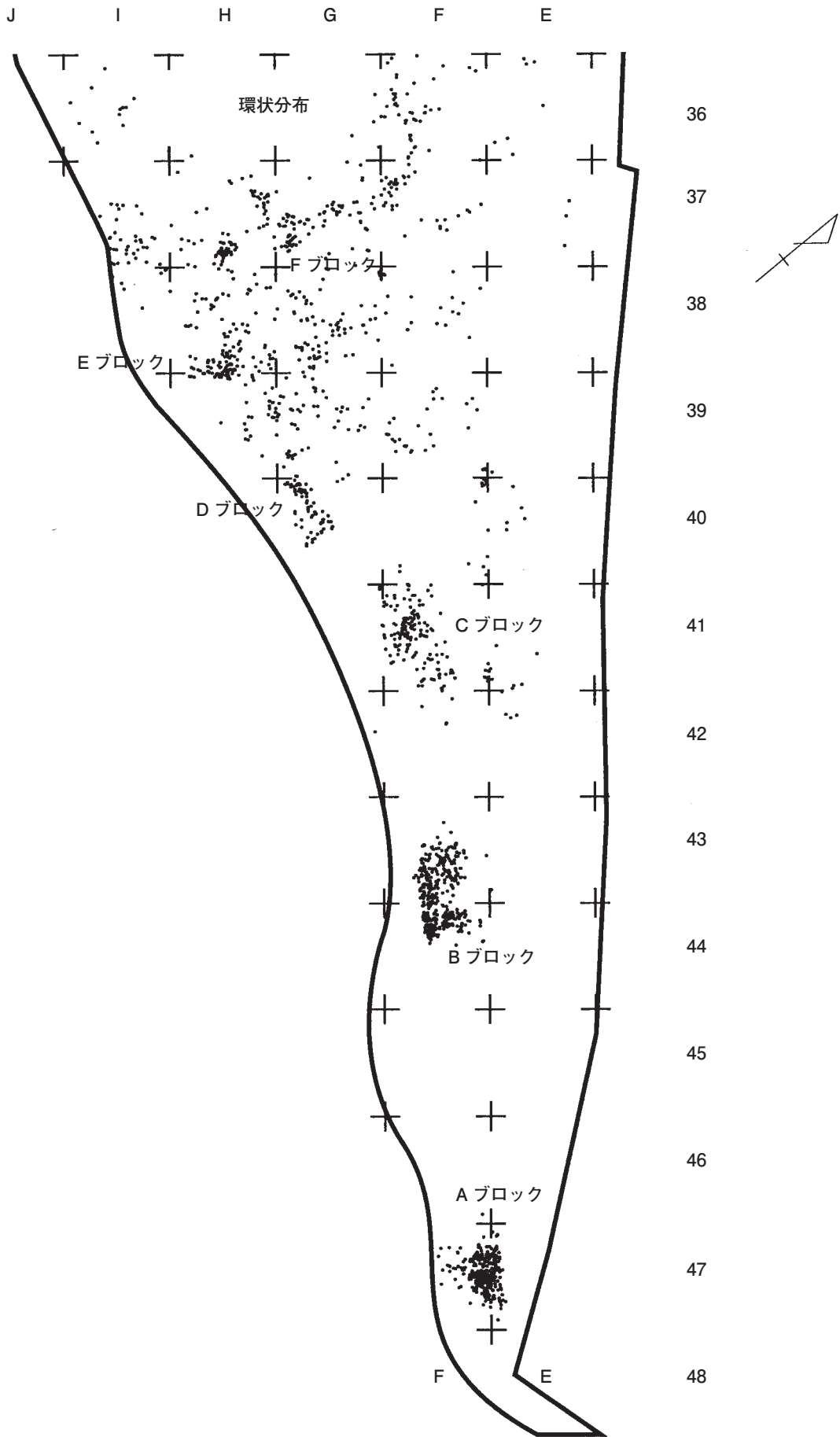
1は鉄石英の横長剥片を素材とする台形様石器である。素材剥片の背面と腹面の打点及び剥離方向はほぼ同じで、横長剥片石核から連続して剥離された剥片を素材とするものであり、一定程度の規格性を持った剥片剥離工程を持った石核から得られた剥片を素材とすることが推定される。素材剥片から器種への転換をもたらす調整剥離は、腹面から背面へ向けての連続するブランディングとチップングであり、両者ともに丁寧な加工である。特に素材剥片の打面及び打瘤部を取り除く加工は特筆すべきものであろう。

2は、肉眼観察だけであるが、おそらく西北九州産黒曜石の横長剥片を素材とする台形様石器である。1と同様素材剥片の背面と腹面の打点及び剥離方向はほぼ同じで、横長剥片石核から連続して剥離された剥片を素材とするものであり、一定程度の規格性を持った剥片剥離工程を持った石核から得られた剥片を素材とすることが推定される。調整加工の具合もほぼ1と同様であるが、左側縁はヒンジフラクチャーしており、ブランディングが施されていない。

この二つの石器に共通する特徴は、先に述べた、調整加工の仕方と素材剥片のありようとともにより基部に礫皮面を残すことである。このことから推定される石核の形状は、厚手の盤状でその木口面から横長剥片を連続して剥離するものであり、その際、右端もしくは左端に礫皮面を残すような片寄せ剥離が連続することである。



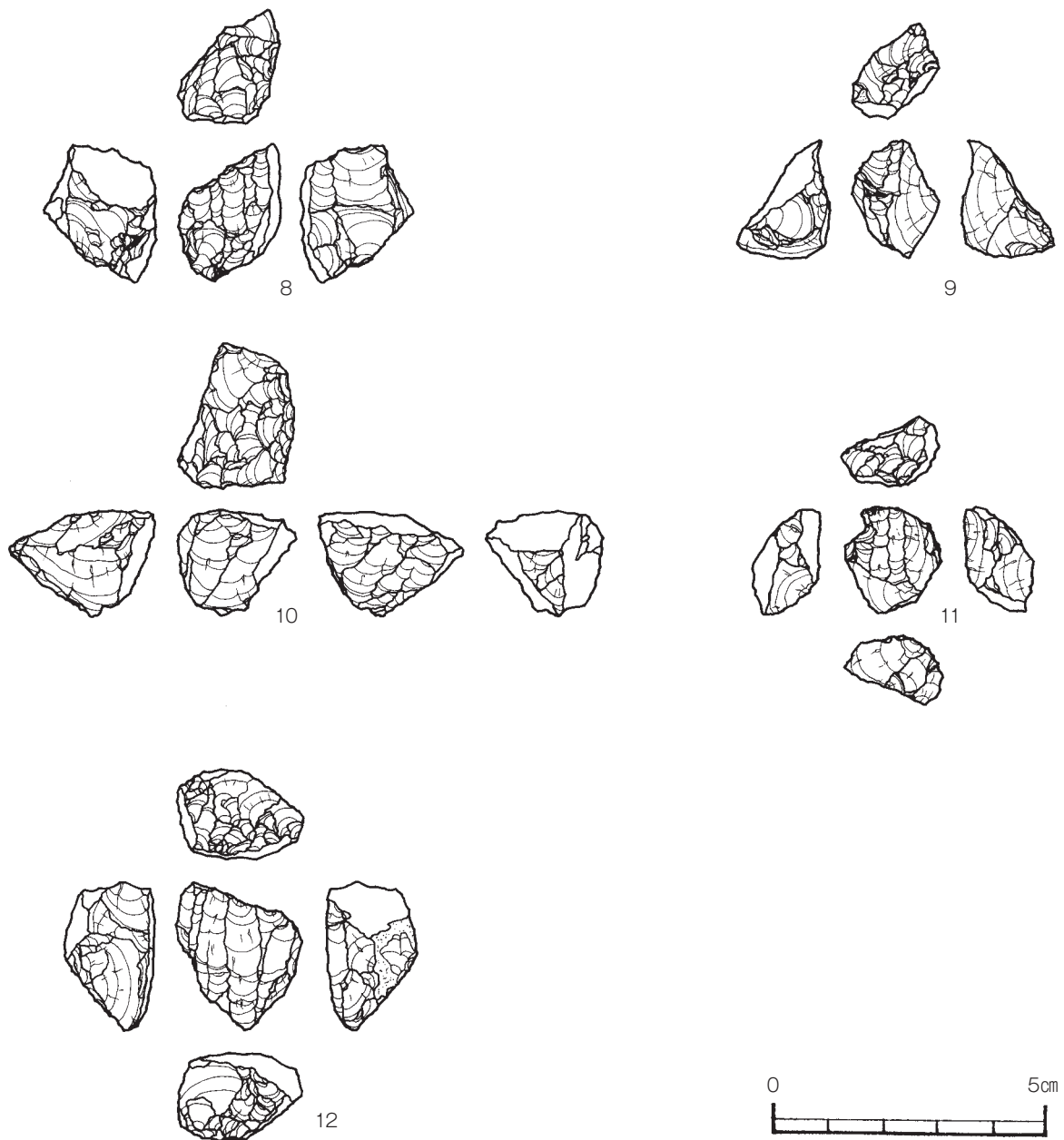
第19図 旧石器時代ナイフ形石器



第 20 図 旧石器時代遺物出土状況



第 21 図 旧石器時代 A ブロック細石刃核 (1)



第22図 旧石器時代Aブロック細石刃核 (2)

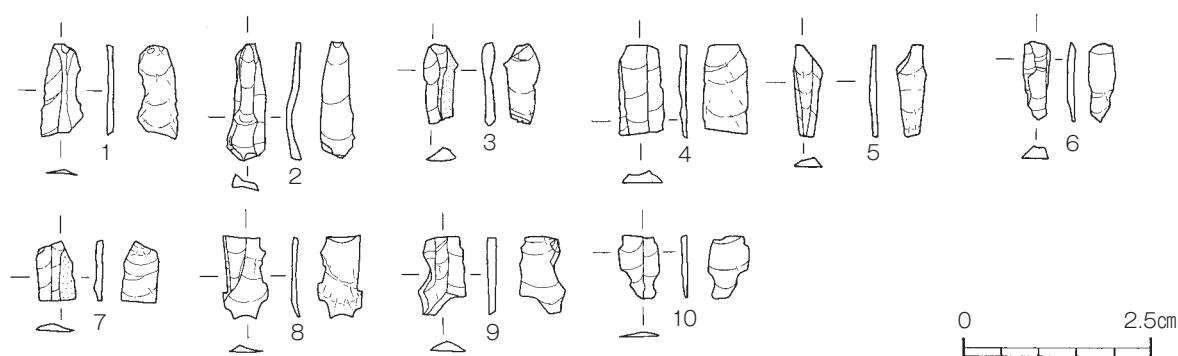
第2節 細石刃文化期の遺物

①Aブロック (第21図～第23図)

12点の細石刃核と10点の細石刃を掲載した。

1及び4は細石刃剥離がほとんど行われていないが、1は打面調整と頭部調整が、4は打面形成が行われている。特に、4は剥片素材であり、下縁調整と背縁調整が行われていないものの、打面形成は横からの一撃で行われており、西海技法と同じような特徴を持つ。

2・3・5・6・8～12は、いずれも小さな分割礫素材であり、剥離される細石刃も細く短いものであり、頻繁な打面調整を残しているという共通する特徴がある。これらの細石刃核は従来、野岳・休場型としてひとくくり分類されてきた資料であるが、ここで1つ指摘しておきたいのは、



第23図 旧石器時代Aブロック細石刃

次のような特徴である。例えば、5、9に見られるような、下縁調整・背縁調整が施されている個体があること、10・12・8に見られるように作業面を逆三角形に整形する意図が窺えることなどである。ことに作業面を逆三角形に整形することは、7の作業面再生剥片にもその様相が窺えることから、このブロックの資料に共有される特徴であると思われる。

次に細石刃であるが、このブロックの細石刃は細石刃核を反映して美しい資料はない。ここに掲載した資料も、4、5だけが背面に連続した細石刃剥離を残すのみで、例えば1は、背面右側は細石刃核の調整剥離を残すし、8、9に至っては、両側縁が不揃いで、このブロックの細石刃核を良く反映している。ただ、5はやや細いものの、整った形状の細石刃であったろうと思われる。

②Bブロック (第24図～第27図)

2点の尖頭器、14点の細石刃核と80点の細石刃を掲載した。

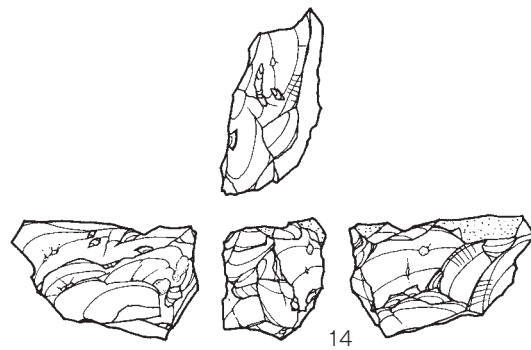
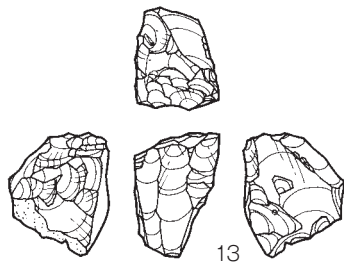
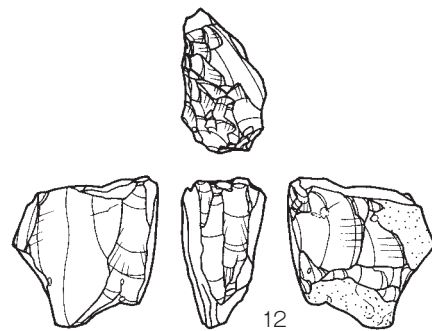
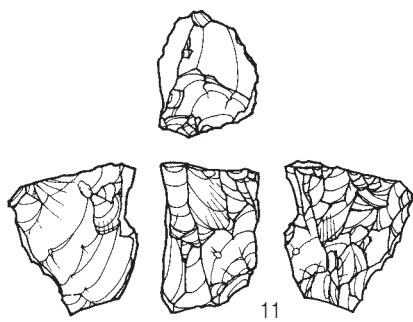
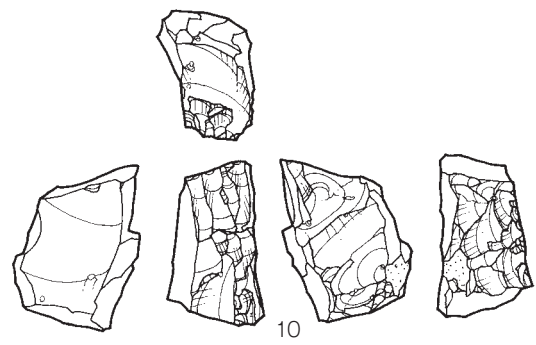
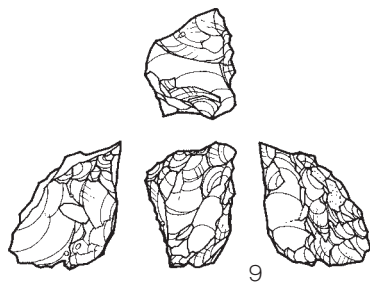
1、2の尖頭器は、その器面調整の粗雑さと周縁調整の荒さから、南九州地域の縄文早期後葉に位置づけられる石槍との強い関係が窺えるが、出土状況から旧石器の所産であると判断されたものである。特に、1の先端部右側縁は背面の周縁調整が施されていないこと、1、2とも礫皮面を残す剥片を素材とすることなどは、縄文早期後葉の石槍の特徴である。

しかし、そのような特徴を持つからこそ、早期前葉、後葉の石槍の系譜を考える際に貴重な資料であるといえる。

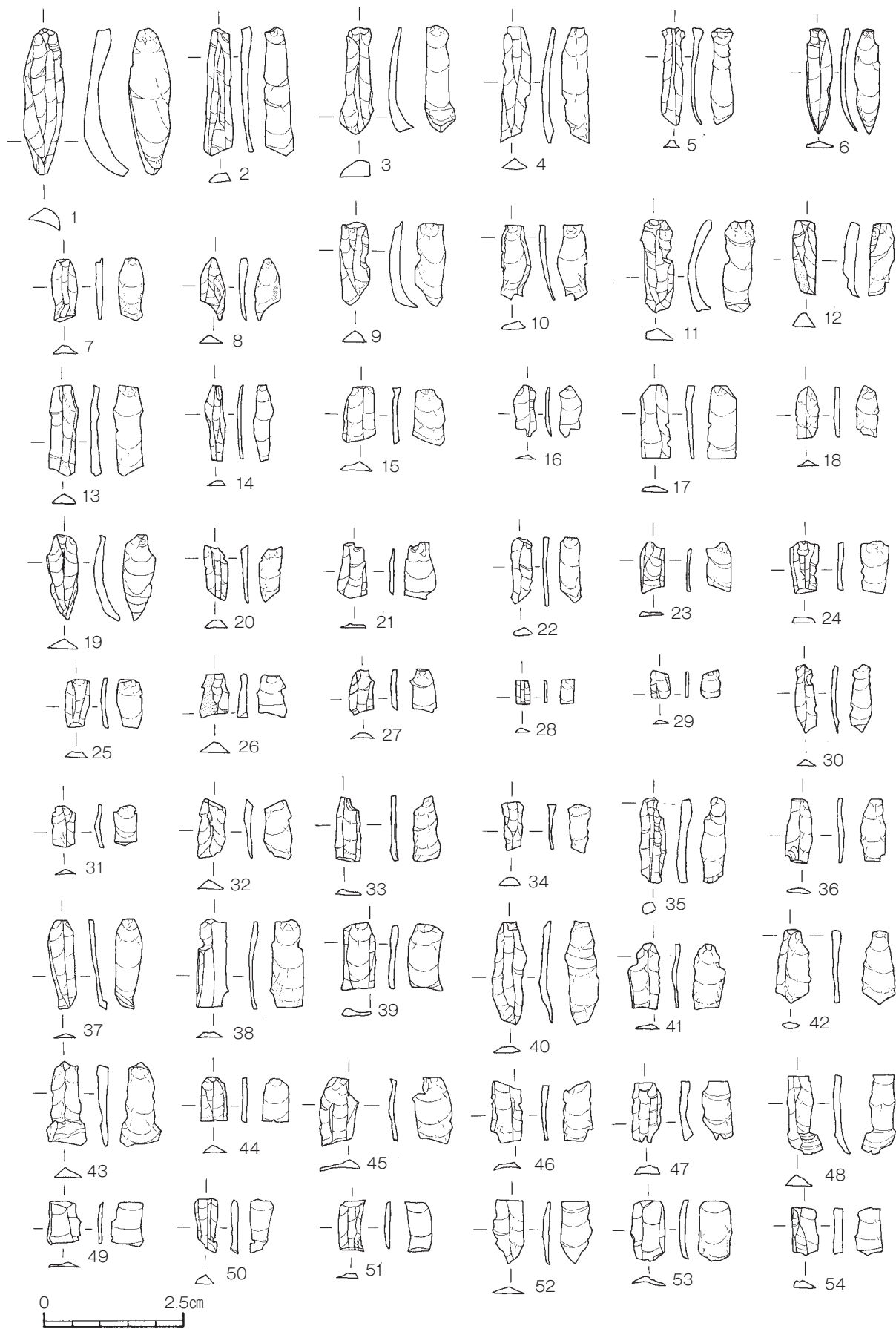
次に、細石刃核であるが、Aブロックのそれと比べ、総じて楔形細石刃核への指向が強いように感じられる。それは、例えば4である。礫皮面を残した小剥片を素材とし、その打瘤部を背縁にするよう打面を横打ちで作出し、作業面を逆三角形に整えている。このような傾向は、1、2、7、9、11、12、13にも窺える特徴である。ただし、1は下縁調整の剥離が失敗で、作業面の下の頂点が中心に来ていない。2も同様である。7は細石刃剥離の進行につれて、作業面が右側面にまで進行した結果、背縁が器軸からずれた位置に来てしまっているし、打面再生を繰り返した結果、過度に傾斜した打面となっている。しかしながら、その傾斜によって、楔形細石刃核の一番の目的であるところの細石刃の規格性が維持されていると見ることが出来る。9も同様であり、背縁が器軸からずれている。12は、下縁、背縁調整を省略出来るような素材の使い方をして、その2つの工程を省略している。14は、下縁調整に失敗して、細石刃剥離までに至らなかった、もしくは、下縁を調整すれば目的とする規格性(長さ)が得られないので細石刃剥離に至らなかった、のではないかと推測



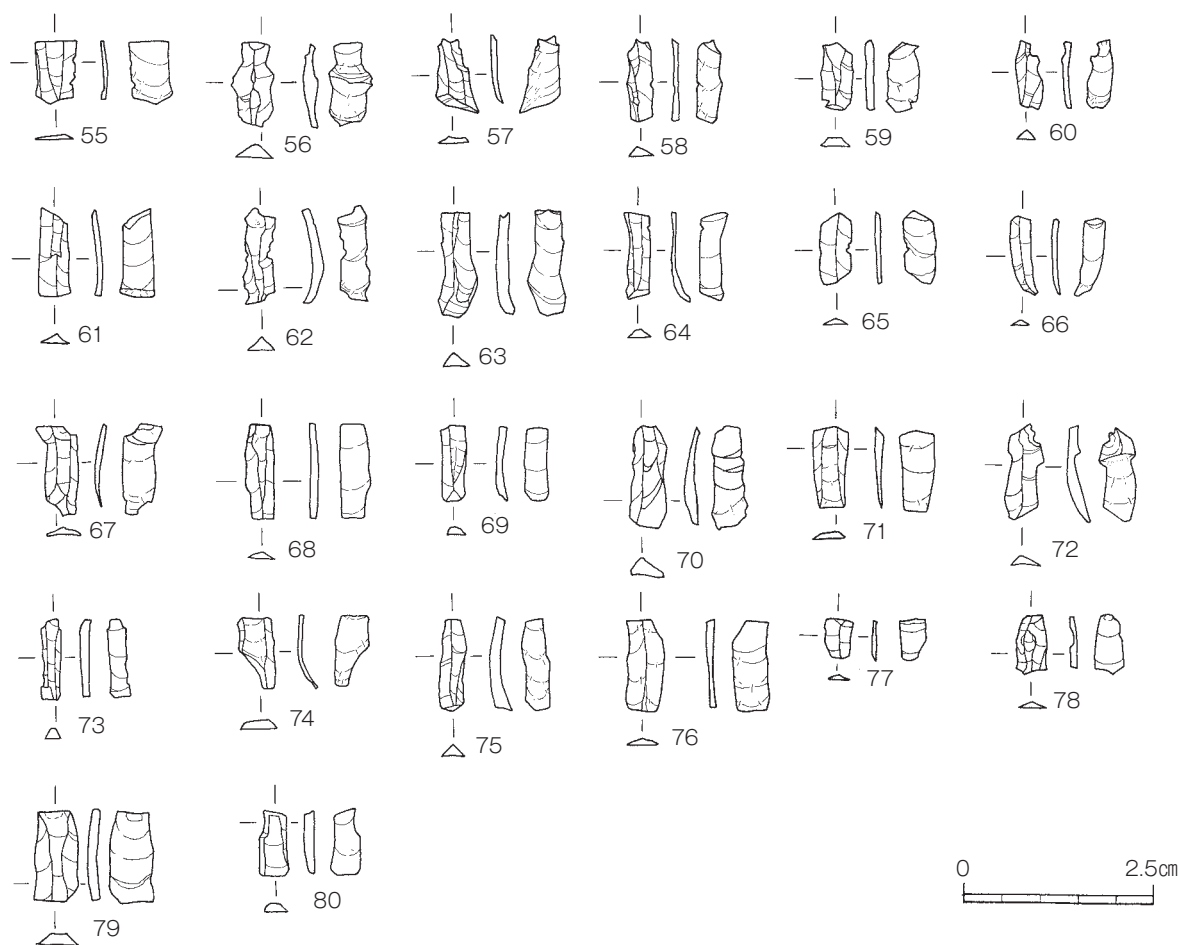
第 24 図 旧石器時代 B ブロック尖頭器, 細石刃核 (1)



第 25 図 旧石器時代 B ブロック細石刃核 (2)



第26図 旧石器時代B ブロック細石刃 (1)



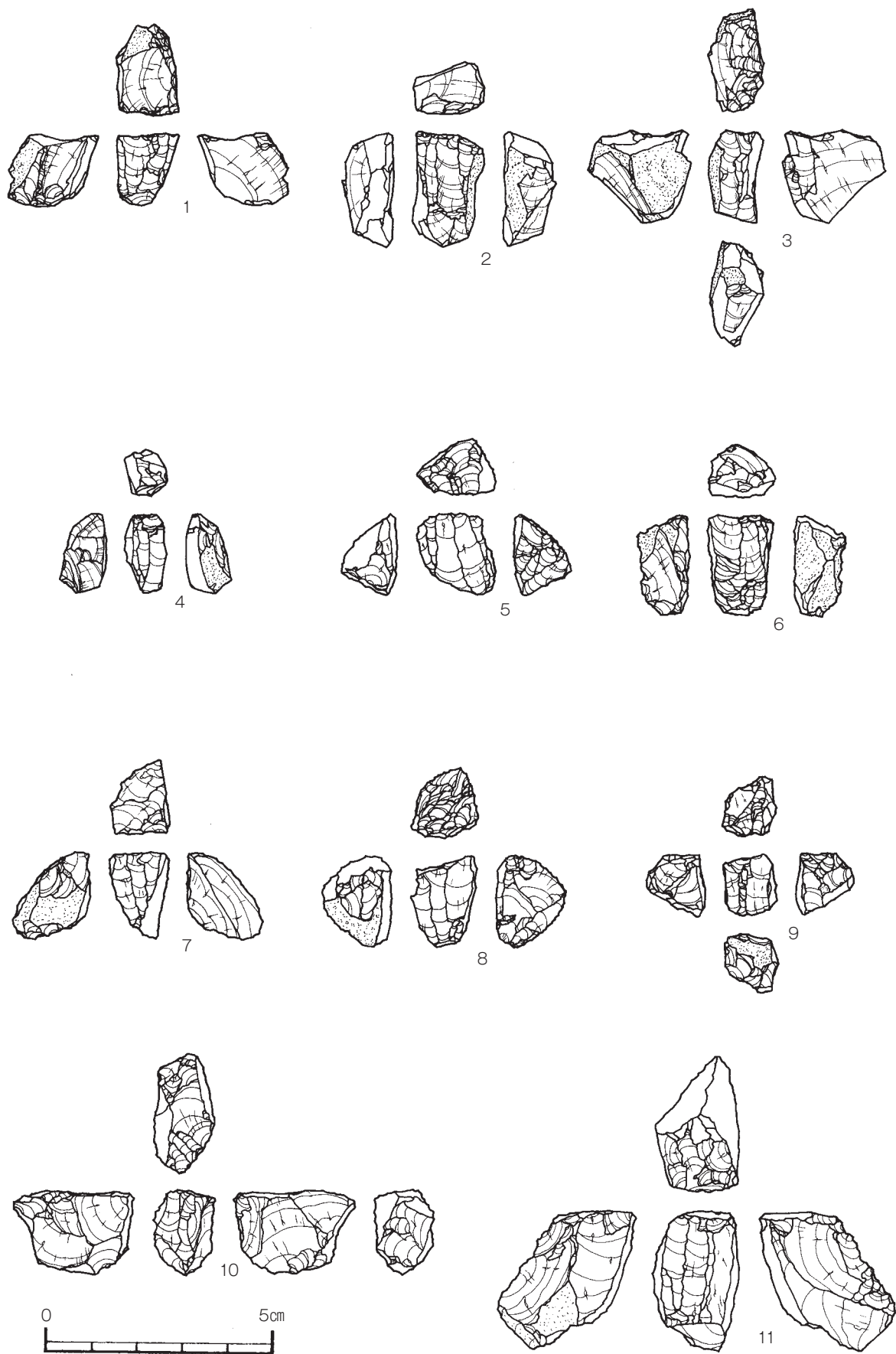
第27図 旧石器時代Bブロック細石刃(2)

する。なお、挿図の打面左下の稜=正面左側の稜が本来の正面(将来の作業面)として捉えられねばならない。そう見た時に、正面と背縁を結ぶ線が器軸と一致する。

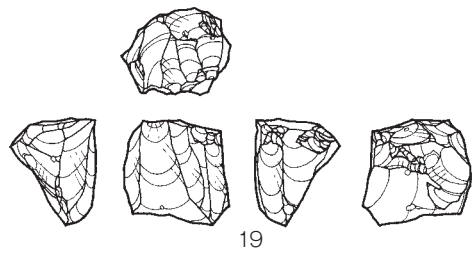
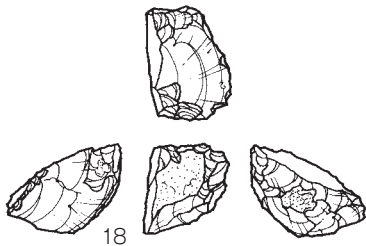
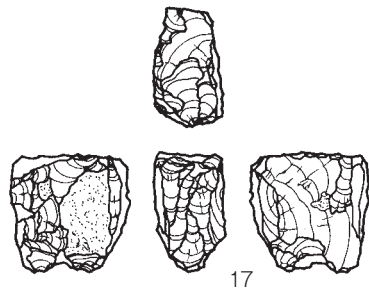
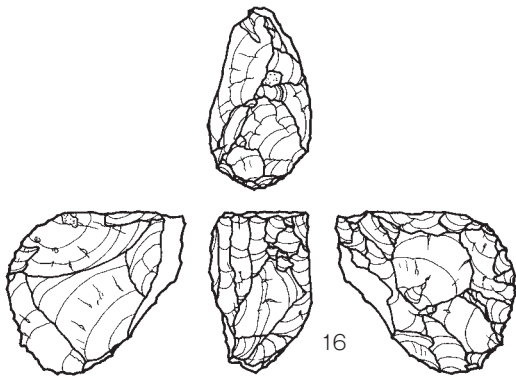
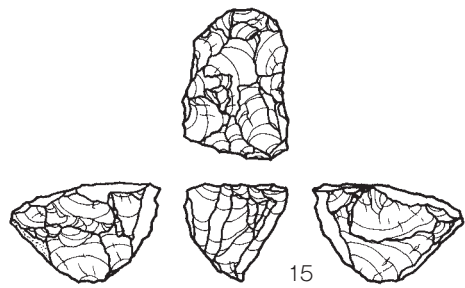
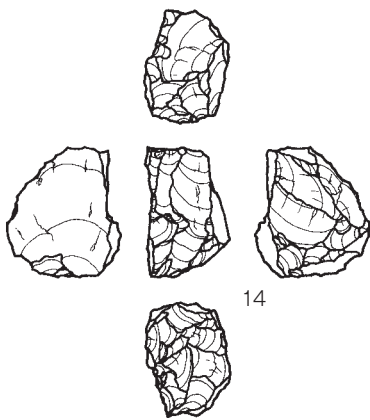
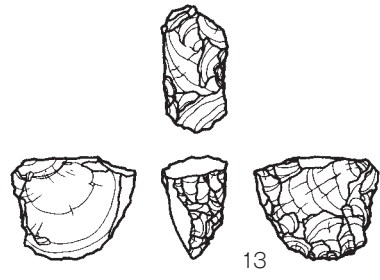
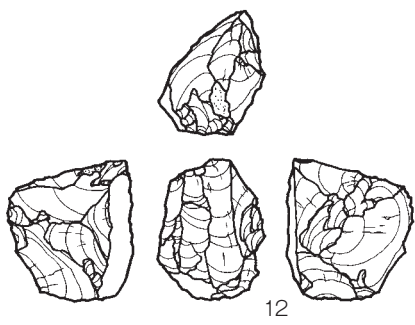
さて、7や13のような、細石刃剥離の進行によって打面の傾斜が強くなる傾向は、ブロック内の細石刃からも裏付けられる。例えば、1~4、13のような長さの細石刃は、7や13のような細石刃核の初期のものから得られる大きさであろうと推測される。特に1は「し」の字状の側面形状を示すことから、作業面再生の際の削刃であろうし、背面に整った細石刃剥離痕を残していることから、そのことが裏付けられる。言葉を換えれば、7や13などは残核であり、一定量の規格性を持った細石刃を生産した結果の形態であるということである。

もっとも、1~4のような細石刃は他のブロックもしくは他の遺跡からの持ち込みという見方も成り立つかも知れないが、前述のような、7、13のような残核の初期で剥離されたものと見なす方が、その蓋然性は高いであろう。

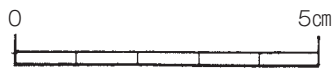
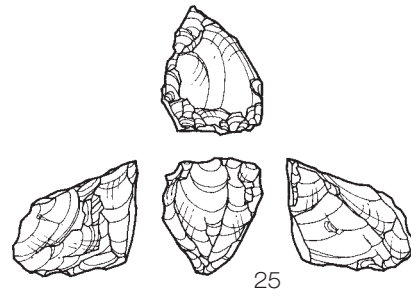
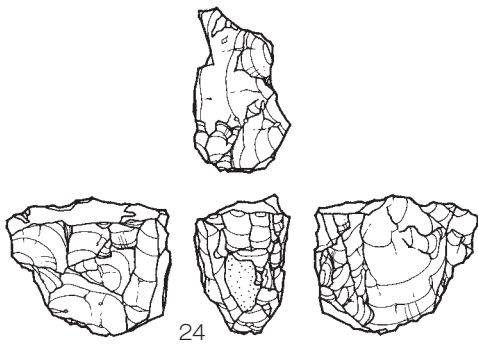
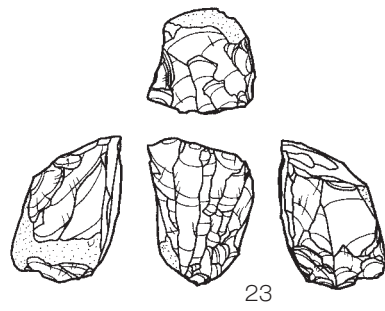
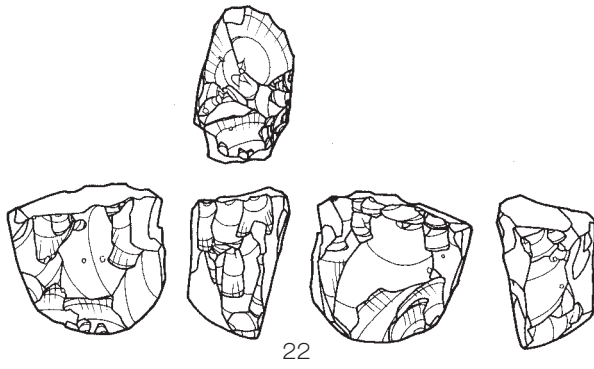
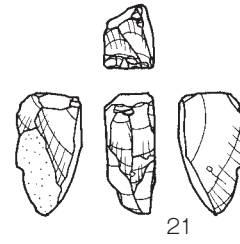
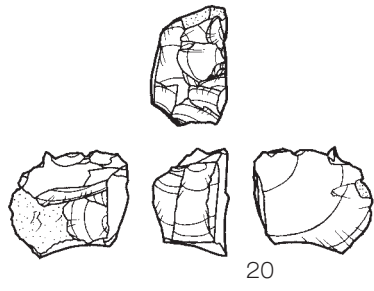
なお、Aブロックでも検出されている、両側縁が不揃いで細く短い細石刃、9~12のような、も多数出土していることは、Aブロック同様、5、6、8、10のように小さな分割礫素材の細石刃核が存在する結果である。



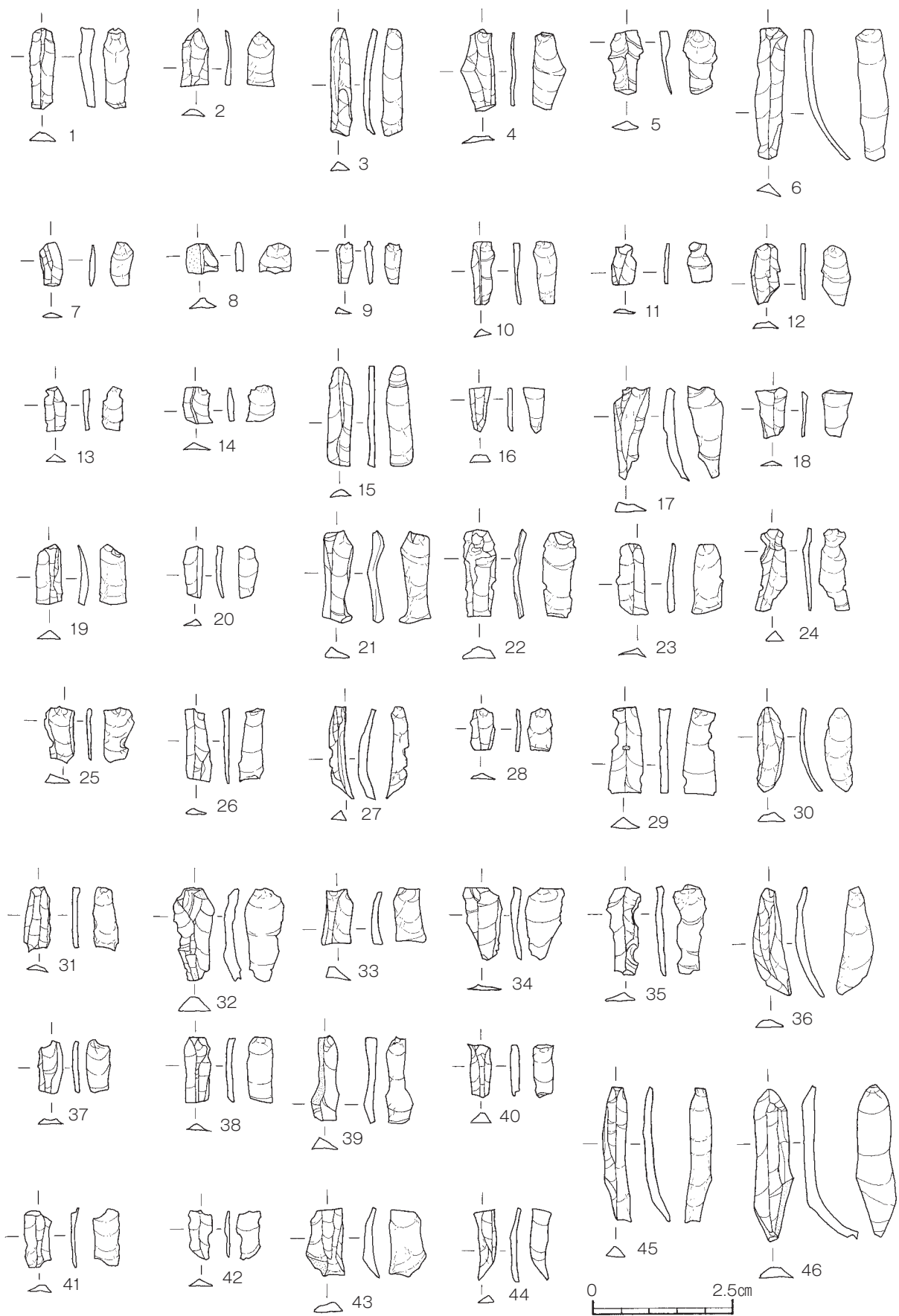
第28図 旧石器時代Cブロック細石刃核 (1)



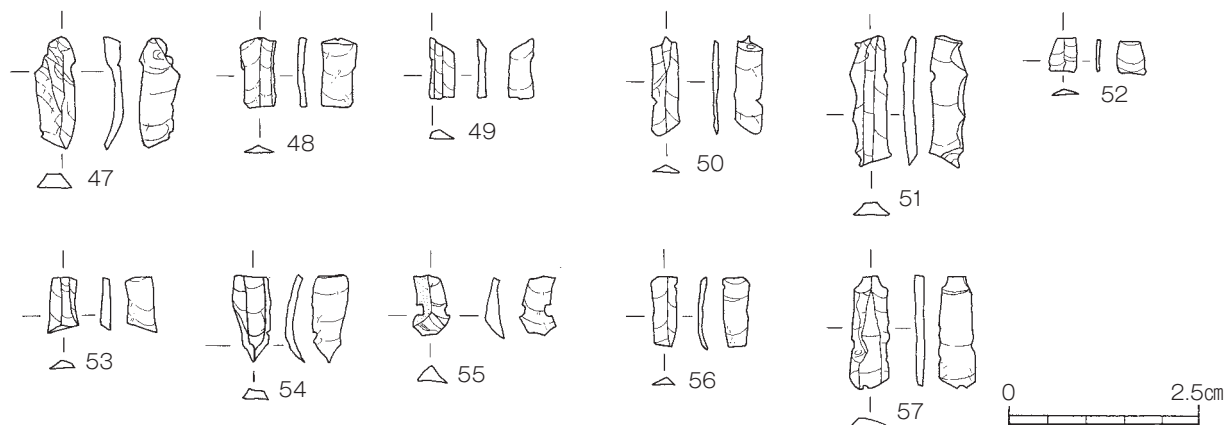
第 29 図 旧石器時代 C ブロック細石刃核 (2)



第 30 図 旧石器時代 C ブロック細石刃核 (3)



第31図 旧石器時代Cブロック細石刃 (1)



第32図 旧石器時代Cブロック細石刃(2)

③Cブロック(第28図～第32図)

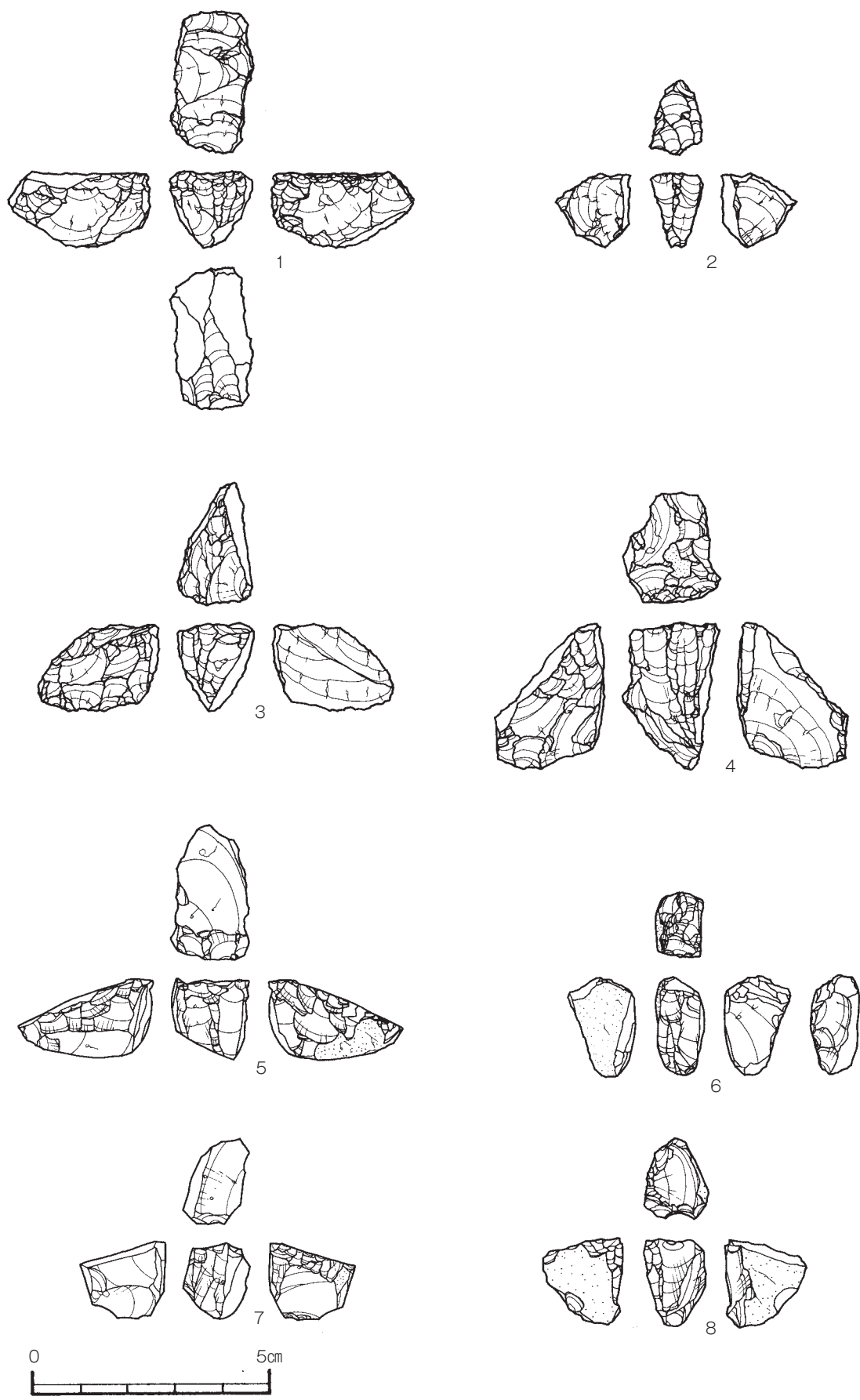
25個の細石刃核と57点の細石刃を掲載した。

この22個の細石刃核のうち、きわめて特徴的なものが16および22である。特に16は小型の両面調整母核を作り、横からの小さい剥離で打面を作成し、作業面正面からの打面調整を行ったもので、打面作出が連続しない事が西海技法と若干異なるところであるが、そのほかは同じ技術であるといえよう。作業面には3条の細石刃剥離しか残されておらず、細石刃剥離が進行していないのはファーストスポールが下縁まで抜けなかったため、作業面がうまく形成されなかったからであろうか。22も同様であるが、下縁および背縁の形成は16ほど顕著ではない。しかし、打面は連続する横からの小剥離で形成されており、この点では西海技法の典型的技術を示す。なお、作業面に球果が出てきて、そこで細石刃剥離が階段状剥離になってしまい、放棄されたものようである。

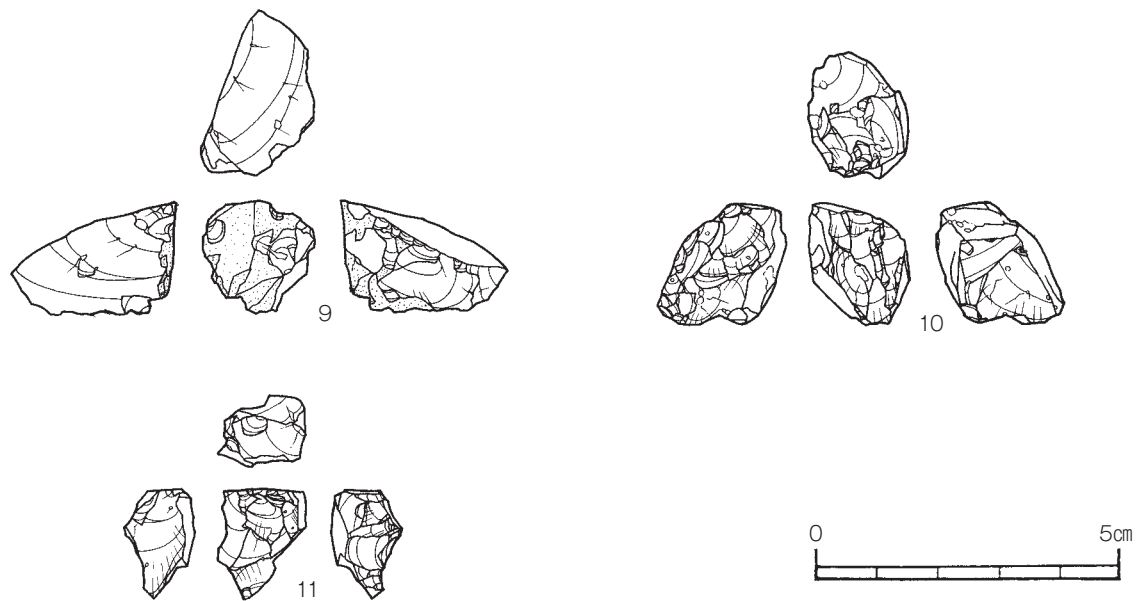
このほかにも、10・12・13などが同じように西海技法のような技術的特徴を持つものである。10は背縁の形成がさほど顕著ではないが、それは、剥片素材というよりも、小さな分割礫素材であったためと思われる。左側面左下の剥離、右側面右上の剥離、打面奥の小剥離は素材となった分割礫のまま残っているから、そのようなことが推定される。12は、打面が、左下に著しく傾斜している。作業面下端にはわずかではあるが礫皮面が残り、母核もさほど大きなものではなかったことが分かる。13は左側面左上に素材となった剥片のポジティブ・バルブが残り剥片素材であることが分かる。下縁調整は丁寧であるが、背縁は形成されておらず、両面調整母核ではないようである。

これらとは別の技術的特徴を持つ別の一群がある。15・17・24・25などである。両面調整母核を作らず、素材となる剥片の切断面を打面にし、そこからの加撃で側面を形成し、下縁、背縁を調整し、断面形状がくさび形になる一群である。船野型細石刃核の技術に近い。15は背面に礫皮面を残し、右側面の上の方の剥離は打面を切っており、左側面下の剥離で下縁が作られている。24・25も同じような特徴がある。17は、背縁調整が施されておらず、下縁の調整も球果があつてうまくいっていない。

細石刃を見ると、このブロックでは1・10・15・23などが平均的なサイズであるが、中には6・45・46のようなやや長いものもあり、Bブロックで述べたような、細石刃剥離につれて打面調整、作業面調整によって細石刃核が小さくなったためであろう。



第33図 旧石器時代Dブロック細石刃核 (1)



第34図 旧石器時代Dブロック細石刃核 (2)

④ Dブロック (第33図～第35図)

このブロックでは、9個の細石刃核と1個の母核、1個の作業面作出剥片、18本の細石刃が抽出できた。細石刃の数が極端に少ないのがこのブロックの特徴である。

このブロックの細石刃核の特徴は1・3・4・5のような船野型細石刃核があることである。

1はおそらく分割礫素材であり、打面となる剥離面からの加撃で側面調整が施され、断面くさび形に仕上げられている。正面にした作業面ではごく小さく短い細石刃剥離痕が3条残されているだけであるが、打面の反対面として描いた面には2条のやや大きく長い細石刃剥離痕が残る。この作業面は4のような極端な傾斜打面となるものである。このことは、同じ細石刃核から二つの規格で細石刃が得られたことを意味し、類例に乏しいであろう。

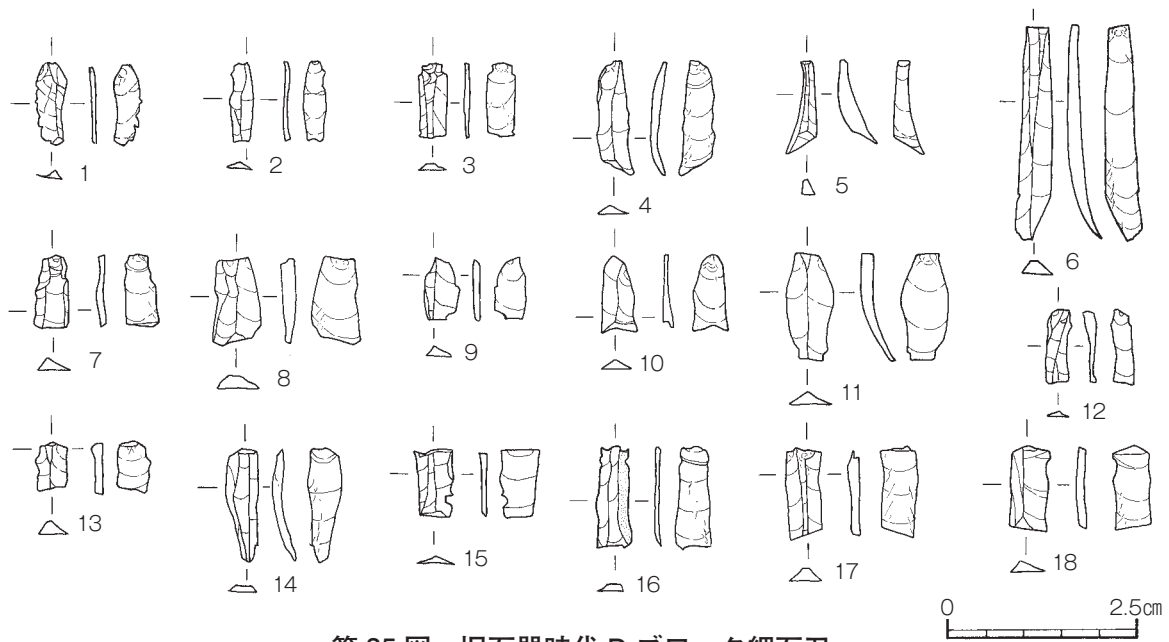
3は打面からの加撃による側面調整がほとんど省略された個体であり、右側面には調整剥離が見られず、左側面右上に1枚だけ調整剥離があり、左側面下の下縁調整で断面くさび形に仕上げられている。打面調整は横からも加えられている。

4は細かな打面調整によって作られた狭い打面を水平において図化したため異様な形状に見えるが、1や3と同様な技術的特徴を持つ。ただし、左側面の調整の後打面を横からの加撃で再度作り直しており、この打面の作り直しが極端な傾斜打面を引き起こしたのかもしれない。

5も分割礫を素材としており、打面からの側面調整は典型的な船野型細石刃核の特徴を持つ。下縁が斜めに裁ちきられたように見えるのは、打面の反対面が斜めになっていたからであり、この位置関係を調整しないでも、必要とする規格が得られたのであろう。

9は1・3・4・5のような細石刃核の母核であろう。打面となるであろう面から側面調整が施されている。逆の言い方をすれば、この程度の調整剥離を施し、11のような剥片を剥離して作業面作出が行われ、細石刃核となるのであろう。

このブロックの細石刃もやや異なるサイズの2群に分けられる。1・3・4・5は同じような細



第35図 旧石器時代Dブロック細石刃

石刃核であるが、1の細石刃核の箇所でも述べたように、本来の打面と極端な傾斜打面とで二つの規格の細石刃が得られたからである。

⑤ Eブロック (第37図, 第39図)

このブロックでは9個の細石刃核、3個の同母核と28本の細石刃を抽出した。

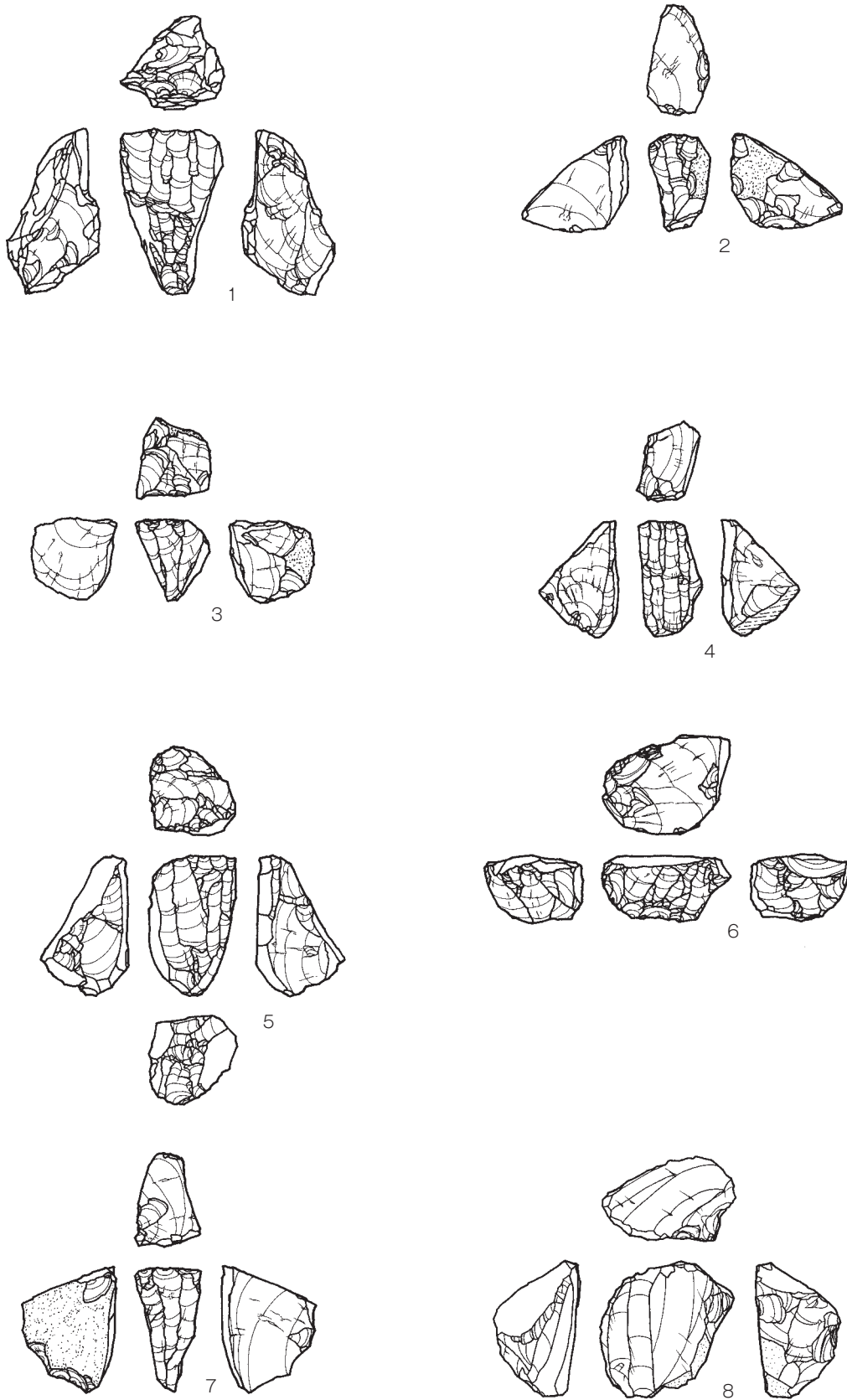
先のDブロックと同じような極端な傾斜打面をもつ細石刃核が4個ある。1・2・4・5がそれであるが、大きさにおいて1・5と2・4に違いがある。1・5はDブロックで見られたように船野型細石刃核をもとにしたものであり、大きさもDブロックのものと変わらない。2・4は野岳・休場型細石刃核であり、3・7・8・12とおなじであるが打面角を変えることで細石刃の大きさを変えたのであろう。

9は野岳・休場型細石刃核の母核であろう。細くなった分割礫の一面に打面調整が入っており、細石刃剥離を試みた形跡もあるが、うまくいかずに放棄されたものと思われる。10・12は船野型細石刃核の母核であろう。打面からの側面調整、作業面調整が施されているが、その段階で終わっているものである。

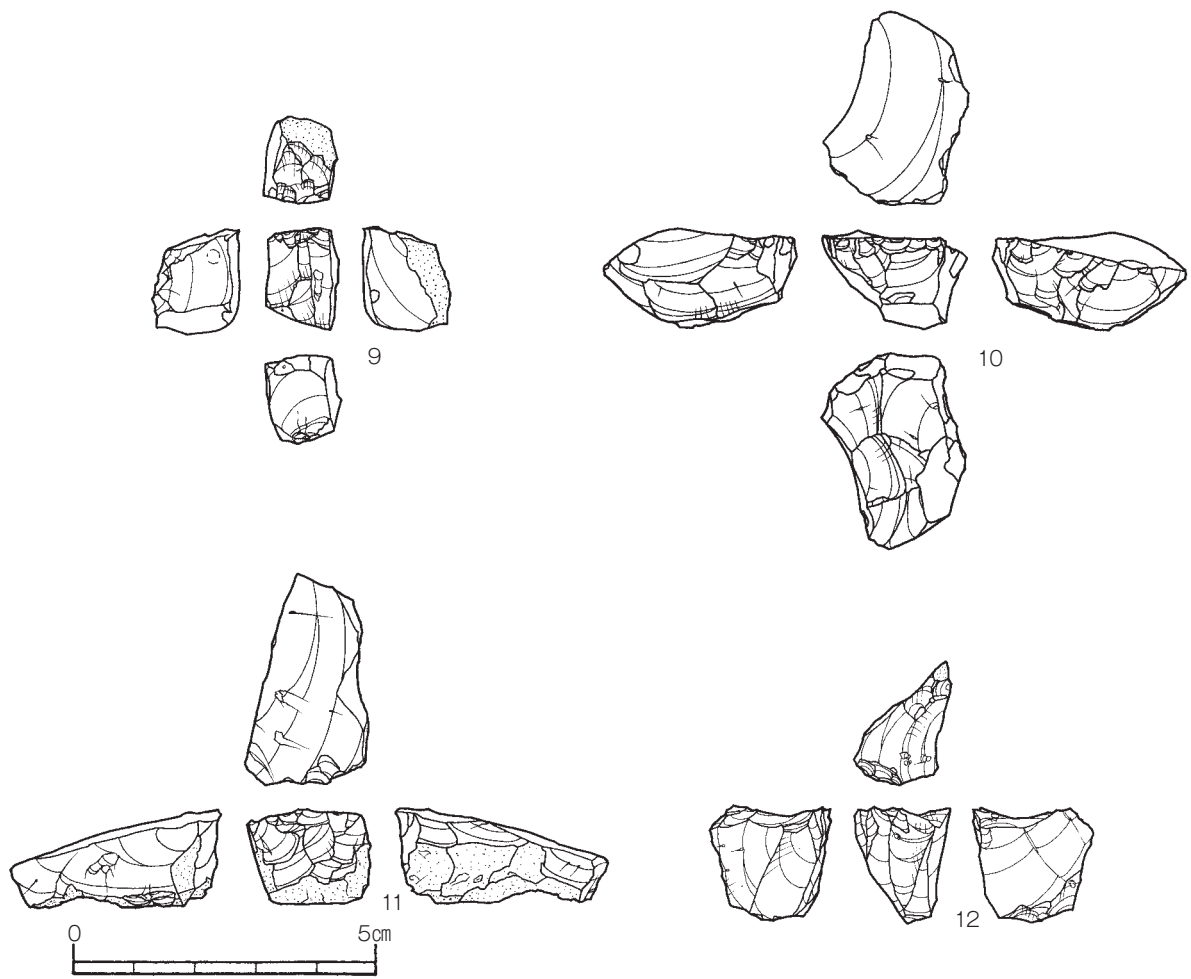
このブロックの細石刃も他のブロックと同様に大きさから二群に分けられる。特に5, 6, 22は大きいですが、先に細石刃核のところでも述べたようなことがあるからであろう。また、6は作業面調整剥片でもあろうが、この曲がり具合から、打角の変更に伴う作業面の調整であり、先に述べたことはこの調整剥片からも裏付けられる。

⑥ Fブロック (第38図, 第39図)

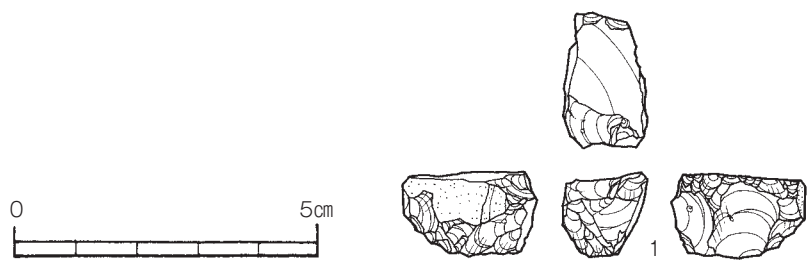
1個の細石刃核母核と3本の細石刃が出土している。母核は船野型細石刃核のそれであり、側面調整、下縁調整が顕著である。



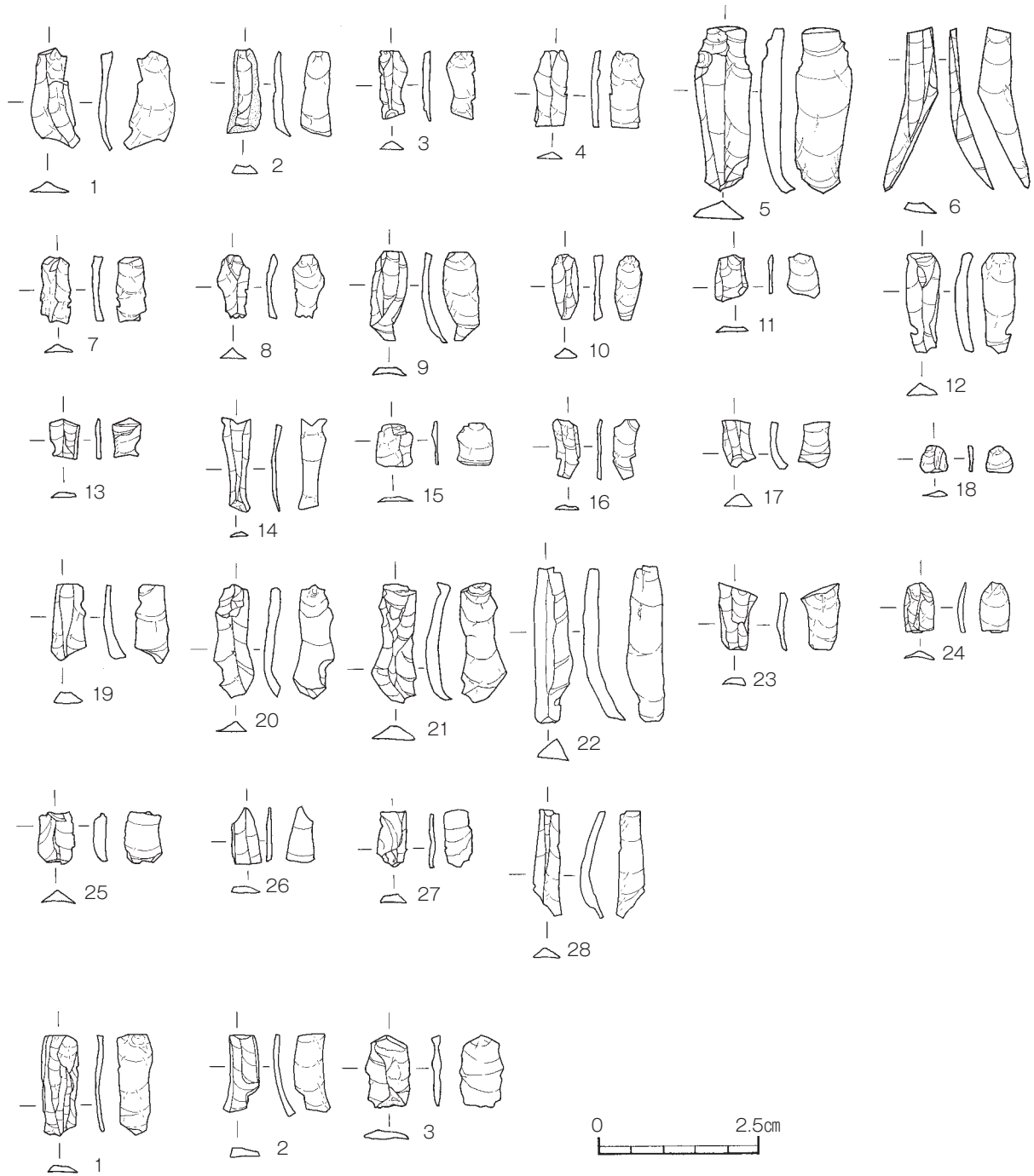
第 36 図 旧石器時代 E ブロック細石刃核 (1)



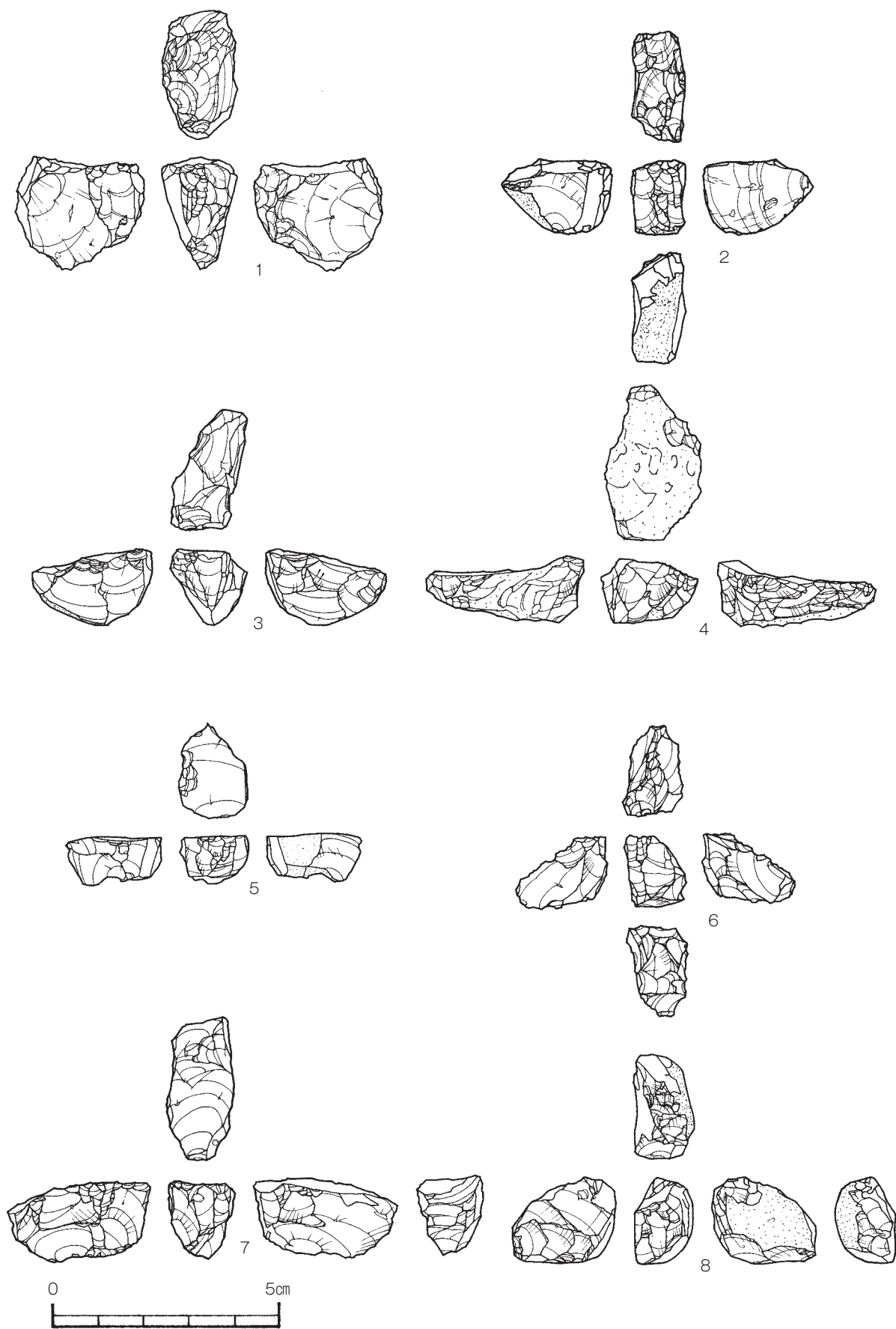
第 37 図 旧石器時代 E ブロック細石刃核 (2)



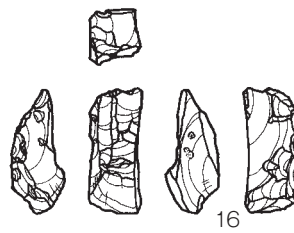
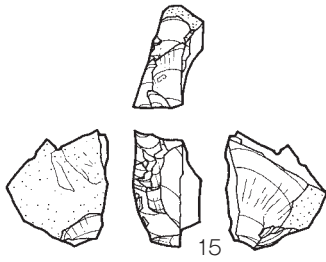
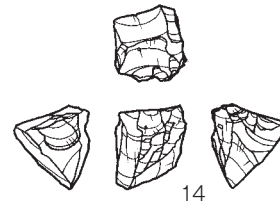
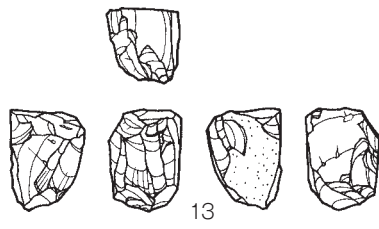
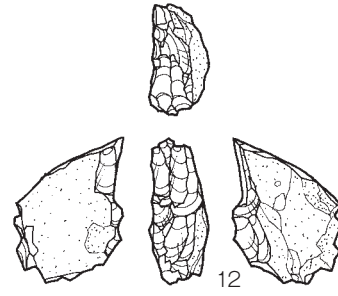
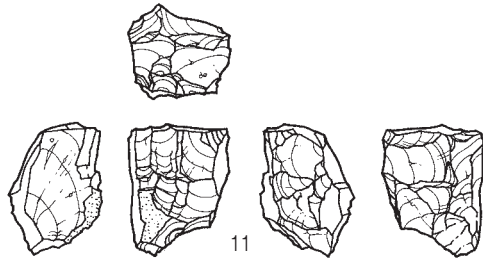
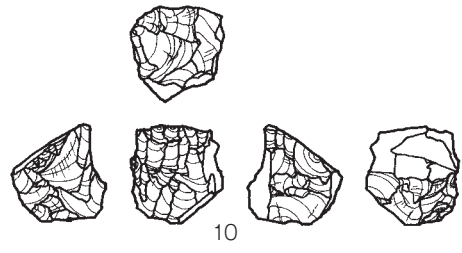
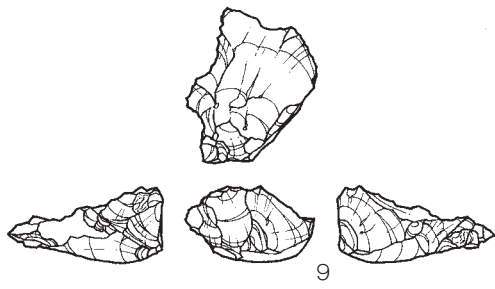
第 38 図 旧石器時代 F ブロック細石刃核



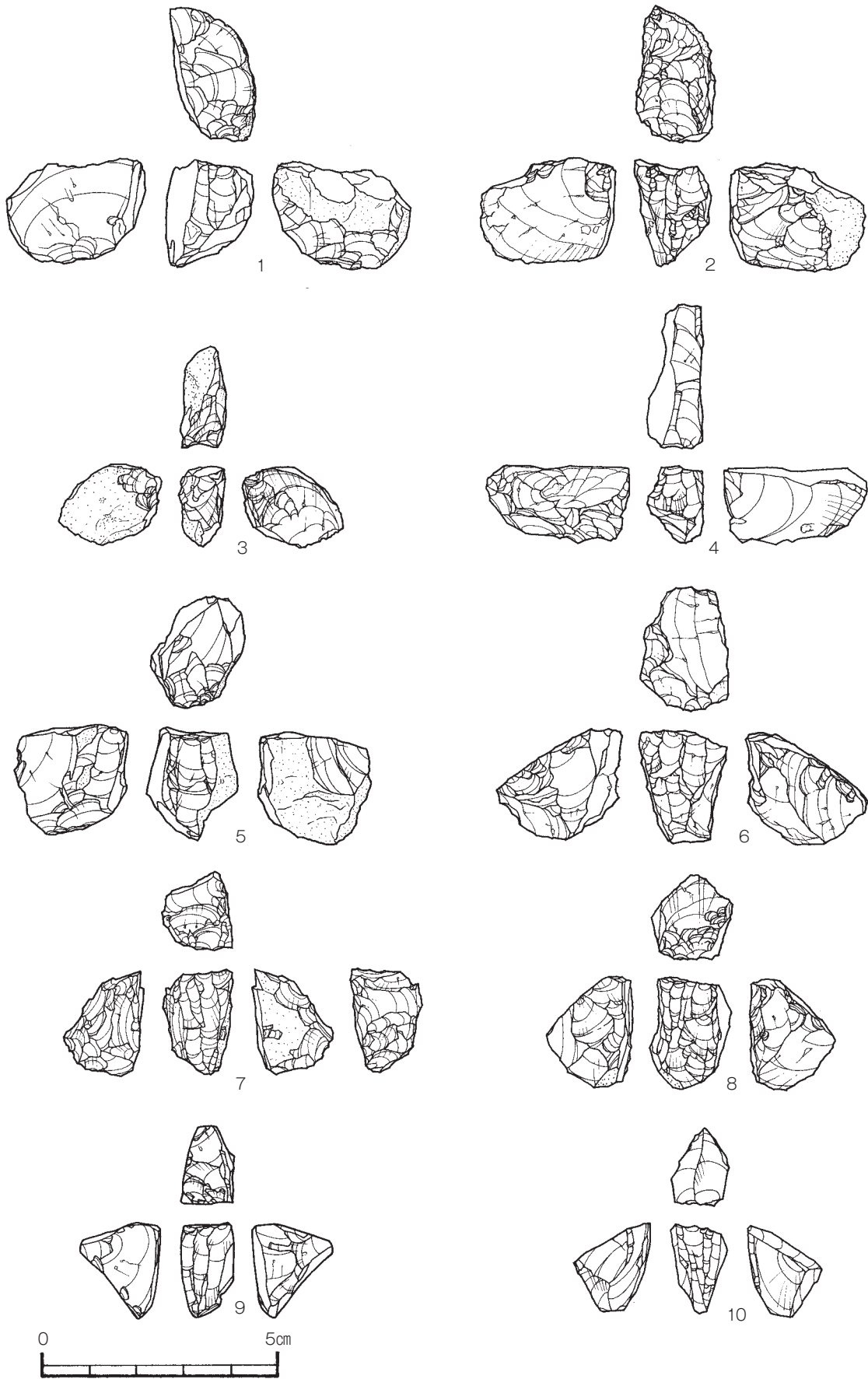
第39図 旧石器時代E, Fブロック細石刃



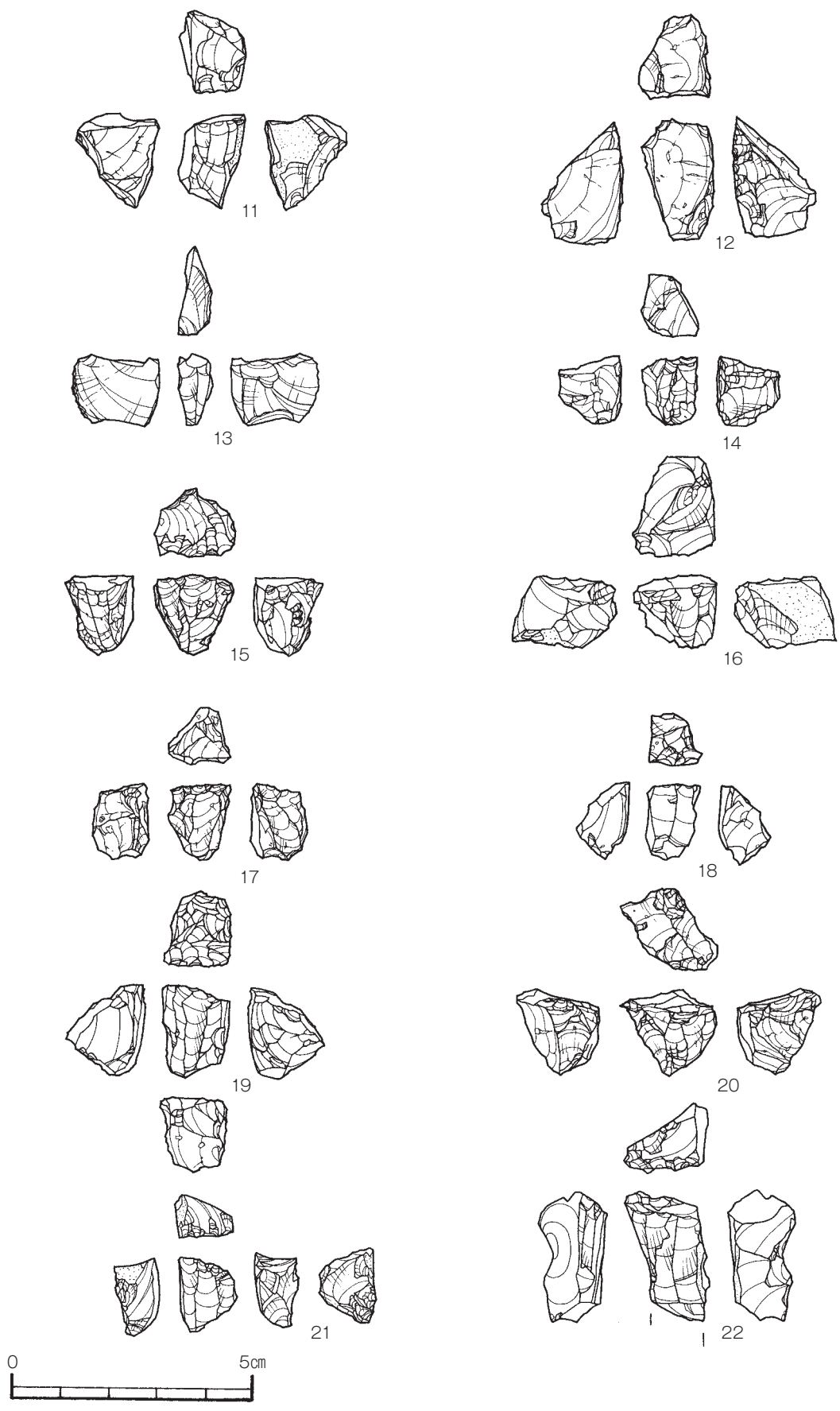
第 40 図 旧石器時代環状分布内細石刃核 (1)



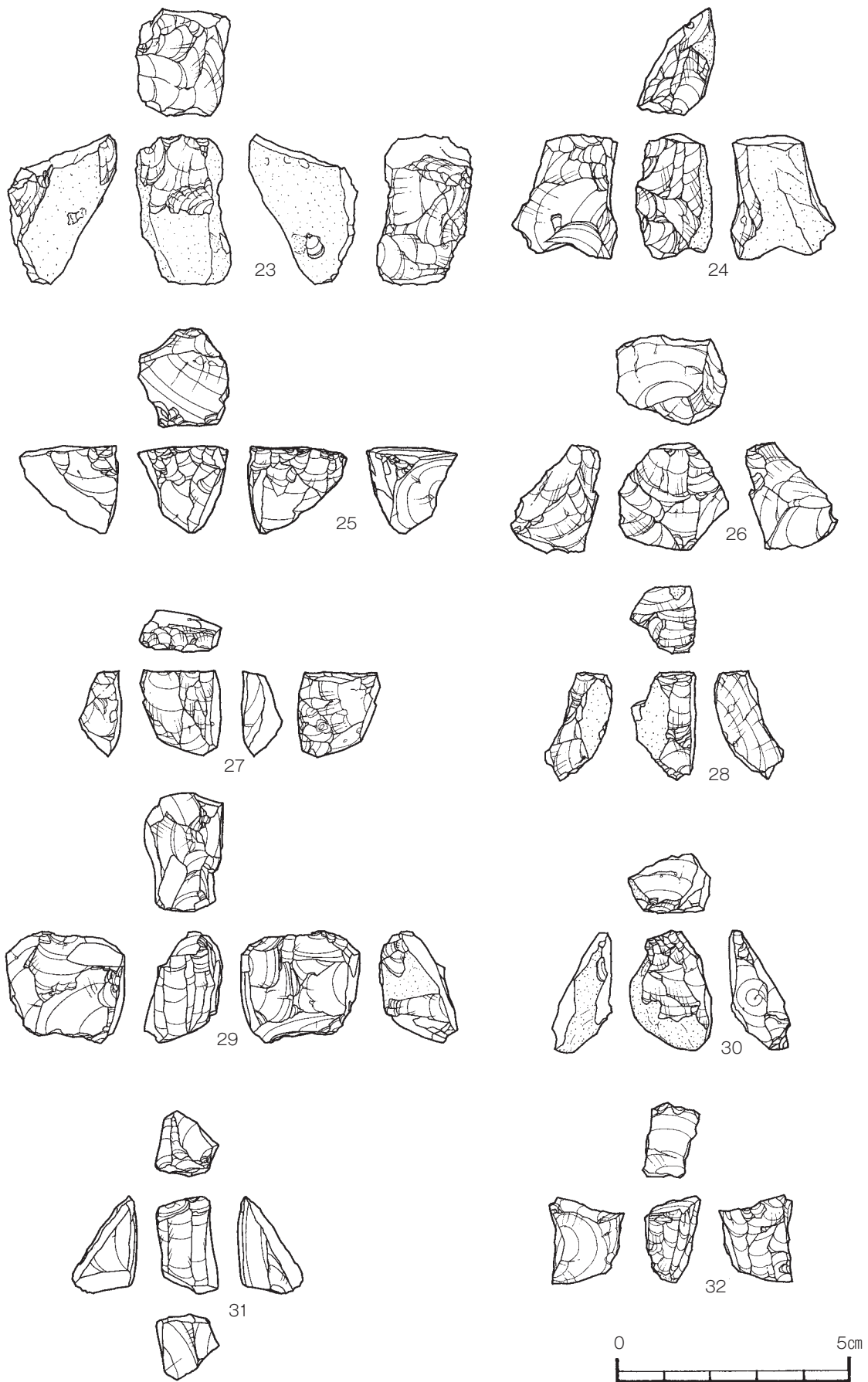
第 41 図 旧石器時代環状分布内細石刃核 (2)



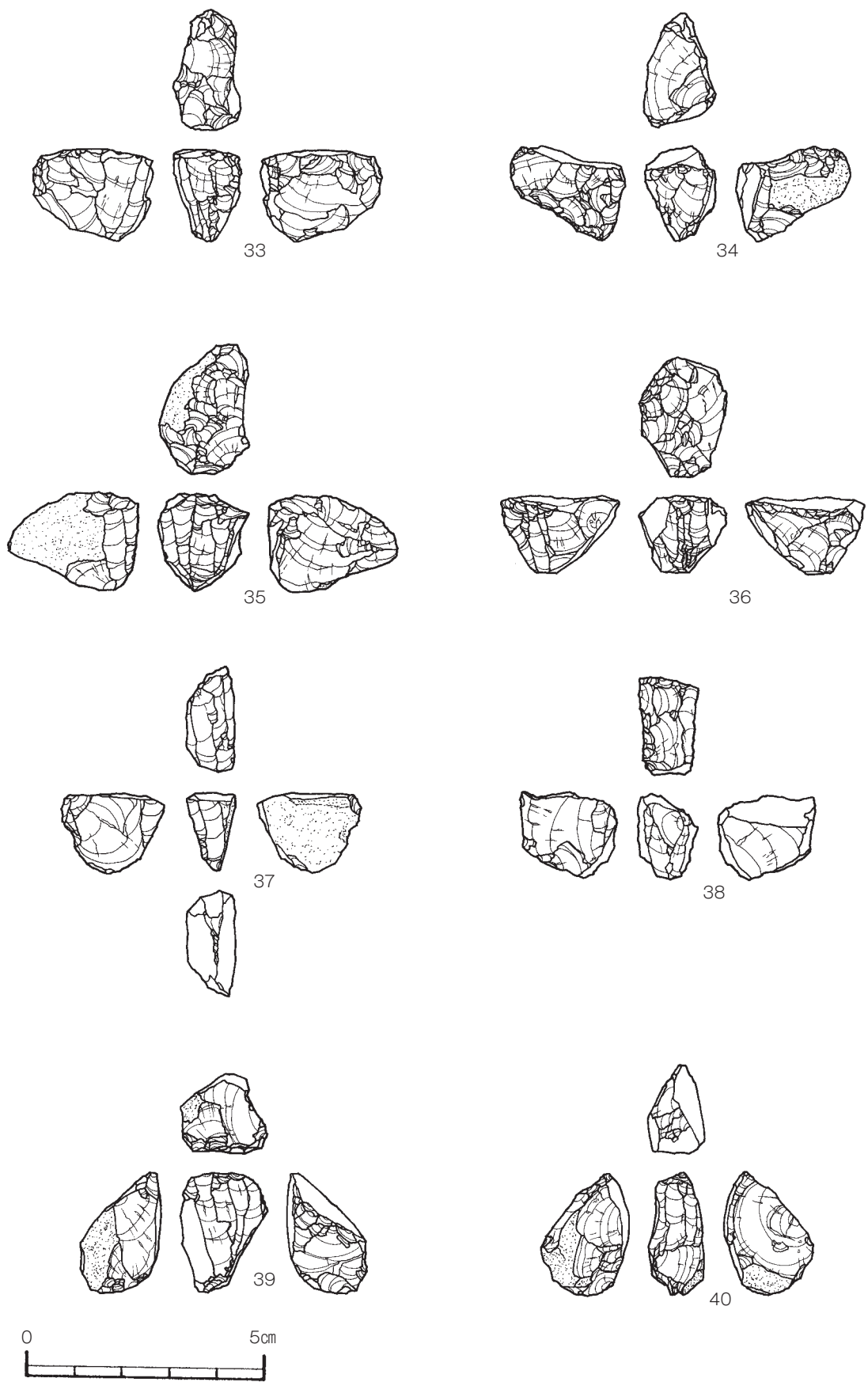
第 42 図 旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (1)



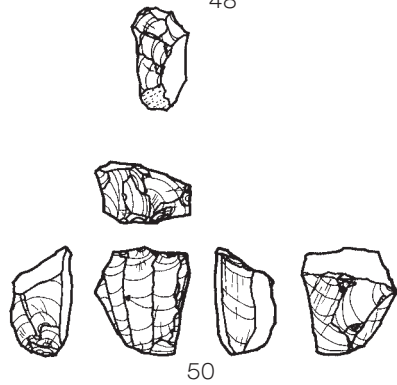
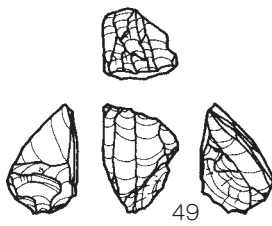
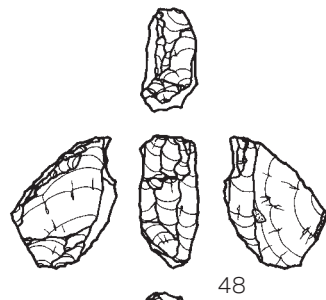
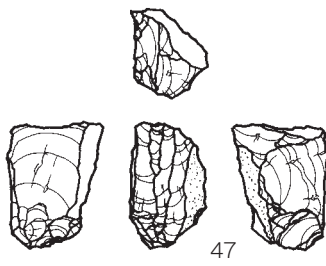
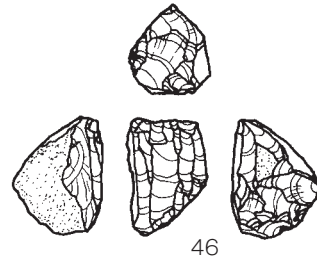
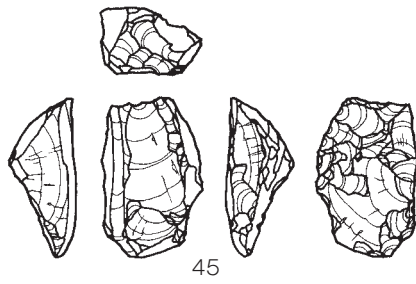
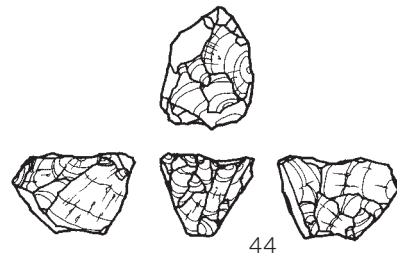
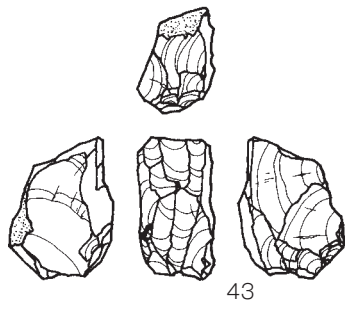
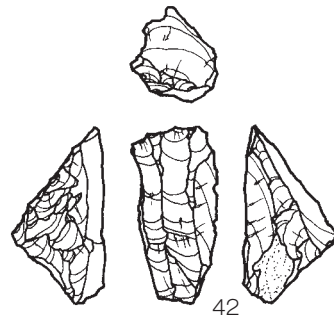
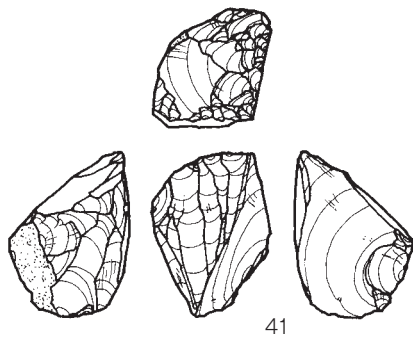
第 43 図 旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (2)



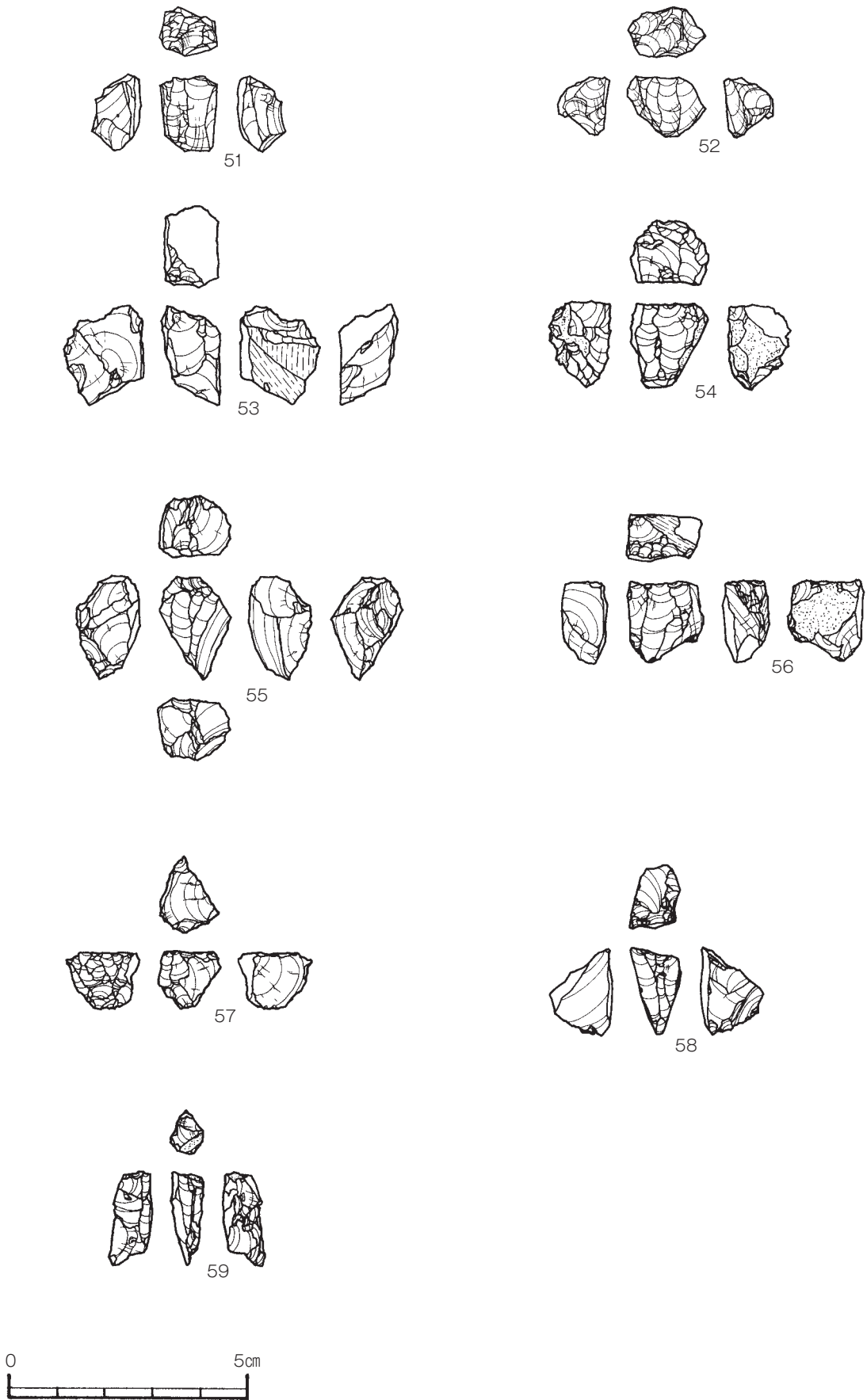
第44図 旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (3)



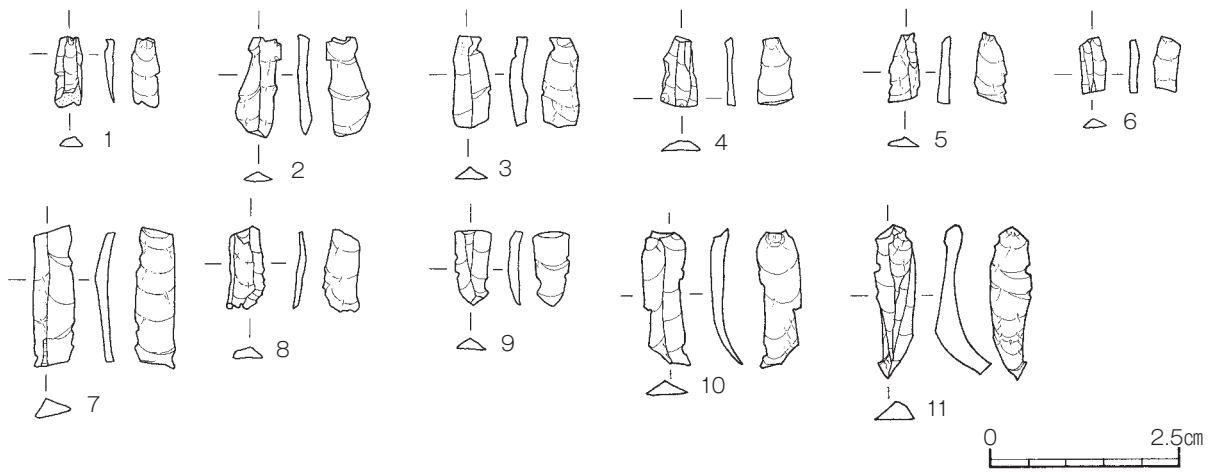
第 45 図 旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (4)



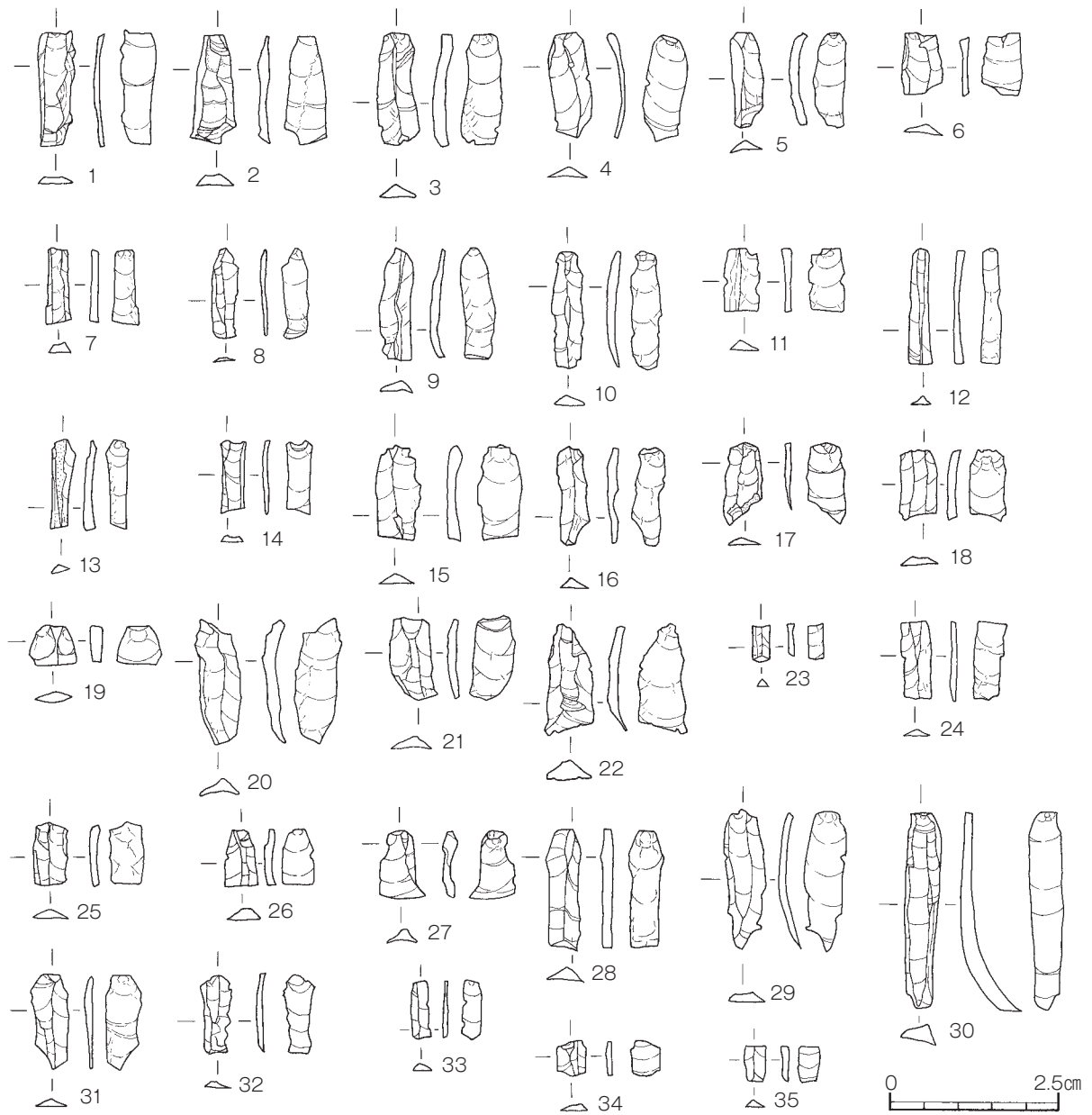
第 46 図 旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (5)



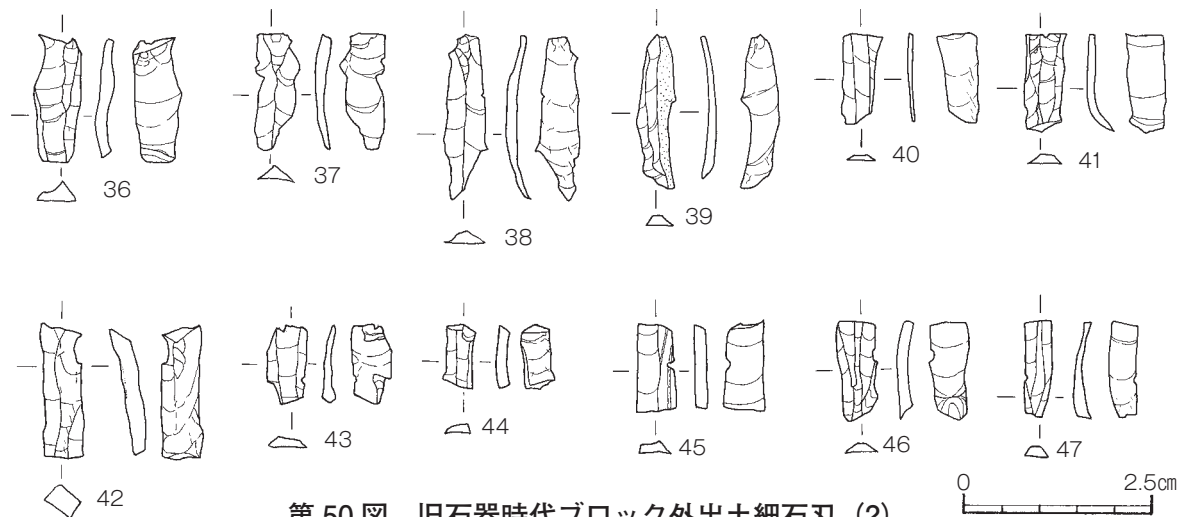
第 47 図 旧石器時代ブロック外出土細石刃核 (6)



第 48 図 旧石器時代環状分布内細石刃



第 49 図 旧石器時代ブロック外出土細石刃 (1)



第 50 図 旧石器時代ブロック外出土細石刃 (2)

⑦環状分布内及びブロック外 (第 40 図～第 50 図)

A～Fブロックの他に、Fブロックを含める形でまばらではあるが環状に分布する一群があり、他のブロックと区別した。また、これら以外にもブロックを形成しないまばらな分布をする一群もあったので、ブロック外として一括するものである。

環状分布内には 16 個の細石刃核と 11 本の細石刃が出土しており、ブロック外からは 59 個の細石刃核と 47 本の細石刃が出土している。合計 75 個の細石刃と 58 本の細石刃である。

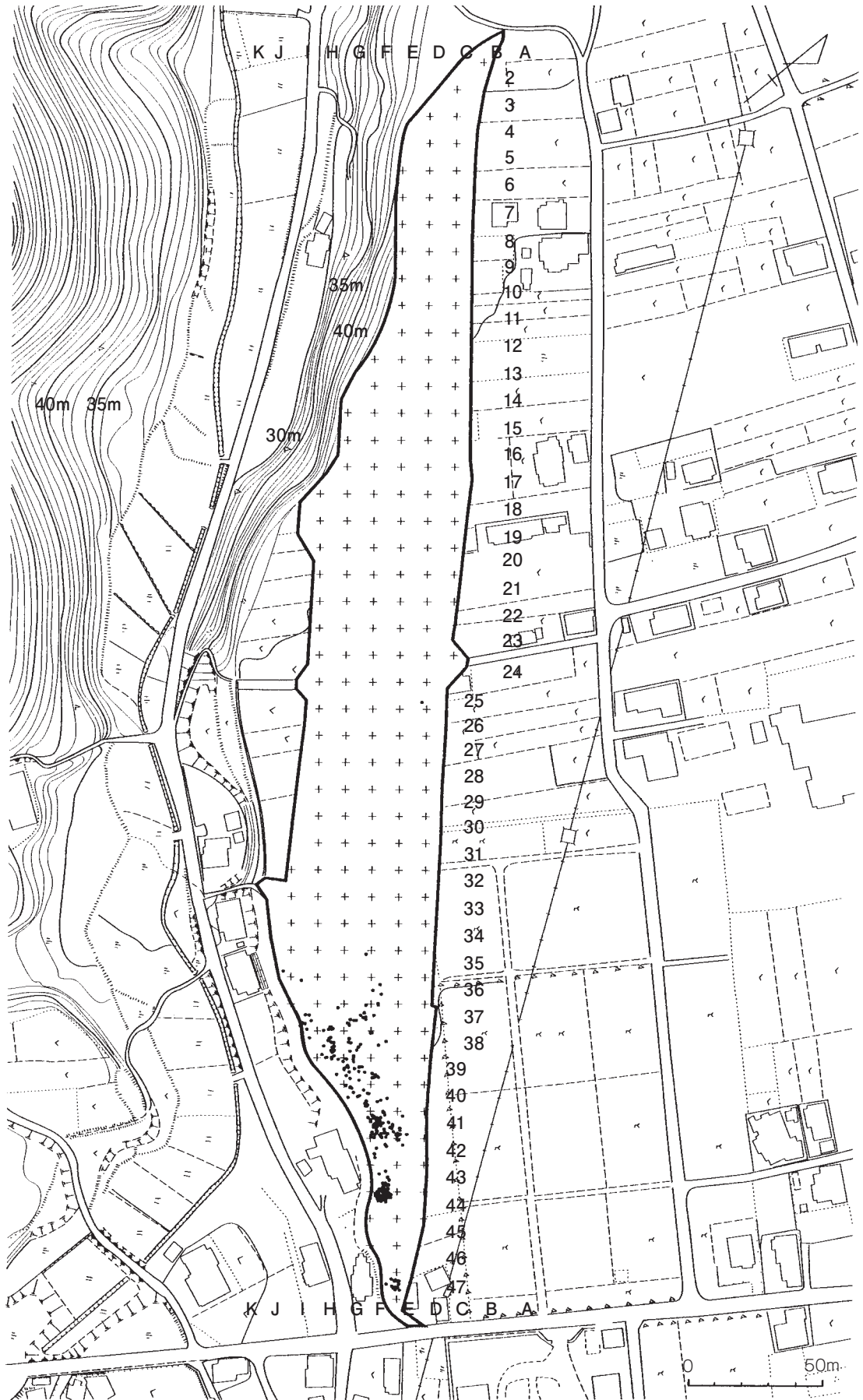
このうち特に注意したい個体がブロック外の 1, 2, 33～35 である。剥片を素材とし、両面調整もしくは片面調整の母核を作り、側面からの連続する小剥離で打面を形成しており、西海技法と同一の技術である。福井型細石刃核に分類できるであろう。1, 2, 35 は礫皮面を残す剥片を片面調整しており、33, 34 は一部礫皮面を残すものの両面調整の母核である。

また、ブロック外の 6 は C, D ブロックにあったような船野型細石刃核を傾斜打面に変え、より長大な細石刃を得られるようにした細石刃核である。

A, B ブロックの項で述べたような楔形細石刃核への指向が強い野岳・休場型細石刃核も多い。7～10 などである。7, 8 は長さの規格を維持するためか、本来の打面を調整し、傾斜打面に作り変えている。下縁調整や背縁調整のない細石刃核が最も多いが、いずれもごく小さいことと細石刃剥離痕も少ないことに留意しておきたい。なお、大まかではあるが、大きさを比較すると福井型と傾斜打面の船野型がほぼ同じ大きさで一番大きく、次に平坦打面の船野型、その次が楔形への指向が強い野岳・休場型で、一番小さいのが細くなった分割礫素材で下縁・背縁調整のない野岳・休場型となる。

細石刃は、以上のような細石刃核の大きさを反映して、ブロック外の 23, 33, 34 の極小のものからブロック外の 29 や 30 ようにやや長大となるものまでである。さらに、両側縁が不揃いで背面に細石刃剥離痕を残さない細石刃が多いのは、側面調整が粗く細石刃剥離も少ないであろう野岳・休場型細石刃核が数の上で多いことに起因することである。

また、頭部調整が施されない上にフラットな打面を残す細石刃が多いのも、側面調整が粗く細石刃剥離も少ないであろう野岳・休場型細石刃核が数の上で多いことに起因することであろう。



旧石器時代全出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(140)
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(X X IX)

市ノ原遺跡(第3地点)【第1分冊】

発行日 2009年3月

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
電話番号 0995-48-5811

印刷 (株)イースト朝日
〒891-0122 鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7
電話番号 099-266-5522

